

此本作者を紅葉山なにかしと並べたるからは、二人の合作

あるべからず。紅葉山人は人も知れり、さて「なにかし」は

誰誰にても、隠すものならば強ひては問はぬが

讀む本ならねば、世の知らぬ人の書きたりと

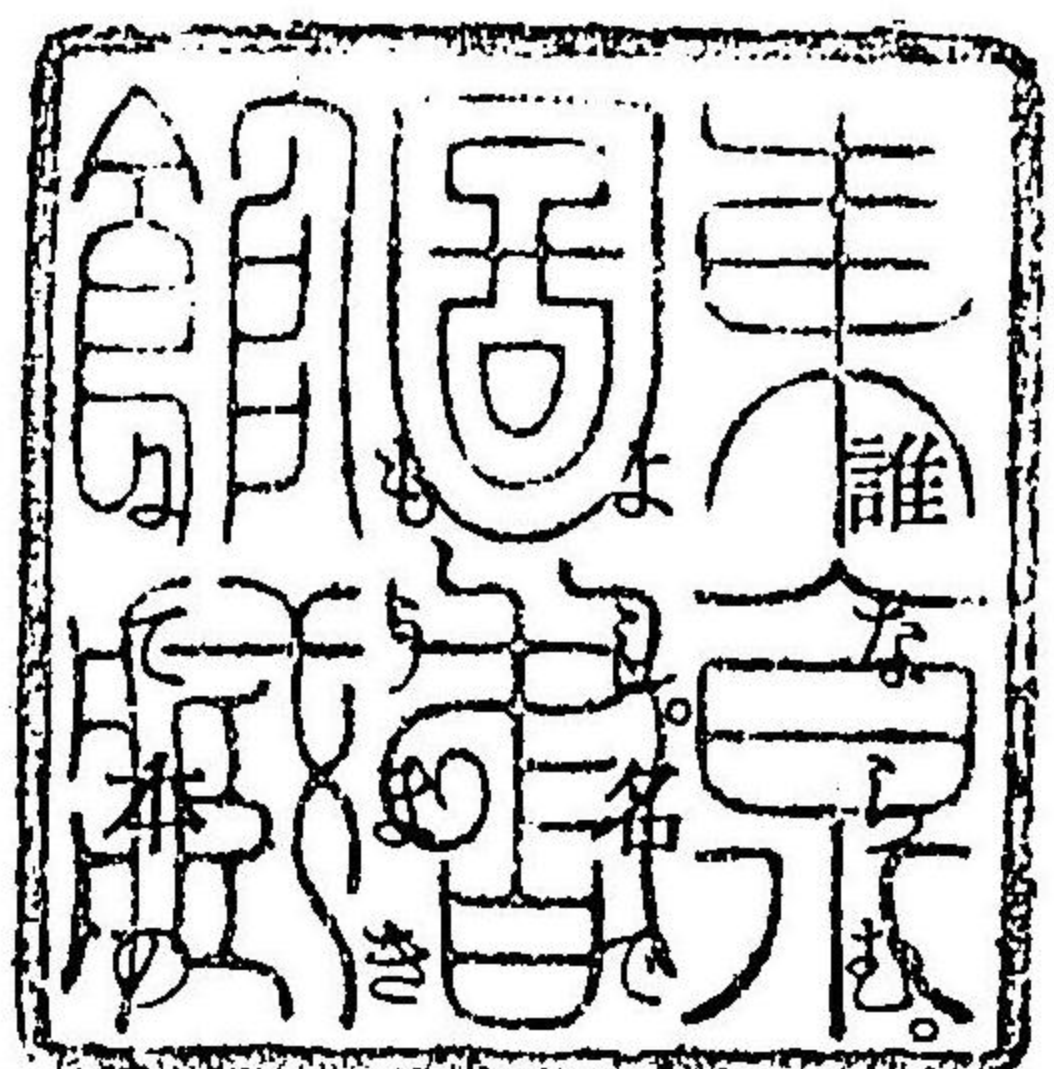
はうまさよ相違あるまじく、うまいならば其

用は足れり。或人の曰く、紅葉のなよがしは、孔

明の藁人形なり、恐らくは矢種の盡きたる故の遺練な

らむと、世間は廣ければ、色々とおもしろ事言ふ人多し。

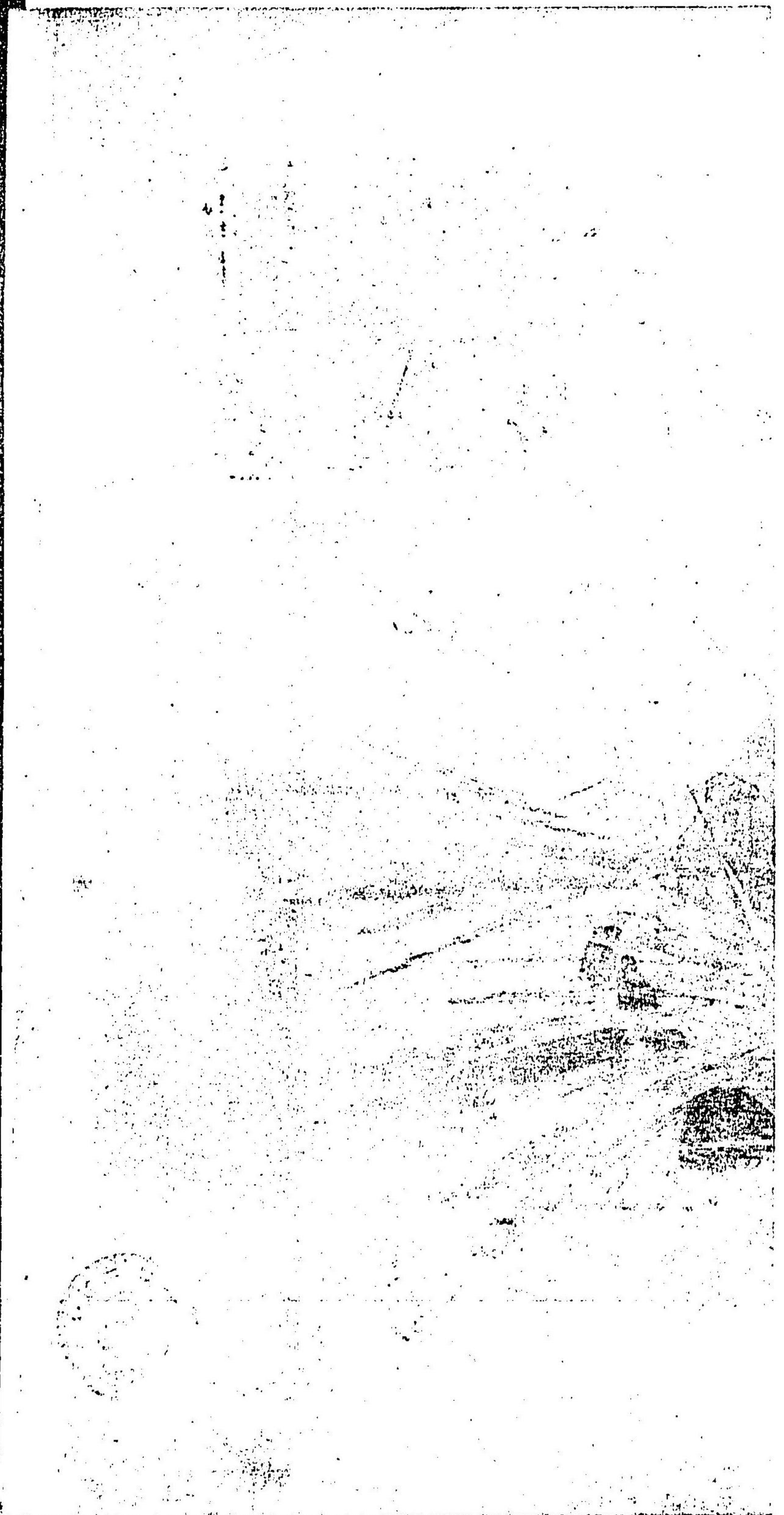
本人は香を焚き、琴を弾じてゐるのじやと言へり。山は





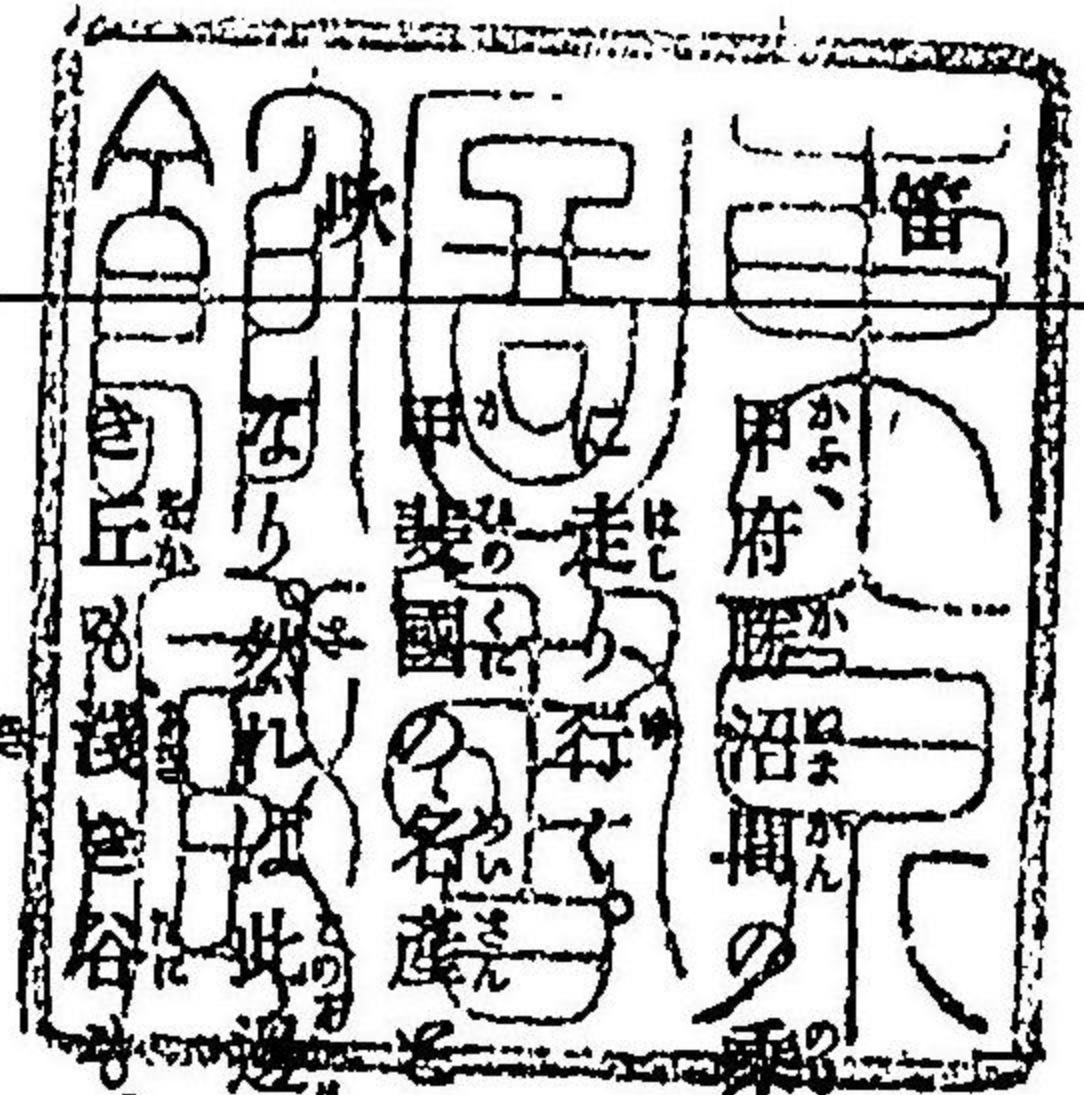
動かず、水は流るゝ、おのがまゝの世の中、作者は書きたいこと書いて上手がれば、看官は見たいもの見て好きな事言ふぞ。はて何方が何方やら。

横町の老友 三 俠 一 素



笛吹川

紅葉山
人し



抑も什麼人ならむ

甲府縣沼間の桑合馬車は今しも栗原驛を過ぎて田舎道の土烟に裏まれつゝ燕直
 甲斐國の名産を聞えたる葡萄の多くはこの栗原勝沼兩驛の間なる村々の特産物
 なり然れど此邊の眺望の漫に空洞にして極めて變化無きこと言語に絶えたり。低
 き丘も淺き谷も野も山も總て豊腴なる葡萄園ならざるは莫し。尙且其培養に害あ
 りとて樹とある樹は悉く伐倒され叢とある叢は餘さず刈拂はれたれば見ゆる限
 は眼を遮る物も無く夏の日の午熱に苦める旅人は何處に憩ふべき陰もあらぬを
 嘆てり。

(一) 川
 今年の暑熱は殊にも劇しく四十年來恁る例あらずと人皆言合へるまでなりける
 に別けて此日は七月の十五日とて暑氣の最も太甚しかるべき土用中なれば馬車



馬も太く困憊れて奔ると謂はむよりは歩むとこそ謂ひつべく、覺束無き進行を爲したるも有理なりけり。

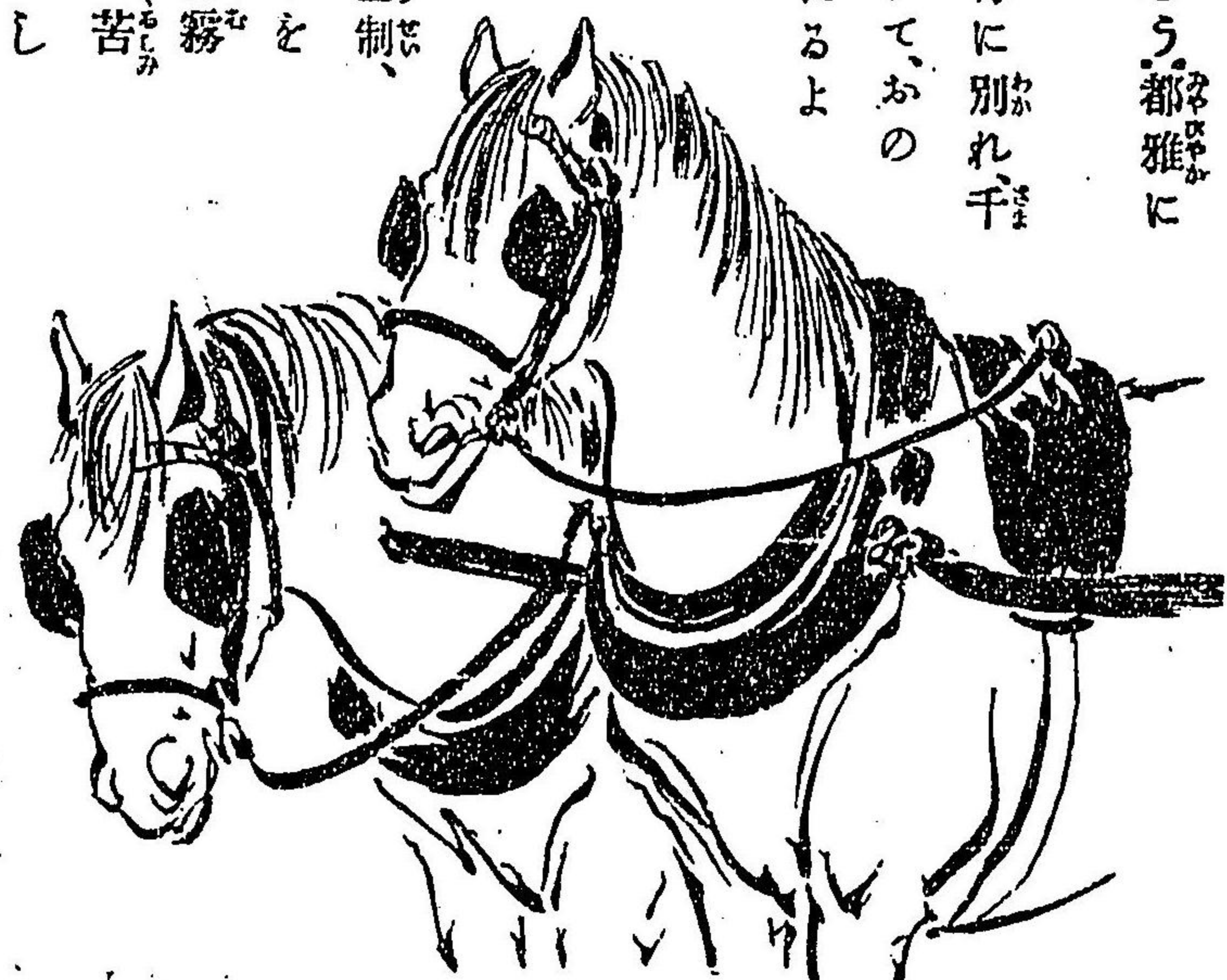
馭者は折々坐睡を覺して馬に罪ある如く烈しく鞭を加ふれば、駭きて少しく奔れども、やがて頭を俛れて喘ぎつゝ歩む。まして撻つ者もあらぬ馭者は憚らず快げに睡りぬ。六人の乗客も覺めたるは僅に一人のみ。

馭者の後に坐を占めて、幾度か仆れむとしつゝ眠を貪るは、此邊の百姓とも覺しき三十五六の漢子なるが相貌古りたる貉の如く、一見して世の常の良民にあらざるべきを認めしむ。渠は愆く睡りつゝ横厓にせる眞鍮の煙管より火玉を飛ばして隣に舐く老人の鼻前に一縷の煙を起てたり。

其隣に腕組したる商人も久しき前より睡れり。相對ひたる若き紳士のみは獨端然として雑誌を披けり。其眼の明爽に大なるは、愛嬌あれども峻嚴に、廣くして平板なる額は、俊俏けれども其性

の沈靜なるを示しつゝ容の優なるに相應しう都雅に扮装したるは抑も什麼なる人ならむ。

渠は其名を渡信之と呼びて幼きより父母に別れ、千百の艱難の下に辛くも叔父なる人を恃みて、かの好める醫學を修め、遂に開業免状を得たるよし、東京牛込の片邊に微小なれども一家を成せしは、約そ五年前の事なりき。其翌年師なりし人の推舉に頼りて、某病院の助手となりけるが、やうく用ゐらるゝにつけて、渠は其内に猜忌傲慢陰險虚飾壓制、讒諛の微菌充滿ちて、害毒を恣まゝにするを發見せり。血に富み情に鋭き信之は、恠る毒霧の中に呼吸して在るにもあられず堪難き苦を覺えつゝ、一年二年は左にも右にも過せし



が、今や幾と忍ぶ能はざるまでなりける時、渠は断然去就を決すべき二つの大打撃に遭へり。院長との衝突と戀とは其なり。

渠は生憎平生反目せる同僚の娘を戀ひしなり。譬の如く其父をこそ疾みしが、其美しき娘を思ふ毎に渠は如何なる苦をも忍びて、暴慢なる院長の意を迎へ鄙劣なる同僚と交を厚うして、あはれ此思を遂げむの志は已む方無かりしかと有繋に方圓の容れ難くて遅ひける間に、強顔も戀人は然らぬ方に嫁ぎてけり。

信之の失望は幾許なりけむ、その一月は殆ど寢食をも忘れて、限無く思惱みつ。而も戀人はおのれの最も忌嫌へる同僚の妻となりけるにぞ、渠は一時亂氣と見ゆるまでに憂憤したりける。

實に此時なりき院長との衝突は其頂に達して、渠は竟に此多望なる地位を棄てざる可からざるに至れり。世間に向ひては院長に次ぐべき信用をも得たりしなれば、渠が一身の上より謂はれ、此地位は到底一步も動くまじき多望の椅子なりしを寧ろ喜ぶと揚言して、渠は此不愉快極る處を去りぬ。

失望し憂憤したる信之は再び此疎しき都會に立交はむことを思はざりき。清淨な

る田舎に隠れて、今も思の種なる戀人の姿をば開なる山と清らかなる川との間に洗ふが如く忘れなむと思定めつ。

甲斐國甲府の町に知れる醫者の住めるを便りて、はるく尋來りしは、去年十一月の未なりき。されど其繁華と雜鬧とは、仍も渠の腦を惱まして、已まざりければ、今少く靜なる處をぞと尋ねしに、此友の知己なる勝沼警察分署長より、近郷なる岩崎村に醫師を要すればとて告來したり。村に一人あれども極めて庸なれば、心に掛くるには足らずとなり。

勝沼岩崎とは葡萄の名所にて、笛吹川の流に臨み、極めて風景の佳き所と聞く。行くべしとて、愆くは馬車に乗込みたるなりけり。

二

車も輿に覆りぬ

愆くと數日前に通せしかば、實意ある勝沼警察分署長は早速岩崎村に到りて、一軒の貸家を求め、一人の下婢までも周旋して、何時來り給はむとも差支のあらざらむやう準備したりと、昨日郵便にて通知しければ、信之は其家の如何に田舎の風情に

富めるかを想像しつゝ獨り心に樂めり。
 行くく満天の酷熱に苦みつゝ馬車は牛の歩むばかりなる進行を爲したりしが、
 やうく雲母坂といふに差掛れば珍しくも左右に茂れる松の梢の心地好げに涼
 しき蔭を爲りて坂の半途には此邊に名高き岩清水の淵々として湧出るを見たり。
 猶少しく登れば松の並木の絶えたるより遂に一帶の人烟を望みたるをあれこそ
 勝沼驛なれと取者は言へり。信之は目を舉げて此景色を打眺めたりしが察からず
 心を奪はれたる状なりき。
 絨氈を敷きたるやうに遠く連り亘れる葡萄園の中を陰翳しつゝ白き蛇の這ふが
 如く見ゆるは音に聞ゆる笛吹川の流なり。其に沿ひて人家の點綴せるはやがてお
 のれの住ふべき岩崎村なるべしと渠は想ひぬ。やがて車は雲母坂の頂近く來れり。
 とばかりありて不意に馬は足を駐むると與に鼻息劇しく苦しげなる吁鳴の聞え
 ければ取者は打驚ける氣色にて振揚げし鞭を控ふる折しもあれ二頭の馬は諸共
 に悲鳴を揚げて右の方へと一齊に倒れたり。

車も與に覆りぬ。飛下る者踏まるゝ者仆るゝ者轉ぶ者喚く者怪我する者蜂巢の破
 られたるが如く乗客は騒動しつゝ衆も逃れて彼方に立ちぬ。貉相の百姓は特に驚
 騒ぎて痛めたる鬨を撫でく無残にも車輪の下に踏摧がれたる例の眞鍮の煙管
 を拾上げてつゞくと獨語たり。
 幸ひに乗客の太甚しき害を受けたるは無かりけれと馬の勢は想の外にて到底車
 を曳すべき望のあらざれば濟まぬことなれど災難と諦めたまひて此より勝沼ま
 ではとや程も無ければ銘々に歩みたまへど取者は手甲摩りて詫入りぬ。
 爲方もあらざれば一同はせめて其恙無かりしに慰められいでや打連れて行かむ
 と身仕度しつ。かの貉相を除きては皆勝沼へ志すものなりけり。愠くて淺ましく道
 傍に横はれる馬車を見捨てて一羣の旅人は驛の方へ向ひぬ。
 貉相は獨龍鍾と少し後れて行く。將に驛に入らむとする時渠は意あり氣に有間
 行みたり。さてつくく信之の行く方を眺めたりしが駭と分署長の家に入るを
 見届け倉皇踵を回らして辟路傳ひに岩崎村の方へ急げり。
 信之は警察分署長額綱賢八郎と標札打ちたる門に入りて案内を乞ひぬ。日は正午

に近く玄關側に茂れる柳の影は將に地下に没せむとする比なり。
分署長は渠の來るを待ちて家に在りければ信之は直に邀へられて八疊の客間の
涼しきに導かれたり。

主人なる分署長といふは如何なる人ならむ恐らくは髭髯深く眼厳しく額際（おでまゝ）の禿
げたる沈着の士なるべしと信之は途上想ひつゝ來れるなりき。然れども渠は毎に
膠多き想像も慙くまで全く相違せむものとは料らざりしなり。其人は若く美しく、
書生の氣の未だ舉動の間に失せざるを。

何彼と一時間ばかり物語したりしに二人の性情は早くも著き一致を顯して、さな
から年來の交もありけむやうに互に捨難き思を爲せり。

三 御身に語るべき事あり

東京に住慣れたまひし御身には慙る片田舎は堪おまじく愛くも愁くも思さるべ
し。然れども頓て住着きたまひなば又自から樂の無きにもあらざるを覺え給はむ。
不肖も生國は遠き所にて此等邊には知邊も有たず話合手とてもあらざれば願く

は不敏を捨て給はず長く御懇情を蒙りたしと打解けたる分署長の辭には孤客の
心幾許慰められけむかし。

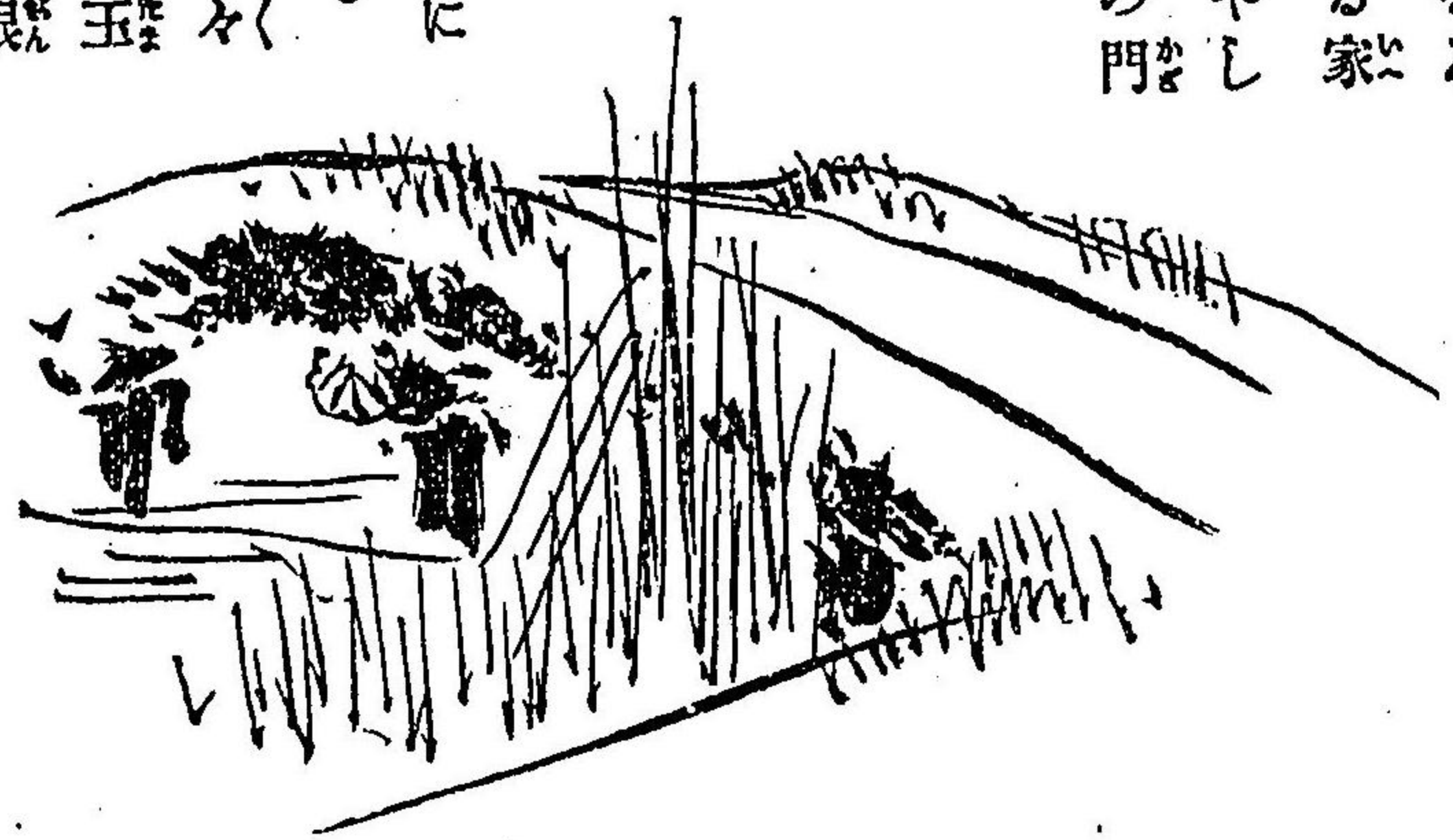
折から挨拶に出でたるは主の妻なり未だ廿歳をいくらも越えしと覺しく容も見
好げに正に結婚後兩三年よりは經ざるべき初々しさの自から温雅なる體度の間
に微見きて故とならぬ愛嬌は温むとすれを溢るゝやうなり。

酒も出で午餉も出でく語らふ辭もやう／＼分隔を置かざるまでになりければ信
之は我任に椽に出でく此家の有様を見たり。庭には泉水美しう漲りて鯉魚の靜に
遊ぶも涼しげに綠蔭青苔風蒸りて垣の梢より噴き田野を見晴し遠く笹子駒飼の
連山を望むなと胸も穿るゝばかりの眺望なり。

慙る閑靜なる田舎に住ひてあのやうの愛らしき妻を有ちたらむ其樂は幾許なる
べきか。信之は忽ち坐寒くかの同僚の妻となりける戀人を憶出して已まざりき。

赫灼せる日の影は漸やく御嶽の高き頂に没せむとして涼しき風は垣無き葡萄園
を颯々と度り初めたり。暑氣は未だ薄らぎたりといふにはあらねど暗うならぬ間
に彼處へ行かむと思へば支度を爲たまはずやと分署長は促せり。程無く二人は立

起りぬ。岩崎は此勝沼などよりは猶幾倍か田舎の特色なる風景に富みたれば御身は必ず喜びたまふべし。借りたる家も廣やかに然して古りたるにあらざれば之も稍満足やしたまはむ。急ぐ言ひつゝ分署長は若き妻に送られて柳の門を立出でたり。さて街道の樹蔭を踏みつゝ信之は岩崎への路程を問ひぬ。
一里半には少し近かるべしと分署長は願みて、されば急ぐ急ぐ歩くもあらねど、日のある内に其村に着かざるべからざる理由のあればと言へり。其理由は直に問はむとも思ひしかど其所にだに行かば自から分明ならむと信之は黙して道を急ぎぬ。驛を離るれば葡萄園は愈繁く愈廣く連りて其果は熟々と琅玕翡翠などを綴りたらむやうなる。此の香しき玉の林を少が程行けば岸拍つ水の音響々と響きて速に眼



前に顯れたるは笛吹川の急流なり。岸一面に生茂る蘆荻の裏に行々子の聲々に嘯るもあかし。夏なれば水涸れて磯のみ徒に嘯く遠く見え且れど春秋の候は船をも通はすべく香魚岩魚をも漁るべく此國に最も有益なる河の一つに數へらるゝなりなと語ひつゝ此川に架けたる板橋を渡りぬ。
爾時分署長は先に進める信之を呼びて、少し緩々に歩み給へ。我等は岩崎の村に入らむ前に御身に語るべき事ありと言ふに予渠は足を住めて聴かむとしたる。別義にもあらず。御身の住はむとせる岩崎村は實に一箇の君主とも謂ふべきものと下に支配せらるゝことを忘れ給ふ可からず。其者は貝塚六右衛門と呼べるが昔は笛吹の六とて近郷に響きし博徒たりしを忘れ給ふべからず。御身は左ても右ても此者を敵と爲ざるべからざる人なりと分署長は語れり。
敵！と信之は驚きて叫びぬ。
然なり。恐る可き勢力ある貝塚六右衛門は斷じて御身の勁敵たるべし。御身は之に抗ひて屈せざる耐忍力ありと固く自ら信じたまふか。若し然らずば彼所に行きて住み給ふ効はあらじ。

唐突なる分署長の語は山路に遠に日の暮れたる如く信之を當惑せしめたり。我が耐忍力の有無は姑く措きてその六右衛門なる者の如何なれば我敵なるべきかを誨へたまへ。我は未だ怨無き敵のあり得可きを知らずと渠は怪みつく不満の色を作せり。分署長は連に頷きて語るべき事と言ひしは是なり。這は先御身に通すべかりし要點なりけれども慙くと聞き給は有弊に煩しと思ひて必ず來り給はざるべしと察したればこそ慙と書面には此事を言はざりしが。

かの六右衛門は文字を識らず道理を辨へず禮にも媚はぬ一箇の土百姓に過ぎざれども其勢力は遠く村長校長或は系圖ある豪農の上に出でて幾ど一村の全權を握れる趣あるは寔に怪むべき至なり。然のみならず村人は皆渠をば一文錢の價値無き人物と知りつく仍其跋扈に任せて更に怪まざるは更に怪むべき限ならずや。然れども世間は學問にあらず正義にあらず才能にあらずして唯一の金錢なり。金錢の威力は實に鬼神も屢及ばざるものあり。渠の資産は極めて饒く渠の田畠は極めて廣く一年の税額約そ二千圓以上と聞えたり。

前にも言へりし如く渠は極めて無能無識なる頑物なれどもその特質として頗る

可驚きは肥臆力なり。渠は一度見聞せし事を一生忘れざるばかりなるが故に自ら世間普通の事に通せざるはなし。

渠は已を肥さむが爲には如何なる悪事をも喜びて行へり。幾度と無く人の家産を倒し人の膏血を吮ひて意に今日あるを致したる憎みても鄙みても餘ある老惡魔は其前半生の月日をば怠惰なる労働者として奸惡なる博徒として將又村中の厄病神として闇黒の世界に棲息せしなりけり。渠は今も其古の労働者なる根性と博徒なる横道と疫病神なる無慈悲とを棄ざるのみか加ふるに金力を假りて益鬻無き愆を逞しうせるなり。

俄分限の昔を語らば親も無く妻も無く親戚も無く二十九歳の曉まで此笛吹川の流に沿ひて破れたる小船を浮べ織に小魚の獵なとして其日を暮したりしが翌年不圖岩崎村に漂泊り農夫として住むべく其身を定めつ。微小なる茅屋僅少なる田地一反ばかりの葡萄園をば吾物にして住着きけり。昨日迄は朝の米の代にだに差支へし笛吹の六が何處に如何にして然はかりの金子は獲たりけむ絶えて知る者あらざるなり。

正直なる村人は始の程は渠の移來りけるを厭ひて面を合するものもあらざりしに、やうく月日経るまゝにいつか其利口にや惑されけむ然しもの悪感情も漸く薄ぎつゝ後には却りて其敏捷を稱ふるやうになりけるが、次で隣村の一農夫は渠の働あるを見込みたりとて我娘をば妻せたりけり。然れど此結婚は豫て渠の心に一物ありて此縁遠き醜婦を唆かして人目を忍び合ひし腐縁の結果なり。果せる哉親も子も其術中に陥ちて遂に先祖代々の淨き血を漬して顧みざりき。渠は此血を假りて、ふのれが従來の不信用を洗はむとせしなりけり。

妻となりける女子も其性鄙吝にして而も完全なる奸智を有したれば、渠等は絶えず富貴を得べき手段を工夫して、些の油断もあらざりしなり。

六右衛門は葡萄の利益のみに満足する能はず、またも一艘の舟を求めて、昔覺えし漁を片手業にしつ。川に添へる一軒の廢屋の久しく住む人のあらざりしを、廉價に購ひて漁業場に宛て、日毎の獲物をば自ら栗原驛に持行き、多少の錢を得るに忽らざりき。

人は皆言ふ渠等の富を得てしは此間の經營なりと。然れど其富は如何にして得た

りしかは、之も例の知る者絶えてあらず。二人は其狹き家の中に、其暗き燈の下に幾許の秘密を語りひけむかし。

夜更けて川の頭に六右衛門の黒き影を見たりと言ふもあれば、我は又東雲の空に夫婦の連立ちて何處よりか川邊の家に歸り來るを見たりと言ふもあり。或は彼、或は此



と種々怪しき風説は村の家々に傳へられしが、渠等の燈下の秘密は終に明ならずして消えにき。

恰も此時渠の舅なる隣村の某は所用ありて外出せしまゝ一夜歸らざりしに翌日空しき軀となりて笛吹川に浮びたり。憐る横死は方に死すべき人の死せるにても、多少の嫌疑は避くべからざるを況んや彼の某の境遇を知れるものは誰か怪み疑はざらむ。渠は然して富めりといふにはあらねど、田地と葡萄園も各二三町は所有して百姓としては中等以上の活計を爲せしものなり。加之渠だに死なば子として其後を襲ぐべきは獨り六右衛門の妻あるのみなるをや。

如何なれば渠は死せし。是第一の疑問なりき。家も貧きにあらねば、生活の困難に逼られしにはあらざるべく、酒も平生深く嗜まざりければ、酔ひて溺れしにもあらざらむ。恐くは渠の求めし自殺にはあらで、必定曲者の手に懸りしなるべしとて、村人は皆六右衛門夫婦を疑へり。疑ふのみか、相違あらずとまで断定せられしなり。然れども意氣地無き村人は後日の奇禍を懼れて之を官に申す者も無く聞えよがしの噂をも慎みて障らぬ神の祟無からむことを願へり。

憚くて渠等は我手に入れたる某の財産を資本として尙大なる葡萄園を買ひ、尙根強き悪智を逞しうせしほとに其身代は益肥えてやがて一廉の豪農と成濟しつ。憚くても渠は漁業を廢てす昔の如く其處に行きて昔の如く其四手網を打てり。

此頃より渠は貨殖の最も太く手短なる手段を増して白晝盜を爲すに倅しき高利を貸始めしが或時は機に乗じて詐偽し恐喝し不正不義の工夫に工夫を盡して、いさゝかも懈らざりしかば塵だに山となるものを渠の資産は見る／＼膨脹せり。

嘗て一度は渠を疎み、渠を疾み、渠を賤み、渠を思みたりし村人等もやがて此有財餓鬼の前に首を俛れて、渠等の常に誇りし系圖も徳望も功勞も白髪も黄金の光に照されては威く其色を失ひけるなり。

噫、錢神なる哉と分署長は太き長町を吐きぬ。長き物語に耳を傾けたりし信之は、やう／＼口を開きて、さては寔に恐るべく憎むべき賊子なり。然れど其者は何の故に我敵とならむとすらむいと理無き事ならずや。

六右衛門には其妻との間に一人の倅ありて、これを御身の競争者たるべき慈愛なる。分署長は憚く語りつゝ、信之のはや合點したるが如く、顔くを見て、御身は其理を

解したまへるならむ。然らば其職醫に就きて少しく述べし。御身は既に其父の如何に恐るべきかを知り給ひぬれば引替へて其息子の如何に悪物なるかを怪みたまへし。渠は今年三十歳約なるが其子供らしさは憫笑に堪へざるばかりなり。不肖の友人に嘗て渠と與に甲府の尋常中學に在りて渠の性行を具に知れるものありて語りしが渠は仇名を獨活と呼ばれて纒に父に肖たるは、體格の逞しきばかりにて、其他は總て己れの短を以て父の長を平均せむが爲に生れたるものと如しと云へり。生徒には侮られ教師には疎せられ人の屑のやうに思はるゝをば、渠も有聲に口惜しがりて常に然くしく美服を着け新形の帽子を頂き、靴を鳴し時計を耀してこれ見よがしに校堂を横行せる時には一種謂ふべからざる高慢の色を顯して日頃の恥辱を雪ぎ得たる顔なりしとす。

然りとて父は父の子の愚なるを識さりしにはあらず。愚なるが故に愛憐もいと深く如何にもして一人前の紳士に爲ばやの念は絶えざりしなりけり。笑ふ可し、悪魔も可憐きを。然るに渠は生徒たる面目を汚せし不品行の廉を以て學校を放逐されて家に歸りしが父の爲に激しく怒られ凄しく罵られ辱句は一拳をも吃せ

られし後遂に東京に出て醫學を修むべく命せられけり。獨活が意氣揚々として開業免狀を懐にして歸り來りしは、それより六年の後なりき。村人は呆れて愚なる子を生まば醫者にすべしとぞ言合へりし。實にも渠は如何なる試験を経て免狀を得たるにやありけむ。疑も無く渠よりは才ありて錢無き貝塚六之助なる者の別に有りて、及第せしならむと噂せし人あり。渠は村に住めりし漢法醫の跡を嗣ぎて其覺束無き診察を始めた。六右衛門は倅の一人前に足らざるを知るが故に、おのれの眼の黒き間は油斷無く此兒の傳をせざるべからずと思ひければ此村に來りて我子と競争せむとする醫者は、おのれの勢力を利用して悉く逐拂はむと決心したるなり。然りとも知らず三年の間に三人の醫者は來れり。六右衛門は願のまゝに其敵を追還しぬ。其手段の如何に卑劣なるかは、頓て御身の自ら知りたまふ所ならむ。



分署長は茲に一先長物語の局を結びて不圖信之の面を看たりしに眉の邊に憂慮の迹の認められければ渠は忙しく語を繼ぎてされを御身は決して心を勞したまふな。不肖恚る職に居て渠が昔の罪なとも知れるが故に彼奴は不肖をば天下第一の恐しきものに思へば不肖が御身の爲に力を盡すを見ては有樂に容易く手出は爲さるべし。もし然あらむ時は顔緘あり。

日のある間に岩崎村に入らむといひしは不肖の御身と同行したるを先かの六右衛門に知らせむ爲なり。

信之は歡迎せられざる門に入るを憊然とは思はざれども一面は六右衛門の惡慮を憤り一面は分署長の厚意を感じあはれ勇を奮ひて此敵に當らむと覺悟しつ。恚くと語れば分署長も喜びてはや行く程も無く一里半の道も來盡して岩崎村は低き木立と葡萄の林とに掩はれたる丘の陰に絶々見えて笛吹川は絶壁を爲せる岸を繋ひて激流連に玉を碎き白雲屢裂けて遠雷の音をなせり。

四 それにて事は足るものを

夕陽の金色に染められたる葡萄園を右に左に傳ひ行けば其昔道を開鑿し丘の名残とも覺しく小高き所に一棟の茅葺の風情作りて立てるを見たり。家の後に方りて四邊小暗きまで茂合へる胡桃の大樹は傘の如く屋根の半面を掩へり。

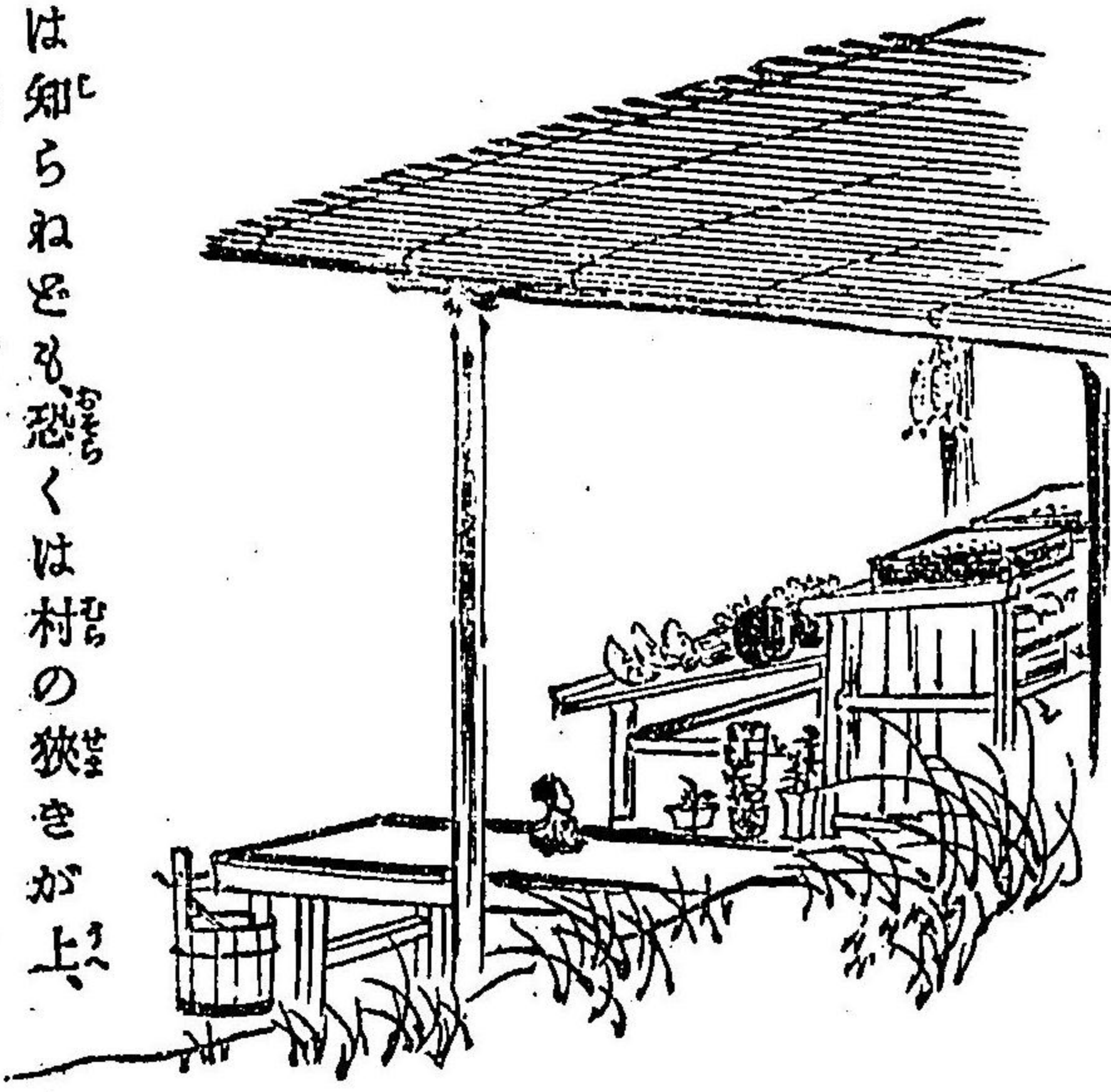
見給へあれこそ御身の家なれど分署長は言ひぬ。慙くばかり趣ある居宅ならむとは想ひかけざりしに信之の面上には喜の色溢れたり。

今しも其家の門下を過ぎぬるに分署長は入らむともせで猶進みぬ。信之は怪みて如何なれば此門を入りたまはざるを訊ねけるに渠は微笑みて先我後に添ひて來給へ。やがて所以を知りたまふべしと益行きぬ。凡そ一町餘も來つれば一軒の茅屋ありて此村に有名なる定兵衛の店とて駄菓子水菓子等を商ふなりけり。

定兵衛は折好くも店前に居たるが彼方より來れる分署長の姿を見るより脱ぎたる肌を慌しく歛めてこれはと言ひさま居直りつゝ地板を紙めむばかりに恭しく禮してさて尊むが如く畏るゝが如く身を窄めて來意を訊ぬる次に異しげなる眼して傍に立てる信之の姿を打見遣りたり。

分署長は床几の端に控乎と腰懸けて用事と云ふは此醫者様をば其家に案内せむ

どてなり。
 醫者様！と定兵衛は驚きたる面色にて、再び信之の方を意味ありげに見たり。
 分署長は思はず洩るゝ微笑を忍びて、此君は今日より此村の醫者様として住みたまふなれば、汝等は何時病に罹らひとも氣遣ふことはあるべからず。此君は東京にて久しく一病院の長をも勤めたまひし上手なれば、と語るを定兵衛は能くも聴かで、我等には貝塚様の若旦那あれば、それにて事は足るものを。尙又此まで幾人も醫者様は來ませしに、長持ちのせしは一人もあらざるを知らせたまはずや。そは、何故にと分署長は問ひぬ。何故かは知らねども、恐くは村の狭きが上に然ばかり病人のあらざる爲ならむと、渠は答へぬ。



爾時分署長は犯罪者が虚偽の申立を爲す毎に耀すやうの眼光をもて、屹と定兵衛の額を睨着け、森嚴に語氣を沈めて、然はいへど、其方は可愛き一人娘の熱を病みて死せしを忘れたるかと訊問せり。何とかわけむ、定兵衛の顔色は俄に變りぬ。然ればこそ、此村には此君の如き上手の醫者様を要する、と不肖は言ふなれ。恠くて二人は黙せり。
 其有りて分署長は立起り、信之に向ひて、今は御身の家に行かむとて、舊來し道へ返したり。少し行きたる頃餘に劇しく言ひたまひしもの哉、と信之は打出しぬ。分署長は首を掉りて、渠等には更に劇しからざるなり。人間と謂はむよりは寧ろ野獸に近き渠等如きは、嚴酷なる鞭を與ふるにあらざれば、到底服従せしむべからず。見給へ、十五分の後には、彼奴必ず貝塚の家に行きて、今言ひし事残らず、六右衛門に密告すべし。其密告を所望にて、わざと彼所までの足勞を厭はざりしなり。
 二人は猶語ひつゝ、曩に過ぎし家の前に着きぬ。丘に刻める徑を登りて、門に近ければ、横杉松の諸木、隘々と地を抽き、梢は醇蒼として、其奥に、六疊二間、八疊四疊半、三疊の五間を具へたる家屋は見ゆ。庭は其右に方りて、其處よりは得も謂はれぬ、四方の眺

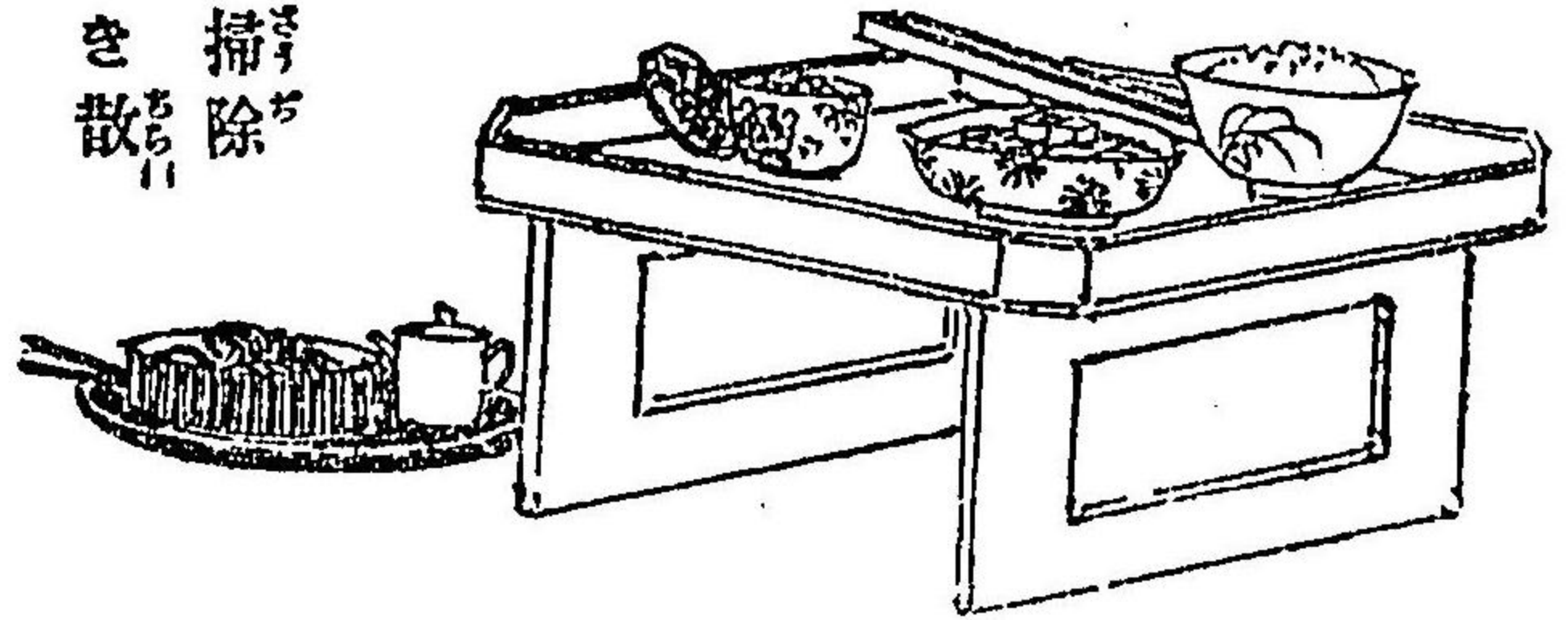
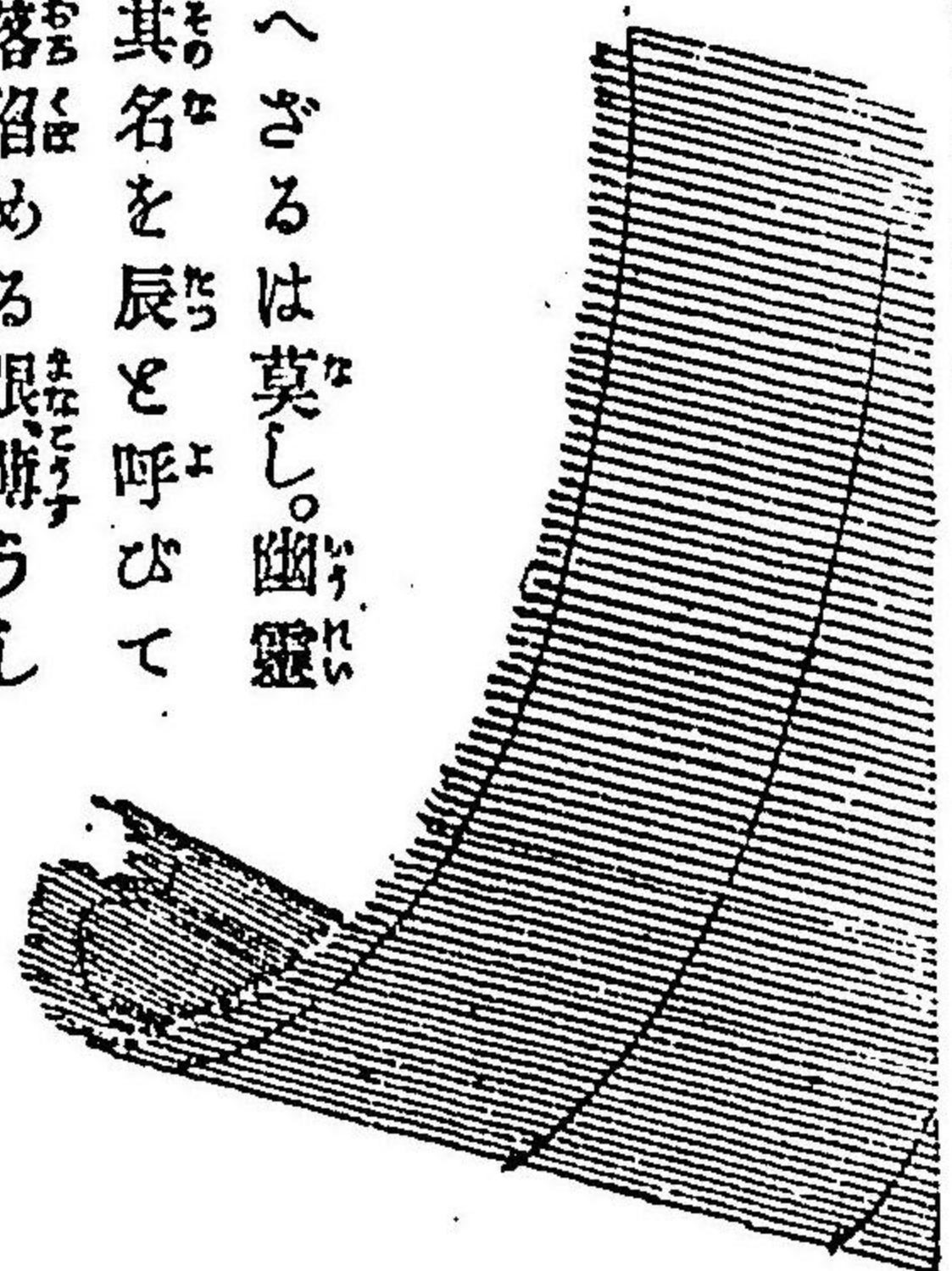
望油畫を掛けたるやうに。
二人は雇置きたる四十歳約の下婢に迎へられて庭より家の内にぞ入りける。

五

備が病人を診るよりは

此新しき醫者の居室を隔つる約そ七八町の處に目覺しき二階造の見ゆるは貝塚六右衛門の樓家なり。周圍に高き黒塀を引回し其外に陰々として木立生茂り裏には遠く笛吹川の流を聴き傍には曠遠と葡萄園を控へたり。家は頗る宏大なれども建築の寔に見苦くも不規則極れるは年年歳々利益を得るに従ひて建増せしにやあらむと覺し。塀の中央に見事なる冠木門あり。されど渠は家の内を見らるゝを厭へり。とて大方は閉ぢたるを常とせり。家の裏手に草叢に埋れたる一條の徑あり。此荒れたる路こそは久しき昔より如何に秘密に用ゐられ如何に秘密に往來せられて貝塚家の不正なる財産を作りしには如何に有用なりけめなど信之は遙に眺遣りつゝ思浮べたる折しも一人の男は夕陽の影を帯びて其徑を傳ひ來れり。這は是向者に乗合ひし貉相の百姓なり。

今や貝塚の茶の間にては夕餉の箸を取初めたるなりけり。三脚の膳に並びたる六右衛門親子の容は各一種の特色を備へざるは莫し。幽靈のやうに瘦麻ひたる妻は其名を辰と呼びて五十歳餘にもなんぬべし。落陥める眼薄うして色無き唇齒落ちて容める口元鋭く尖れる。頤なぞ見ながらに意地邪曲りて金輪際まで吝さうなり。然のみならず着たる服の淺ましく汚れたる日傭取の女房なぞこそ然るべく見ゆるばかりなるは人は富めるにつれて貧乏行をすど謂ふに合へり。
渠は昔に變らず下婢の如く動きて上は夫の世話子息の靴の掃除より下は掃溜の中までも覗廻りて事々に指圖し絶間無く喚き散



し奉公人を困しむるをもて、一種の樂とせるが如し。
 此薄汚き可恐しき媼の傍に四邊も眩く着飾りたる國手は然つべらしう身を構へたり。色白く豊腴なる面に八字髭を整へ、褐色の少しく癖ある髪を一縷列に梳りて、香油の光照耀き、その舌らしき茶氣蒸じわたり。
 之に隣りて上座を占めたるは、主の六右衛門なり。渠は二人に比して幾分か眞面目に落着きたる風采を備へたれども、一拍子變りたる人物とは自から其態度に露るる所あり。
 一同は黙して樂める色も無く、義務の己むを得ざらむやうに食事をしたりけるに、外の方に人の氣勢やしけむ。六右衛門は箸を止めて誰そと不意に叫びぬ。應ふるものはあらざりき。元藏の痴鈍漢は未だ歸らざるか。何處に何時まで彷徨ふならむと渠は不興氣に澤庵漬を夾みぬ。
 何處へ今日は出遣りたまひしと妻は問ひぬ。いさゝか用事ありて甲府までと答ふる時國手は溜らせし髭を搔撫せつゝ如何なる用事にてかと喉を容れたり。されども父は敵手にせざる風情にて、故と事も無げに大事の用なりと答へぬ。大事の用と

言ひたまふか元藏は決して大事の用なと辨すべき男にあらず。父上は渠を買冠りてゐたまふなりと、驚しかくる國手の方を捻向きて、六右衛門は厭はしげに眉を皺め、爾の知りたる事にあらず。爾が病人を診るよりは、我の人を察るは更に勝れり。
 言下に國手は萎れて熱き茶を嘘きぬ。又有間ありて、苦しからずは其用事といふを我にも聞かせたまへ、と此度は願へるなりけり。或人の様子を窺はするに過ぎず、と聞くより、妻は怪みて、或人とはと訊ねたり。其には答へもせず、六右衛門は國手に向ひて、爾は其人を何者なりと想ふぞ。
 國手は父の面を打目成れり、餘に無法なる質問に驚ける氣色にて。
 やがて頭を掻きて、這は難題なり、と國手は眩きぬ。父は眼を瞋して、爾の身に關りたる事なるをと教圍けば、渠は愈呆れて、言はむ方を知らざりけり。六右衛門は仍暴かに、爾の如き運鈍を子に持てる親の苦勞は幾何と思ふぞ。此父は爾が爲に樂は爲で、日夜苦をのみ求むると知らずや、と疊を拍ちて責鼓を鳴せば、國手は益感ひて、何の故に慙く卒に窘めらるゝとも知らず、唯煙に巻かれてゐたり。
 わざ／＼元藏を甲府まで遣りしは、爾の身を思ひてなり。爾の爲に邪魔を拂はむと

てなりと此に語を飲めて渠の如何に答ふらむと俟つが如く父は國手の顔を見遣りぬ。妻は傍にいづもながら抜目無き夫の用意を感入りたる氣色にて控へたり。然らば今日元藏の探偵に行きたりといふ男は何者にて又何故にて我身に邪魔を爲むとするにかと國手の問を折しも庭前に歩來れる琵琶の聞ゆるにぞ六右衛門は其方に心を奪はれつゝそは頓て合點行くべし。待詫ひし元藏のやうやく歸來れるやうなりと言ふ程に貉相の男は椽先近く進來りて六右衛門を見るより草鞋の爪頭に兩手を揃へつゝの字狀に屈みて頭を下げつゝさて辰にも國手にも殆ど等しく尊敬の意を表して後言はるゝまゝに椽の端に嚢を載せたり。六右衛門は其勞を痛はむ爲に妻に命じて一銚子の冷酒と一皿の漬物とを渠に備めてまづ寛々飲みなながら物語れ。様子は如何なりし事實なりけるかどはや慌忙同ひかくれば元藏は駈付の三杯を吃して唇邊を手掌にて推拭ひつゝされば大旦那様の仰付の通りまづ勝沼に行きて分署長の其男を世話するや否やを聞定めしに十分證據を得しのみならず其醫者の宿る甲府の旅籠屋をさへ知得たりければ直に其處へと志してと語りも敢へず醫者とはと國手は唐突に問ひぬ。若旦那様と張

合はむとて此村に來れる醫者なりと元藏は答へぬ。そは信かど國手は大甚くも驚きたる狀にて兩親の顔を見たり。黙りて聴けやがて悉く知るゝものをと六右衛門の制する後より元藏は詞を續けてそれより急ぎて甲府へ行き其旅籠屋へ参りしが六町目の米新なれば豫て知れる者の俸の奉公せるを幸ひ其者を尋ねしに今朝使に出でたるまゝ未だ歸らずとあるに爲無く渠は在らずとも訊ねて見むとは思ひしが怪まれては拙からむとそ歸來をば待ちたりしにはや日も暮近くなりければ旅人は次第に集ひて忙はしくなりゆく店頭におのれは一人茫然と片隅に蹲り八時過ぐるまで待ちに待ちてやうやく會ひて此家に云々の醫者の宿れるならば陰に其面を識りたき由を語りしにそは渡といふ人なるべし。其方は一昨日いづれへか宿替せられければ今は何處に在すとも知り難しと言ふを涙を流さぬばかりに頼みければ渠は姑く思案して然ほとに言給ふならば兵戸様へ行ってなりとも問合せて進すべし。渡様は毎に彼方と往來したまひければ知ることもあるらむと言ふに予二十錢の銀貨一箇握らせければ渠は一散に走行きしが間も無く歸來りて小さき紙片を我に渡せり。それ

には渡の宿所をば希町なる近江屋と記したるなり。我は喜びて此を去りて希町へ向ひしが渠の櫛子を探らむとは同じき宿を取るにあらざれば連も手懸はあらじと思ひ三十錢の上旅籠を氣張りにて近江屋の暖簾を潜りぬ。さて心を着けて室々を覗きしが容の夥しくて容易に其ぞと辨別も付かずとかくして湯に入り夕飯となりぬ。

給仕に出でたる婢に裏問ひしに其御方は十番に居給ふ美しき醫者様なりと言ふ。其室は二階の盡頭なる八畳の間なることをも知りたればやがて忍寄りて駈と人跡を見届けたり。

それこそ果して警部の世話するといふ醫者なるかと六右衛門は稍狼狽へたるやうにて此に来るべき醫者に相違あらずと聞くより窮りたりと禿げたる頭を撫でく俯けり。

何故に窮りたまふぞ。美しき醫者の來ればとて然ばかり窮ることかはと例の無分別に口を開くは國手なり。何を言ふぞ。爾は今元藏の語りしを聞かざりしが。渠は東京にて病院の長をも勤めしといふにあらすや。剩さへ好き男なりといふにあらす

や。院長をも勤めしほどなれば其術は勿論精練なるべく容貌の好しとあれば若き女子どもは皆渠の玄關に集るべきなり。慙くても爾は窮らぬか。癡漢と六右衛門に説破られて國手は異様の微笑を含みつく然あらぬ方を見向きし。二人の物語の途切れたるを候ひて元藏は再び語出せしなり。

寔に渠は従來來りし醫者に比べては雪と墨とも謂ひつべき容貌なれば女子ども必ず騒ぐべし。我は渠の姿を隙見せしのみならず翌日は馬車にも乗合ひて踵の頭までも見遣さしりしが實に好き男もあるもの哉と思へるまでなりき。

不幸にも此車は雲母坂の上にて覆り大事の煙管を恠くの通と損害要償を求めむとするが如く例の取出せり。妻は見ぬ風して顔を背くれば六右衛門は縁に頷きたるのみなり。



勝沼まで渠の後を尾けしに、警部の門に入りしかば、有間待ちしに、出来らざりければ、其處に遊びし童を語らひて、櫛子を捜らせしに、警部は家に在りて、客人と午餐を食してゐたるまで知りければ、此上は一刻も早く申上げむと、急ぎ歸りしなりと語訖ると、與に一銚子の酒は滴も残らずなりけり。

如何にすべきと、六右衛門は悶々として呻出せり。國手は又もや要無き言を言散せしが、父は管もせざれば叱責もせで、獨風托頭に首を傾けてゐたり。

渠は此美しき醫者の如何に甚しく我子の邪魔になるかを案じ、二つには、此氣味惡き奴の手硬き後楯なることを苦にせるなり。

渠は若干金の骨折賃を與へて、此一件は口外すなどて、元藏を還しつ。さて其迹にいと打案じたる側より、國手は又其舌息を聲して、何故に父上は然までに分署長を恐れたまふぞと、性懲も無く訊ねたり。

爾に語りたりとて、効はあらじ。唯一事、是のみは愚なる爾も覺えてゐよ。かの警部が後楯となるからには、在りしやうに容易此醫者は逐拂ひ難きぞと、六右衛門は衝と立ちて、庭の裏なる漁道具の小屋の方へ行きぬ。渠は河邊に竿を携へて、この與し易か

らざる敵に對せむ策畧を運さむとてなり。

渠は菓を提げ、竿を擔げて、かの草深き裏の徑を傳ひて、野路を一町ばかりも横ぎれば、笛吹川の頭に出づ。夕風葦の葉末に騒ぎて、布を曝したる如き一條の流に薄る夕暮は、岸の柳にほのくと黒みけり。

六

貉をば役ひしなりけり

戸外に單身在る時の六右衛門は、内に在るとは其容躰著しく違へり。渠は人目を欺かひ爲に、丈夫なる腰を故と屈めて、抄々しくも歩まず。鋭き眼をば半閉ぢて、恰も衰果てたる翁の後生を顧ふより外には、何事をも得爲さらむ躰を装ふを常とせり。然れども、今恁く人無き境にては、おのが任に其鐵の如き筋骨を働かして、柳の幹に繋ぎたりし小舟に乘らんとせり。

折から聞ゆる人音に頭を回らせば、六七間彼方より、既小腰を屈つゝ來れるは、茶店の定兵衛なり。道を急ぎし疲勞に喘ぎ、且那様に申上ぐる事ありと進寄れば、何事ぞと、六右衛門は忽ち衰へたる翁に復りて、嚔くに咳きぬ。

又参りたり。今参りたり。と渠は急込みて、獨駭々を何が来たぞと睨付けられて、又此村に醫者が参りたり。とやうく打出しぬ。

勝沼の警部も連立ちたるべし。と六右衛門は苦笑して渠の面を見遣りぬ。定兵衛は驚きて口呆然、其をば如何にして、且は問ひ、且は怪む心の内には、此恐しき老禿の狐を役ふにはあらざるかと疑へるなり。渠は狐こそ役はさりしが、貉をば役ひしなりけり。

何も彼も皆知れり。其に就きて、爾に言ふべき事あり。爾は明日より我家へ足踏する。ことを罷めよ。人に向ひては散々に我家内の悪口を吐きて、路にて我等に會ふとも、必ず從來のやうに禮なをすな。我をば仇敵と怨めるやうに世間には見せよ。と六右衛門は誨へぬ。定兵衛は膽の潰れたる顔なり。

いづぞや用達てし拾圓は利足ともにはや二十五圓になりたるを、爾は忘れざるべし。と思寄らざる所に言出されて、定兵衛は顔ひあがり、それを如何でか忘るべき然れども、且那様は、先頃利足は免すと仰せられしものを、と恐懼訴ふれば、六右衛門は首を掉りて、物案じ顔に川面を噴めたりしが、いかにも利足を免さむ代に、件の事を

忽るなよ。もし爾が我家を悪口し、我家を怨むと、村中に知れ直らむ時を待ちて、爾は其醫者の家に行くべし。其所に出入らば、愈悪口し、愈怨むやうに見せよ。渠はやがて爾を信するに至らむ。然る時、爾は彼奴の家内の秘密を搜りて、委細我耳に入れよ。然れど、忘れても我家の鬨を踏む可からず、何事も此川の頭に來りて告げよ。心得たるかと説示せば、漸く呑込みて、定兵衛は領けり。善しさらば行け。恁る間も人に見尤められむことの氣遣し、と六右衛門は舟に移りて、洵然と棹を突入れたり。

定兵衛は二足三足追ひかけて、且那様利足の事は相違無く、と柳に紐りて舟の中を差覗けば、煩い奴、免してやる、と見も返らで、棹す舟は流に沿ひて、三段はかり彼方なる葦の茂の陰に入りけり。

七

一人の影をだに見せざりければ

信之は村の重立ちたる人々を招きて、開業の披露勞未々までの懇親を結ばむ爲に、宴會を催さむと思立ちて、分署長に計りぬ。一村盡く貝塚家に屈從したれば、此招に應ずる者は寡かるべし。されど機に因りては、平素六右衛門を指弾きせる者の渠へ

の面當に訪來むものゝあらずとも閉ひ難ければ左にも右にも響應の聲を開きて、味方となるべき人の有無を試むるも妙ならむと渠も頗る賛成なりければ遠近に使を走らせて村長校長を首として二十餘名の許へいと苦に其意を通じたり。此招待は一方ならず村人の頭を悩ましたりけり。渠等は其夕暮鎮守の森の傍なる校長の家にて宛然一大事などの起りたらむ如くこの處置に就きて一同評議を凝しけり。折角招かれたるものを無下に斷らむも餘に義理を知らざる所爲なり。さりて其席に出でなば論無く六右衛門の感情を害すべし。如何にせば可からむと誰も彼も思案に餘して常は辨才家と謂はるゝほどの人も是には好き智恵も出でざりしに豫て六右衛門の股肱と目するゝ村長の其獨辯を奮ひて一同謝絶すべき旨を勸告せり。各位は六右衛門殿の可恐き人なるを知り給はむ。彼人は些細の事にも已に逆ふるには必ず其恨を數倍にして返報すべければ君子は危きに近らず、一面識もあらぬ赤の他人の義理を思ひて、かのが身を忘れたまふは愚ならずやと言ふ時、校長の次に座したる老農は然れども萬一の事の有らむ時には、世話にもなるべき人なりと説出せば忽ち村長は遮りて其時には外に醫者の無きにあらず、

現に貝塚の先生といふものありて、事は足るべきにあらずやと言ひも詭らざるに、嘲笑ふ聲は一座の此處彼處に聞えたり。あの醫者様の心元無さと誰やら聞えよがしに吹けば、とは謂ふものゝ六右衛門の生きてあらむ限は、此岩崎村に良醫を得むは木に縁りて魚を求むるが如しと教員は痛嘆せり。已む無くば栗原まで行きてこそ、藥らしき藥は得めと稍小聲に言ふものあり。慙く其心々に不平はありながら、我はと名乗り出で、矢面に立たむとする者も無く、容易に相談は纏らざりけり。信之は都合如何にと危みつゝも、豈一人も來らざるなどの不面目はあらざらむと思設けて、其日は朝より六疊八疊の二間を掃除し、床には花を挿し幅を掛けて、時刻に先ちて配膳の用意残る方無く、今やくと待捕へたり。



ふむめ

分署長夫婦は一里半の遠路をも厭はず祝賀の馳を携へて來りけるに近きに住める村人等は、日影の山の端に入果つる比に至るまで、一人の影をだに見せざりければ、信之は氣を揉みて貝塚家の勢力の恠くまでなるからは尋常の敵にあらず、自から氣色ばむを、分署長はいと輕らかに打笑ひて、必ず力な落したまひそ。渠が勢力は一村を支配するに似たれども、それは威服にして心服にあらず。暴を以て僅に制せるのみ、徳を以て懐けたるにあらざるからは、渠を踏さむこと、方に懸崖に臨める石を撞落すにも似たるべし。其目方愈重からば、其頓ふこと愈急ならむ。輕重ともに我の力を用うるは一なり。思ふるに足らず、恐るゝに足らず。

待てども、待てども、村人は竟に來らざりけり。信之は太く失望せり。渠は戀と取ひ世間と争ひて、幾ど其苦艱に倦れたる身のせめては、水の涓山の陰に心安き隠家を求めむと思ひしものを、來て見れば、此にも罪惡の埃立ちて、なかく立交らふべくもあらぬ愛世の様なり。實にも人の住める所には、其影の如く不義邪狂の伴はざるなきを、いと煩く難堪きものに思へり。

然れども分署長の厚意に對して、少時なりとも此に住まざるべからざる義理なれ

は、快々と明し暮して、渠は一日爲す事も無く、持餘す身を窓前に横へて、爲む方無さの書見に其日を送りけるなり。

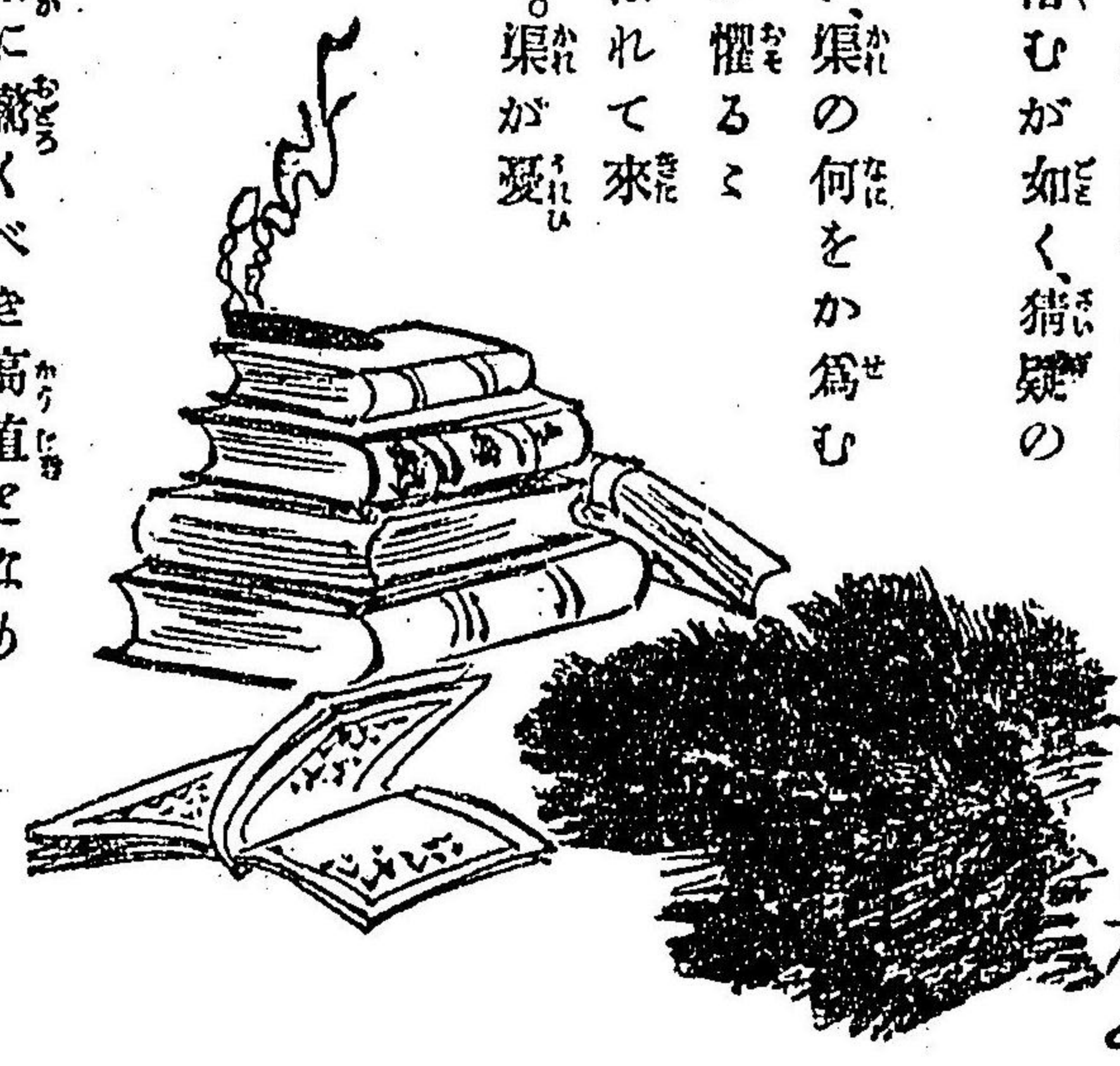
凡そ世に幾許心剛き人と雖も、孤懷の寂寞に苦められざるは、あらざらむ。無限の感慨も起るべく、懷郷の情も切なるべし。但老いたる人の世の辛酸を嘗盡して、多かる記憶を有たるのみぞ、纔に此境には堪ゆべからむ。如何にとなれば、渠等は其歴史の古を追想して、覺束無くも荒涼たる今を、慰むべければなり。さりながら、有爲の血氣に富みて、一舉手、一投足も進取の計に非ざるは、なき壯年の人、渠は此悶々鬱々の容の内に閉籠られて、或時は既往の失敗に涙を流し、或時は前途の頼少きを慮りて、太くも其身を果敢なみつ。とは謂へ、信之は自ら分別する心と場合に臨みては、極めて剛毅なる性を有たれば、決して此寂寞の裏に全く失望し了りたるには非ざるなり。

折々は獨勵し、獨營めて、あはれ真理の光を放つべき時あるを信じて、慰めつゝ、尙ほ此無聊を遣るには、此上無き一つの物ありけり。此邊の風景は、太く渠の意に適ひたるなり。葡萄園の根も無く、青々と連りたる、笛吹川の緩々にいと白う流れたる、遠樹の朝朗近林の夕照、優に氣高く心に塵も置かせぬばかりの自然に對して、如何なれ

ば懲る風土に育てる村人の其腸は淺ましくも穢れたるにやあらむとは毎に念頭に上れる不審なりき。六右衛門は此朝夕の散歩をば他國の流浪人が我物顔に村の景色を愛であるくを憎むが如く、猜疑の眼を側めて覗ひたりけり。

國手は此競争者を控へながらいと無食着に渠の何をか爲むと侮る心あるにもあらねば、固よりいさゝか懼るゝにもあらず、蛆虫に等しき小作人などの備はれて來りたらむやうにぞ思做してゐたるなりける。渠が愛を興にせざるは、六右衛門の肚の中は百回千轉して、専ら渠が自滅の計を工夫せしなるべし。

移轉せしより半月約の後、信之が買はむとする米の價は暴に著しく騰りぬ。炭薪も暴に驚くべき高直となりぬ。八百屋は測びたる野菜を賣付け、酒屋は苦き醬油を擔込み、剩へ渠



は十錢を出して、村人の買へる五錢の品を得るなりけり。

八 お町よ泣くな

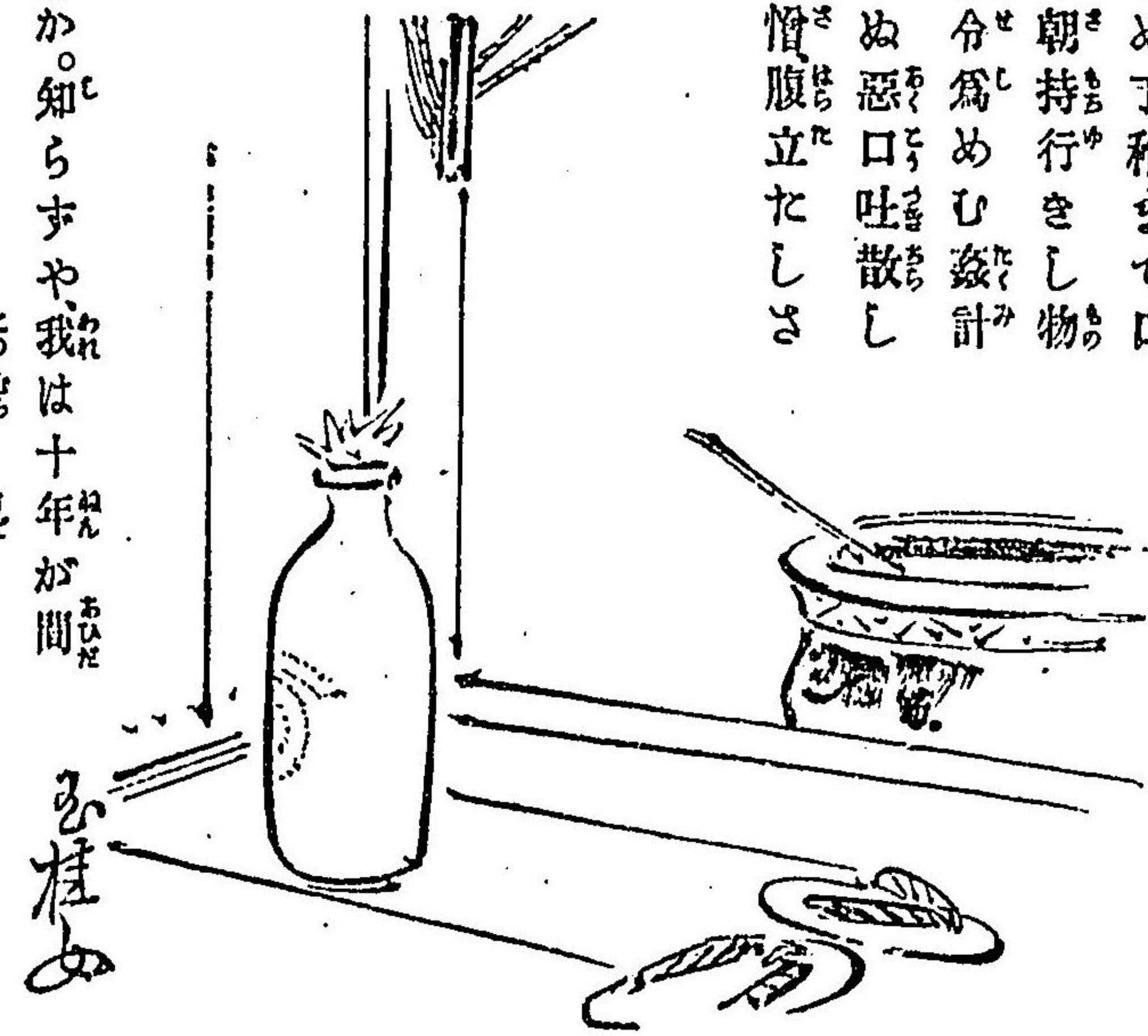
或日の事なりき。信之は茶の間の方にて巳を喚立つる婢の聲の慌忙げなるを聞きぬ。何事ぞと行きて見れば、お町は呆れ顔に酒徳利を眺めてゐたりしが、信之の來るを見て、旦那様之を見給へど訝しげに其物を指しぬ。今朝持來りし酒にあらずやと云へば、お町は頷きて、持來りし酒は水なり。紛無き水なりと、片口に移したるを示せり。

信之は其器を取擧げて視つゝ、實に水なりと語穩に言ひしかを、其毗は昂りて再び水なりと言ひし聲は稍顛ひたり。

お町は身を揉みて、おのれ憎き酒屋め、これも六右衛門奴が嗾せしなるべし。あの大悪人め、卑怯者め。談じて參らむと移せし水を徳利に收さめ、襪懸のまゝ水口を驅出でしが、有間ありて歸來れる渠の顔は蒼白めて、何をもちたぬ手に禪を握緊めつゝ、信之を見るより、腹敢へぬ涙を滴くと墮せり。如何にせしと、優しき主の氣遣はしげ

に訊ぬれば、お町は切齒をなして、主をはじめ丁稚まで口を齧へて、そのやうなる物賣りし覺無し。今朝持行きし物を今になりて難付くるは、言懸して今三合令爲めむ茲計なるべし。出直して來れど種々聞くに堪へぬ悪口吐散して、取合ふ氣色もあらざりしゆゑ餘りの可憎腹立たしさに、彼徳利は土間の石に打付けて微塵にして歸りたり。如何に六右衛門奴に頼まれたれば、とて罪も怨もあらぬものを、非道の酒屋め覺えて居よと身を顛してお町は泣きぬ。

可しと信之は咬緊めたる唇の間より泄せり。さりとて鄙劣なる六右衛門め、憚る小刀細工して我を此村より逐はむとするか。知らずや、我は十年が間一人の患者も來らず、千石の水を賣らるゝとも、やはか此村は動かじ



お桂

ものを。お町よ泣くな。酒を賣り、米を賣るは此村に限らざるなり。明日は勝沼の額細に頼みて、彼處の商人より品々を調へむほどに、必ず心を勞すなかれ。

憚りて翌日信之は此由を分署長の許に言遣りければ、商人は一週三度づゝ來るべく定められぬ。八百屋の日増物を賣付くるも、例の使噓なりと知りければ、家の後に曠かなる空地のあるを畑にして、日用の青物は此より得むとて、雇ふべき作男をば遠近尋ねけるに、貝塚家に關係あらぬ一人を探出しければ、云々と頼みけるに、渠はいと喜びて肯へり。翌日より渠は來りて、鋤を揮ひ、頗る忠實に三日が間働きしに、四日目よりは來らずなりぬ。五日目も見ぬざりければ、お町は其家に到りて、渠を促せしに、腰の痛みて立居も辛ければとて、斷りぬ。其折渠は背戸に出で、柴を碎してゐたるなり。お町は歸りて、憚と告ぐれば、信之は苦笑して、これも亦徳利の水なるべしと曉れり。

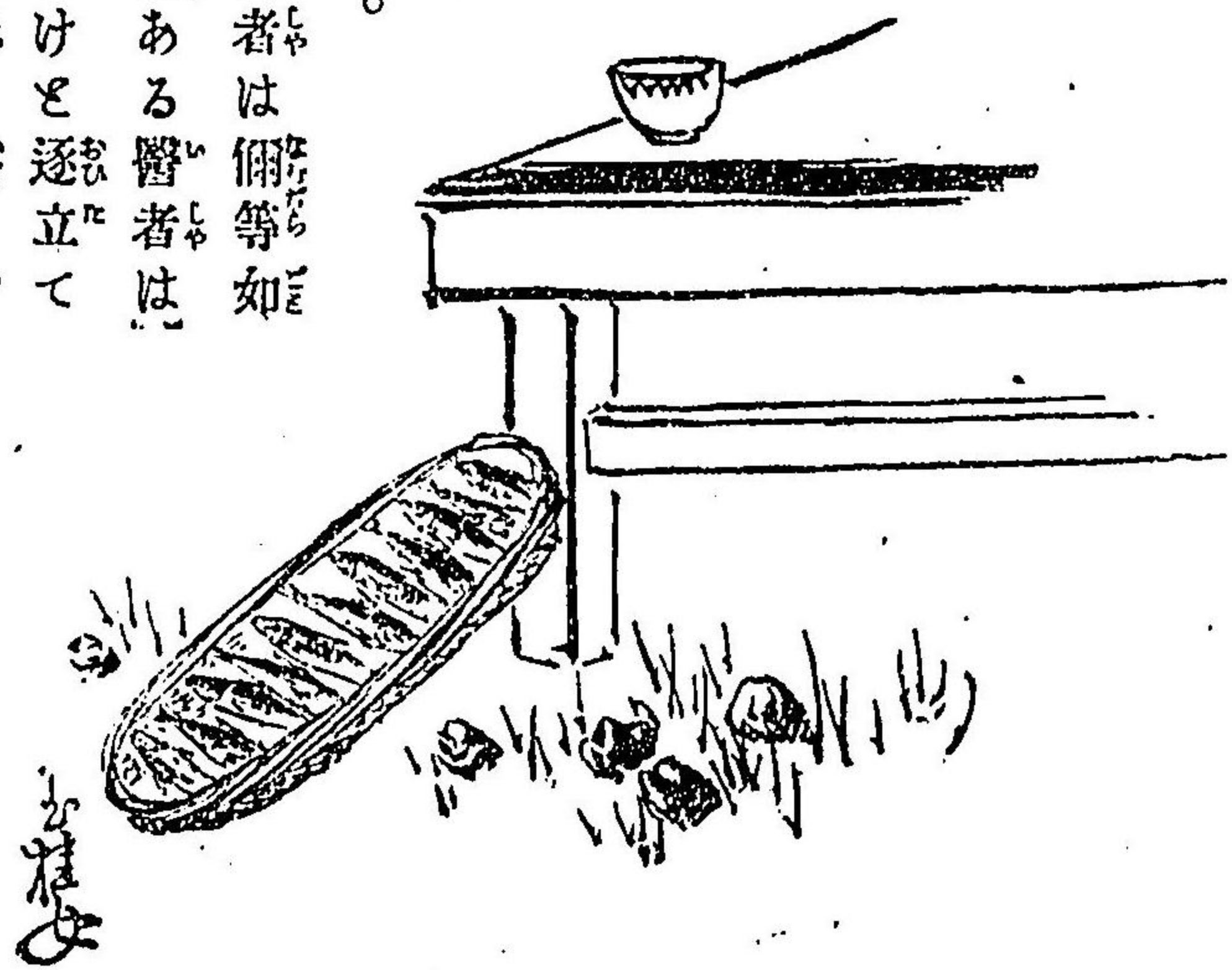
お町は愈憤りて、おのれの體力もあり、實験もあるより、射ら鋤把りて、其日より耕し始めつ。やがて日を経るまゝに、新開の畑は緑色になりて、十種に餘る菜蔬の類はいと健に生立ちけり。

九 又一件の計を授りて

茶店の定兵衛が、六右衛門に頼まれたる苦肉の計を行はむとて、此醫者の許に訪れたるは、方に此時なり。渠は禮を厚うして、野菜河魚などの御用もあらば命せられたしと言いでしに、信之は此男の如何なる人物なるかは、豫て分署長より聞き取れば、其淺き手段に乘らむともせず、今は用もあらざれば、重ねて世話になるべし、と言の下に謝絶せしに、渠は動せずして、近頃の運の悪さは、打續き二三軒の得意を失くせし上、先月は又第一の得意なる、以前此に住みたまひし醫者様も、貝塚の狸爺と村長とに窘られて、竟に引越したまひければ、仕入れし品々を背負ひこみて、然らぬだに不如意の手許は、太く窮して難澁せり。願くは従來の醫者様に御用を聞きし縁を以て、今日より御出入を許させたまへ、と陽に誠を粧ひつゝ、いと憐れげに述べたりけり。

信之は心可笑く、我は未だ一軒の病家も有らぬ貧窮の醫者なり。此村には貝塚といふ大盡はあらずや、なぞ其家に行きて頼まざる。

愆くと聞くより、定兵衛は膝を進めて、貝塚へ行けとおほせらるゝか。かの鄙客の狸爺が如何にして然る情をば施すべき。渠は言語に絶えたる奸徒なるを、先生は未だ知りたまはずやとて、渠の疎むすべく、賤むべく、惡むべき事實をば實に其心より出づる如く、まぎ／＼と述立てたり。信之はいよく可笑さに堪へずして、竟に言へり。爾の其語を眞實爾の肚より出でたりとせば、爾は一日も此村には住み難からむ。はや／＼歸りて或人に告げよ。此度來れる醫者は、爾等如きの底淺き姦計には、陥まらざるなり。眞に能ある醫者は、爾の忤の如き愚物には、あらざるなり。行け、行けと逐立てられて、定兵衛は悄々と想ひしよりは、賢き醫者の門を出



でつ。其足にて六右衛門の許に赴き在りし一々語りければ渠は打腹立ちて畢竟備の癡鈍なるより見露されしなりとて散々に置られ重ねて一件の計を授かりていと不首尾にて定兵衛は家に歸れり。

一日渠の女房は折しも店の前を過行くか町を呼住めたり。そのやうに急ぎて何處へ行きたまふぞ。今朝川にて獲てし香魚と岩魚の新鮮があるを買ひたまはずやと聞きてか町は内に入來りぬ。

女房は先づ茶を勸めていつも忙しきやうなるが御宅ほ用多き家もあらじと言ふを毫も忙しきこと無く人役の良き旦那様なりと、か町は渠の煽動に乗らざりしに、女房は再び話柄を求めて其給金を聞出せり。

年に十五圓と言ふを女房はいと驚きたる体にて御身は年十五圓にて満足したまふか。十七八の小女郎にても、それほどの給金は得るものを御身ほならば二十圓の相場なり。もし望みたまはば何時にても世話して進すべし。現に御身の針の利くを見込みて切に所望せらるゝ方あり。

給金の良きは望ましけれを、今の旦那様のやうなる御主人は又とあらじと、か町の

言ひも敢へぬに、それを給金多くて用の少き方なれば、能く考へても見たまへと服されて、か町は心ならぬを其家を問ひぬ。

貝塚の先生と聞きも果てず、牀几を起ちて五十圓にて貝塚奴に僱れむより、五圓にても今の御主人に奉公せむと言ふより早く戸外に出でたり。

香魚香魚岩魚を買ひたまはずやと女房は周章狼狽て呼回さむとせり。此時母家の簾の陰より面を出して、か町の後影を見送るは、貝塚の先生なりけり。

十 何用ありて來れるぞ

此村盡頭の笛吹川に臨める所に、一構の家屋の見ゆるは、貝塚の居室の如く宏大ならねど、其結構はなかく、殿しく、由緒あるべき舊水と見わたり。

信之は散歩の折々其門を往來せる毎に、憇る家の内に平和の生活を享くる富者の如何ばかり樂からむを羨めり。一日の逍遙に垣の内に小兒の戯る、聲の聞わけるを、信之は何氣無く立寄りて覗ひけるに、緑濃なる陰に二箇の愛らしき小兒は餘念無げに戯合ひつ。傍に三十歳ばかりの母は、鄙に稀なる容顔に微笑を含みて、二箇の

爲むやうを打目成りたり。我を忘れて佇みたりし信之は家の内より男の聲せしに驚かされて、やうく此を立去りしが、這は材木商なる内海鐵助の居室にて、其富は殆ど貝塚六右衛門に匹敵すべしと謂はるゝ分限者なり。渠は不正不義の所業に因りて、慙く爲出せしにはあらず、五代が間刻苦勉勵の結果に出でたるなりとぞ。さるからに六右衛門とは勢自から相反目して、渠は常に一村の内唯一人已に屈せざる内海家をば目の上の瘤の如く思ひて、あはれ如何にももして自家の天下にせばやと、數年の間陰謀奸策の品を替へて之に當りしかど、容易に顛るべくもあらぬ根生の身代なりければ、竟に其手段を變へて、村人をして其家と交らざらしめ、渠を孤立の境に置き、今は全く其勢力を殺ぎたるなり。鐵助は結句之を喜びて、おのれの傍なる二三十軒の



小農を合手に、一箇の別天地を作りて住みぬ。一朝珍しくも内海の婢は貝塚先生の玄關に訪れたり。國手は躬ら取次に出で、女の顔を見るより早く、何用ありて來れるぞと、尖聲を立てたるは、渠の仇敵なる内海の雇人たるを知りたりければなり。婢はいと懼れたるやうに、恭しく禮をなして、さて言ひぬ。昨夜より齧齒の痛烈くて、立ちても居ても難堪ければ、御療治を願はむとて参りたるなり。國手は眼に稜立て、御身は内海氏の奉公人ならずやと問ひ然なりと聞きて、苦々しげに頭を打掉り、さらば栗原なる御身の家の抱醫者の許へ行くこそ善けれ。我は我委託の病人ならぬものを療治すべき道あらず。然れを相當の御禮はせむものを、と渠は露骨に言ひぬ。栗原へ行けども、國手は取合はざりけり。患者は頬を抑へて、物言ふも憂き痛をば忍びつゝ、その暇のあらざればこそ、慙く参りたるなれ。助くると思召して療治したまへと切に乞ひぬ。狙けく、と國手は壁を蹴立て、奥の方へ入りぬ。婢は爲む方もなく、歸りて一伍一什を内君に語りければ、此上は是非無し。やがて栗原へ遣るべけれど、今は忙し

川吹笛

くて其暇無ければ、夕暮まで待てとあるには、はや一刻の辛抱もなり難しとて、渠は蓋處を轉廻りて苦みぬ。
 近頃此村に新しき醫者様の來りたりと聞きしが、其方は知らずやと内君は問ひぬ。
 下婢は最惱しげに頬を挿へて、蟲の鳴くが如く、先月の初甲府より來りし醫者様のありとやら、其方へなりとも行かむことを許したまふか。さらば何か苦からむとて、内君は直に出し遣りつ。愆くて渡信之は始めて患者を得たるなりけり。
 渠は其家を尋ねて治療を乞ひぬ。信之は此賤きものを侮らずして、懇篤に施術したりしに、痛は忽ち薄ぎて、其歸らむとする頃には、殆ど忘れたるばかりになりぬ。
 渠は此怡悦に就けて、今朝の腹立しや憶出しけむ、口を極めて貝塚の傲慢を嘗り、其不仁を怨へたり。信之は唯渠の言ふに任せて、おのれは一言をも挿まざりけり。
 内君は良有りて下婢の嬉しげに歸來るを見たり。渠は他の問ふを俟たずして、具に在りし子細を語りぬ。特に其醫者の親切をば丁寧反復して、その先生といふは、貝塚の藪醫者などの比較にあらず。色白く圓顔にて、髪は麗しく、髭は立派にて、愛嬌ある眼元は役者のやうなり。其手の纖々に美しく、柔なりしことは、寔に女子にも希なり。

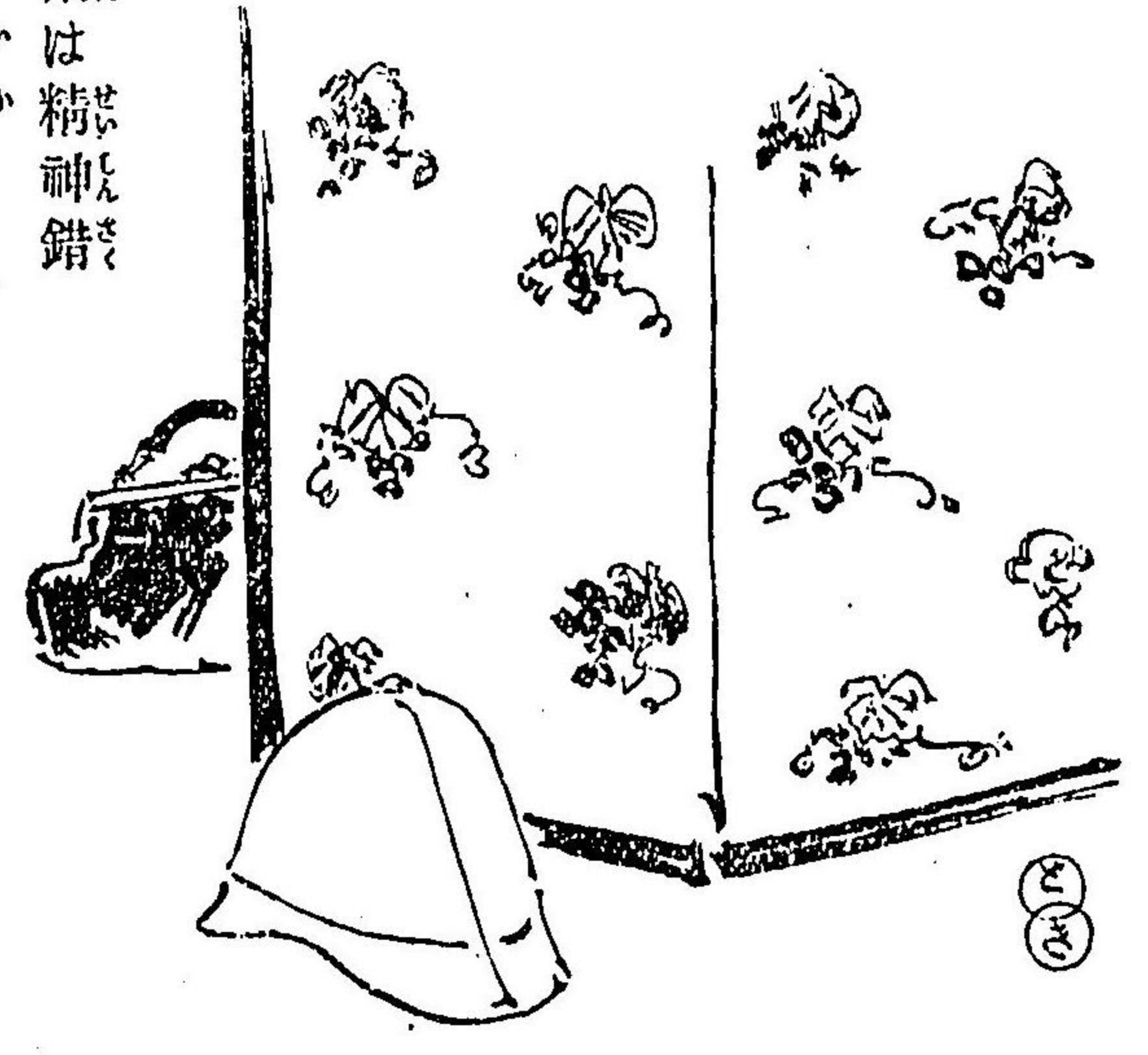
言語も温しく、舉止雅にて、田舎には惜き人なりと、散々に稱揚るをば遮りて、禮は若干なりしとぞと内君は問ひぬ。下婢は眼を睨りて、無料なりと答へつ。内君の怪む顔を心快げに打目成りて、これしきの事に禮などは要らぬとて、かの先生は受けざりしのみならず、玄關まで我を見送りたまへりと、其面に喜色は進るばかりなりけり。此夕内君は此一伍一什を夫に語りけるに、鐵助は眉を皺めて、さては其醫者も六右衛門が爲に憂目を見せらるゝならむ。我も其人は屢川岸にて見掛けしことありしが、三十前後と覺しき、人品の勝れたる人物なり。不便なれども、此村を追拂はれむは頓てなるべし。然ばかり深切なる醫者ならば、せめて一箇は此村にも在りたきものを、と鐵助は呟けり。
 然らば御身は其醫者の後楯と頼まれて、貝塚の藪醫者を滅したまはずや。我等はかの惡徒の爲には、幾多の難儀を見たりと思ひたまふ。女の身ながら、平日口惜う思ふものを、と妻は膝の前むを覺えず。鐵助は打笑ひて、渠等と争ふは、毛を吹きて疵を求むるなり。萬一の時近きに醫者のあらざるは、便無ければ、今日の禮旁二三日の内に、我自ら訪れて、懇親になりて置くべし。

此翌々日八代郡の村より村へ傳はりて、風の便に岩崎村の人心を駭かせし聲あり。虎列拉にあらずや、虎列拉にあらずや。

十一 我娘をば助けたまへ

村人は安き心もあらざりしに、悪疫は早くも岩崎村に侵入して、其翌日の午前二人の男子と一人の女子と一人の小兒は、啊呀といふ間に斃されたり。午後及びては、二十餘人の新患者顯れたりとて、村中の騒動は恰も鼎の沸くが如し。内海の總領娘の十歳ばかりになれるも、感染して、凄しき吐瀉の爲に見るく、麻れ果てて、死は目前に迫來りぬ。鐵助は殆ど狂亂して我家を飛出し、一目散に渡が家を指して走りぬ。路々遇ふ者とは同じく走る者泣く者、戸口に佇む者群を成して語る者、いづれも悪疫に驚かされて心を動かすなりけり。彼方より戸板に載せたる男を四五人の昇來るは、葡萄園にて勞働中暴に此病に襲はれたるなりとぞ。鐵助は益慌て、信之の玄關に躡込み、先生先生と聲も絶々に、渠の面を見るより、娘が急病なれば、直に御同道を願はむと喚はりぬ。信之は其誰なるを糺すに違あらず、

辛うして御病氣はと問へば、虎列拉なるべしと言ふ間も、惜しげに鐵助は足踏して急立てたり。信之は手早く數箇の小瓶を手提の藥籠に投入れて、渠と與に戸外に出づれば、鐵助は人を逐ふが如く走れり。信之も後れじと走れり。此一村大恐慌の最中にて、人目は敏く、今しも鐵助が新しき醫者を伴ひて我家へ行くを見逃さざりければ、直に六右衛門の耳に入りけるなり。信之は其門に着きて、始めて病家の内海なるを知れり。渠は病室に入るや否や、先其眼に映じたるは、嘗て垣間見し内君の蒼白めたる顔なり。渠は精神錯亂したる風情にて、先生、我娘をば助けたまへ。如何にももして是の命を救ひたまへ、と啼泣叫びぬ。



信之は急ぎて患者の身近に進みつ。姑く篤と診察して、やがて其手を退きける時、
 は頗る安心の色を顯して、餘に案じ給ふなど慰つゝ、持來りたる瓶の一箇を取出し、
 其藥の數滴を茶碗に移して、少量の水を合せ、現に横はれる娘の口に注ぎ、他の瓶
 なる硬き藥を湯にて和げ、患者の胸の邊より腹の一面に抹りて、又前の藥を飲まし
 めて、後再び例の布藥を用ゐぬ。此間兩親は一語をも發せず、一室の内は閑寂として、
 蠅の羽音の響くのみなり。

藥用の後、信之は呢と患者の容體を打目成りたり。母は恐懼其安危を訊ねけるに、必
 ず案じたまふべからず。恙して置かば、一時間の後には寤からざる快癒を見るべし。
 路々如何あらむと危みしに、手後にならざりしは、此上もなき幸なり。と聞くより母
 は勇を爲して、さては娘の命は安全なり、と先生は仰せらるゝか、と涙を流して喜べ
 ば、父も拜謝して、いつか此御恩を報せざるべき。

十二

其病の傳染を懼るゝか

信之は此を辭して家に歸りしが、まづ此始末を分署長に報せむと、對挽の車を飛し

て勝沼に到り、今朝より村に起りたる驚慌の狀を告げて、惡疫は益々蔓延の勢なれば、
 此方にも早速豫防法を行ひたまはざるべからずと誨へて、飛ぶが如き車を我村
 に返しけり。

今は私の怨を抱くべき時にあらず、恚る折こそ醫者たるものゝ義務はあるなれ。平
 素我に仇なす村人の憎からぬにはあらねども、有繋に渠等を見殺にせむは仁なら
 ず、と思立て、村長を訪ひしは、假病院を建てむとの勸告なりけり。それには然せる經
 費を要するにあらず、馬小屋同然のものにて、差支あらざれば、唯望むらくは片時も
 事の速ならむことを。而して不肖に十人許の勞働者を貸與へたまひなば、十分力を
 盡して、無報酬にて治療せむものをも言出しけるに、村長は極て冷淡に、頑冥なる村
 人は病院などに入れられむことは、太く嫌へば、折角の効はあらざらむとて、此面倒
 をば避けむとせり。可矣さらばと、信之は思定めたる氣色にて、此上は御身は不肖と
 同道せむことを辭みたまはじ。不肖はこれより御身と與に患者の家々を巡廻して、
 普く施療すべしと言へば、渠は黙してゐたりけり。
 如何にくと詰寄せても、村長は猶逡巡して確答を與へざりければ、信之は忽ち憤



を發して御身は其病の傳染を懼るゝかど置りたり。信之は渠が逡巡の原因を誤解したるなり。渠は惡疫の傳染より寧ろ六右衛門の暴威を懼るゝなりけり。

然れども村長は渠の語を利用して傳染の甚だ恐るべきを口實にして遠れむとしたりしに毫も恐るゝに足らず。必ず傳染せざらむことを此波が保證すれば是非に御同行あるべし。御身は此村の長とも云はるゝ人にあらずや。安ぞ一身の難をのみ慮ひて一村の危きを顧みざる。村長たるの職務に對して御身は此同行を望まざるべからず。進退ならぬ苦紛れに、そは到底行はれまじきことなれば、と聞くより信之は勃然として色を作し、何ぞか言ふ。御身

は如何なれば、恠くも身怯に薄情に意氣地無き音を出して、耻辱とは思ひたまはざるか。御身は御身の岩崎村の村長たることを隠れたまへるか。御身は人たるもの、事に處するや、時には水火の裏にも投せざるべからざるを知りたまはざるか。御身は船に居て、傍に人の溺るゝを觀むとしたまふか。

信之が同情の熱は猛火の如く烈々として、その面上に顯はれたり。有繫に村長も此男らしき言に感奮したると覺しく、竟に身を起して、然らば左も右も同行せむと言ひぬ。

信之は忙しく村長を伴ひて門に出づれば、夕暮の微暗に屹然と立てる人影あり。唯見れば、貝塚六右衛門なり。村長は忽ち色を失ひて、渠の墮れる眼の前に意氣地無くも頭を低れて一竦になりぬ。鄙しげに此躰を見返りたる信之は、備が虎列拉を恐るゝ所以を知れり、と聞えよがしに眩きつゝ、足を疾めて單身行けり。

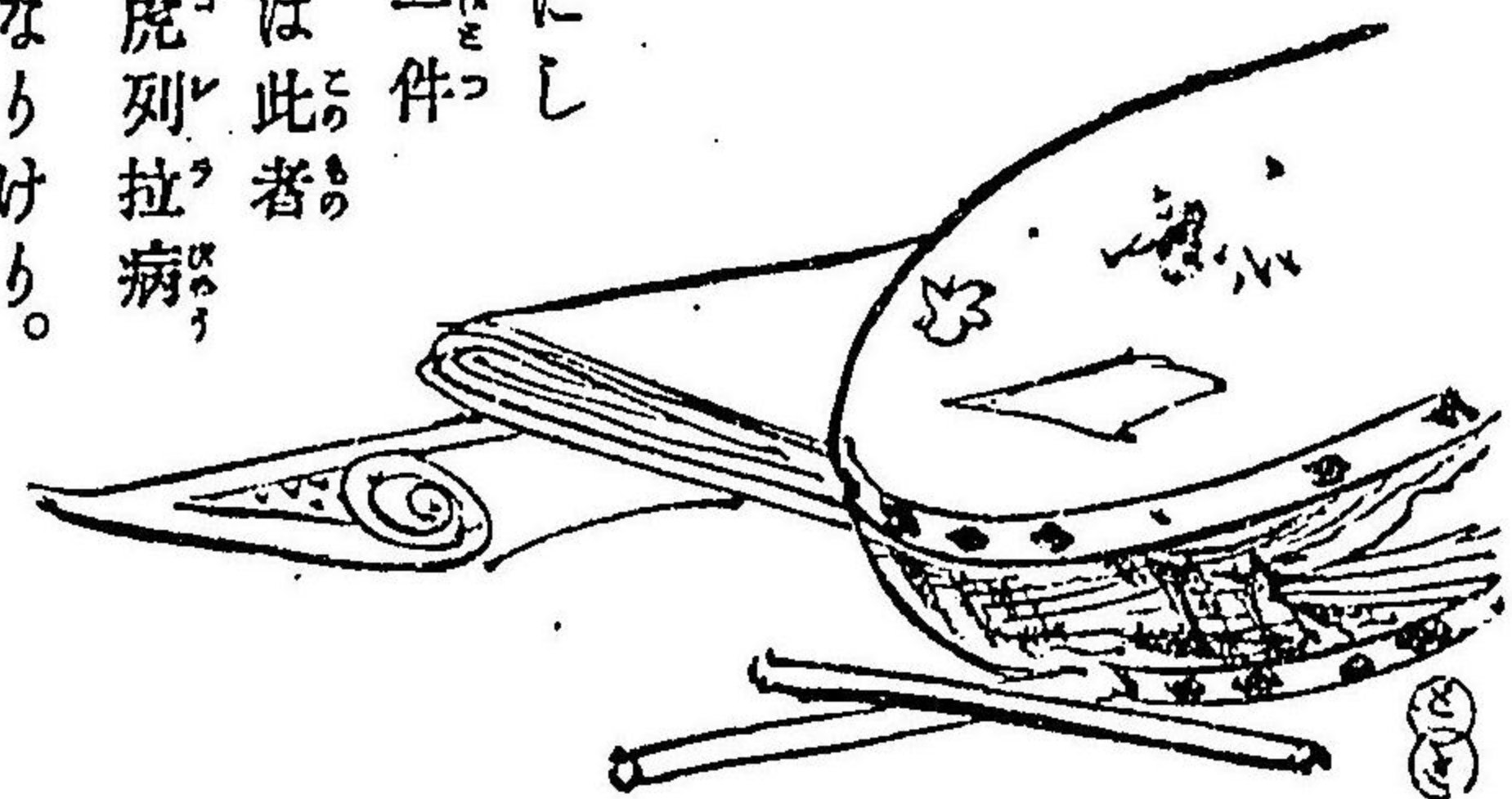
十三 我の四拾錢を受けよ

一町ばかりも來りける比、唯有る門口に一箇の婦人の泣く泣く行むを見て、如何に

せしと信之の問ひけるに、可憐と思ひたまへ、我夫は病に罹りて將に死なむとするなりと言ふ。おのれ診察して、助かるべき命ならば助けて得させむと聞き、さては御身は醫者様なるか。御志の程は嬉しけれども、私の頼めるは貝塚の先生なれば、御身の療治は受け難きを奈何にせむと、女房は稍當惑してゐたり。さらば御身は可愛の夫を殺しても、貝塚家には見放されしと思ふかと、窺ひれば、渠は返す言も無く、遁るが如く内に入りぬ。

今更ならぬと信之は、貝塚の勢力の太甚に驚けり。我は如何にして此勢力に勝ちて、村人の桎梏を解かむかと、百方工夫して、一件の計を得たりければ、明るる朝消防夫の十吉を訪れたり。渠は此者を雇ひて、太鼓を鳴して、村中を駆廻り、尙且辻々に貼札して、虎列拉病流行中、渡信之は無料にて、村人を治療せむと、廣告せむが爲なりけり。

十吉は委細承みて、身輕に扮装し、火之番の太鼓を抱へ、十數枚の貼札を懐にして、村



の街道の方へ走りぬ。恰も四角を曲らむとせる時、衛と前に隠れたる六右衛門は、十吉何處へ行くかと、聲も鋭く呼びかけたり。

頼まれたる急用ありて、と聞くや否や、頼まれたりとは誰に何用をを問ひぬ。渠は其通を答へて、忙々しく行かむとするを、六右衛門は、住めて、頼は幾何の賃金を貰ひしぞ。二十銭とならば、我にも頼みなき急用あり。それよりは、易き事にて、四十銭拂はむと思ふが、頼は承引くべきやと、嗟かせば、十吉は喜びて、望む由を告げぬ。然らば直に私の用を頼まれよと、はや懐中より茶羅紗の紙入を取らせり。渠は狼狽して、今は渡橋より頼まれたる用事あれば、之を濟さぬ内は、と頭を掻けば、われの囑託といふは他事ならず、その渡の依頼を断れといふ事なり。されば、頼は何をも爲すして、四十銭を得るにあらずやと、六右衛門は説得せり。十吉は益頭を掻きて、貴命なれども、はや其賃金を受取りたれば、爲む方もあらずと言ふを、六右衛門は打消して、設ひ賃金を受取りたりとて、返さば、義理に背くことはあらじ。渠の二十銭を返して、我より遣はす四十銭を受けよとて、銀貨二片を差附けて、返りければ、有繋に十吉も、慾と義理との間に迷へり。六右衛門は渠の躊躇ふ氣色を見て、頼が自身に断りに行かむを辛しと

ならば備が家の俵に持たせて宜きやうに言はずべし。受けよ、受けずやと、六右衛門は竟に彼銀貨をば擱ませたりけり。約そ三十分の後渡の玄關に入來れる十一二歳の男の兒あり。膚は日に焼けて紫々ど光り、髪は棕櫚帯の如く、眼の邊まで覆被りて、悪作劇盛の相貌なり。信之は出でて見るに、物訊ぬれども、抄々しうは口も得利かず、十吉より來れるが之を返すなりとて、卷きたる紙と銀貨とを式臺に投出し、迹をも見ずして一散に馳行きけり。

十四 徹裏を御耳に入れむ

憤怒の念失望の情は此時油然として渠の心頭に集まり來れり。渠は此上無く侮辱されたる心地して、無念を握る拳の裡に一卷の貼紙は揉潰されたり。これも六右衛門が指圖に極れり。如何にしてか此辭憤を察さむ。如何にしてか此怨敵を殲さむと、渠は玄關に佇みたるまゝ、少時已を忘れたる折しも門を來るは内海、鉄助なり。慙くと見たる信之は其心に太甚しき苦痛を感じたり。此不意の訪問こそ正しく娘

の危篤を告げむとてなれど、早くも渠は推量して、御病人の容躰はと蒼き息の下より打出しぬ。鉄助はいと穩に、御蔭にて大方ならず快方に趣き、今ははや熱も減じ、物も言ひて、食をさへ求むるやうになりたれば、御安心あるべし。我の参りたるは病人の事申上げむとはあらず。餘に不躰とは存すれども、先生の御身に關したる事なれば、徹裏を御耳に入れむと思ひてなり。先生は貝塚六右衛門なる者を御存なるか。此村に暴威を奮ひ、無辜を苦むる奸物を誰か知ざらむと、信之の唇はふるくと顫ひぬ。鐵助は打領きて、然らば其奸物の手段を運して、頻に先生を困むるを御存なるか。餘に知りて、今は渠に對して心魂に徹する怨恨を懐けり。屢困めら



れ風辱められて、此上は渠の肉を啖はずば已まざる覺悟なり、と有繫に無念の面色なりき。

實に此村に來りし醫者は誰もく渠の爲に困められて一人の住着き得たるはあらざれば先生も頓て其例を洩れたまふべくもあらざらむ。身不肖なれども娘が再生の恩人なる先生の爲に、あはれ聊か報むむ意にて、今より以後は一臂の力を添へて、我斃るか渠滅ぶか善と惡と、正路と非道との勝負をば唯一戰に決せむとて、御意見のほどを伺はむ爲、慙く罷出たるなり、と鉄助も寡からず激したる有様に信之は百萬の味方を得たる想して、我にもあらず手を抗げ、膝を拊ち、渠が平生の沈着なるに引替へて、その歡喜のほどは實に全身に溢れたり。

こは世にも辱き御情かな。我も從來有らむ限の力を盡して、此敵に當りたりしかど、空拳獨力の奈何とも爲し難くて、運命旦夕に逼れるなりけり。今も今とて慙る目に遭へりしが、と具に廣告の顛末を語りて、然るに御身如き有力者の應援あるからは、渠を滅さむに何の難きことあらむ。於戲天は終に善に與するものなり、と信之は躍らむばかりに勇み立ちぬ。

先生も然やうの御了簡ならば、六右衛門如何に奸智に富みて、惡策を運さむともやはか恐るべきと、怨恨ある身の鉄助も慙る同氣の味方に會ひて、いと頼しく迭に喜合へりけり。

十五 數醫者の置きて行きたる藥

更に鉄助の言ふやう、村人等の六右衛門に懾服したるは尋常ならざれば、有間は御身の此村に病家を得たまはむこと極めて覺束無からむ。然れば當分我手に役も、のどもを預りたまはずや。軒數は多くもあらず、僅に三十軒内外なれども、左右は御身の生計を支へむやうに計ふべし。その内に纏て六右衛門をだに折きなば、此岩崎村は御身の心の所欲ならむ。信之は之を聞き、彌喜ぶこと限無く、其懇切なる辭に従はむと誓へり。

慙くて二人の連立ちて、先見舞へるは極貧なる勞働者の家なりき。主は既に死して、妻も今將に同じき病に死なむとするなりけり。七十歳約の老母は五歳になれる孫息子を抱きて、其床の邊に泣くく座りたり。無殘なる狀は實に目も當てられぬば

かりなれども、奈何にせむ、はや事過ぎて、救済の道は絶えたるなり。爲む方無ければ、此を去りて、二人は次なる病家を訪ひぬ。
 病に惱めるは平生資性良き林藏といふものなり。鉄助は其枕頭に看護せる女房を呼近けて、上手なる醫者を伴ひたれば、心配に及ぶまじき由を語り聞せけるに、渠は思寄らざる氣色にて、はや貝塚の先生に御願ひ申したれば、と見馴れぬ醫者の面を打見遣りつ。貝塚のやうなる藪醫者に係りて、命の助かるべきかと、鉄助は懐えかねて叱りぬ。

然れども、女房は口籠るを、然れど如何にせしと問詰められて、貝塚様より借りたる金子のあれば、もし懸る事の露れたらむ曉には、と女房は途方に暮れたり。
 其金子は我手より返して得さすべしと聞きて、それのみならず、此家も貝塚様のなれば、と力無げに訴ふれば、よし、然らば我が有てるを貸すべし。
 此問答の間に、信之は病床に進みて、はやくも診察を了りて治療を始めつ。此躰を見遣る女房の顔には、懸念らしき色も見えたり。鉄助は再び渠に向ひて、藪醫者の置きに行きたる藥やあると訊ねければ、女房は起ちて佛壇の裡より取出せし藥瓶をば

這は先程取りに行きしものなりとて差置きぬ。
 鉄助は之を信之に渡して、其藥の如何なるものなるかを檢せむと望みぬ。信之は治療せる片手に瓶を取舉げて、微紅く色着きたる水藥を振盪し、明るき方に翳して、眞久し眉を蹙めて、打目戌りたりけるが、やがて徐に下に置いて、再び治療に懸りたり。
 如何なる藥にや。我は彼藪の處方を毎にいと覺束無きものに思へるなり。此藥は果して此病に利くべきものなるか、と鉄助の答辭を促せば、姑待ちたまへと、信之は治療を了りて、さて再び彼瓶を把りて、兩三回其藥を味ひぬ。

十六 些は角を折るべし

箇は藥劑といふべきものにあらざると、信之は呆れたり、藥にあらざれば毒か、と鉄助は驚きぬ。毒にもあらねば、藥にもあらず、汗に少量の葡萄酒を混合したるなり。試に味ひたまへと、瓶をば鉄助に渡せり。渠は其藥を嘗めて、馬鹿め世間には不敵の無法者もあるもの哉。恚くても人命を管る醫者殿なるか。渠は何ばかりの馬鹿にても、乃

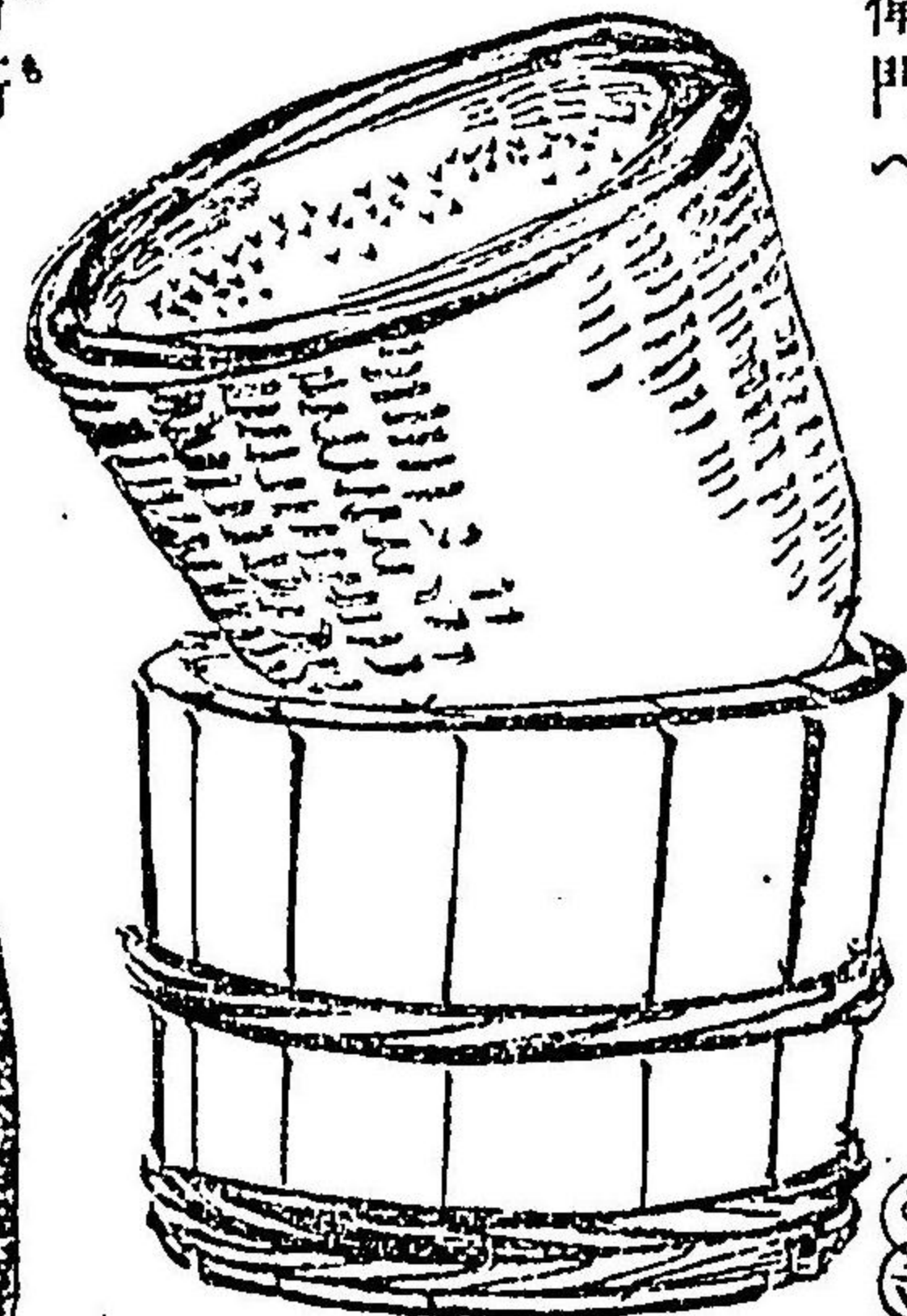
至は無法者にても差支はあらざれど假初にも醫者の肩書あるが爲に掛替のあらぬ命を委する人こそ不便の至なれ。好、好、我は此藥を以て六右衛門奴を思ふまゝ驚かし思ふまゝ苦めてくれむ。

さて又渠は林藏に向ひて昨日おのれの女兒の働と同じき病に罹りて既に危かりしを、此先生の帳く九死を出したまひし功績のほどを語りて、今より懸念無く此名手の治療を受くべきを論せり。病人は唯々として従ひけれど其面には多少の心配を顯したりき。

醫者は此家を出でむとせる時女房に向ひて、夕刻には又見舞に來るべければそれまでは此儘安穩に臥せしむべし。必ず三日の内には業にも出らるやうに平癒させむと苟且ならず契りけるを、女房は且喜び且疑ひて三日の内には？と言へば如何にもと確に答へて、二人は又もや他の患者を訪はむとて急行きぬ。

内海鐵助の信用ある地位と親切なる説諭と、渡信之が清秀なる風采と、精練なる醫術とは、勘からず村人の心を動かせしなりけり。訪問せられ治療せられ慰藉せられし人々は心の底より皆一様の好意を渠等二人に抱きけるなり。

御身は彼藥瓶を如何に爲ひとにや、と信之は途上買しけるに鐵助は得々として御身は觸て此小さな瓶が我等の爲に大いなる活動を爲すを見給はむと言ふ。如何にしてと信之は重ねて問へり。我は今宵六右衛門へ手紙を遣らむと思ふなり。其内には具に此藥瓶の始末を認め、もし渠の懲る無法なる醫者を村人に強ひて、なほも我等に妨害を加へむとならば、我等は之を懸慮へ上申して、此怪き藥劑の分析を願はむ。覺悟なれば豫め此趣を通ずるなりとて、先渠の膽を破らむと思ふ。然ては如何なる六右衛門も我等に對して些は角を折るべし。信之は頭を掉りて想ふに、渠の如き奸物は容易に其志を折きて人に屈すべくもあらず。されども渠の頂に一針を加ふるには足らむか。試みたまふも一興なるべし、と夕刻の再會を契りて、二人は此に袂を分てり。



鐵助は家に歸りて在りし事も妻に語りて、又忙々しく出行きぬ。村人に會ふ毎に、新しき醫者の上手なる事我女兒の虎列拉より救はれし事林藏の藥の事も功績の如く吹聴したり。這は内海鐵助と云はるゝほどの人の吹聴なれば一方ならぬ効ありて誰もく一點の疑を容れず所耳を傾けたりけり。

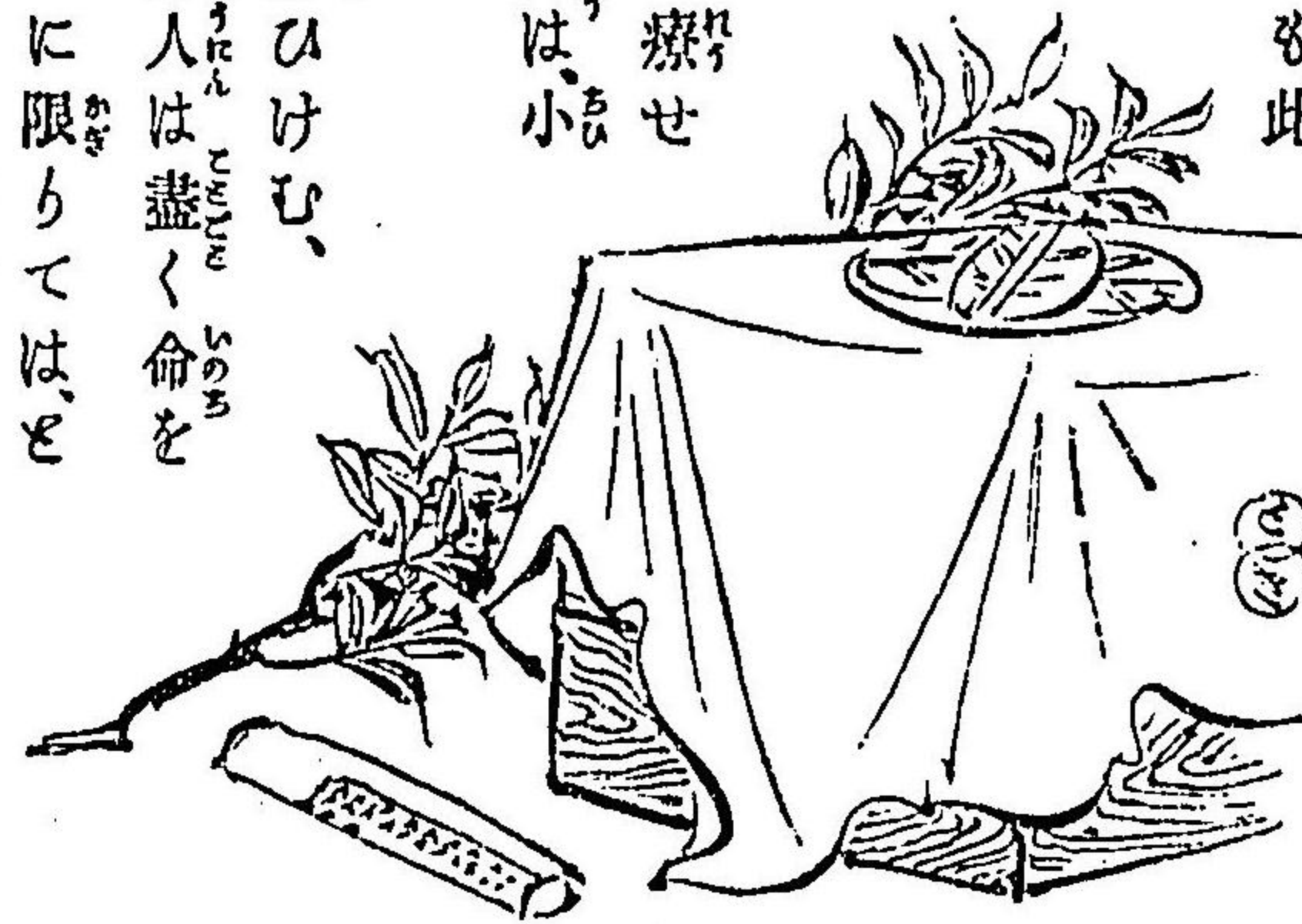
十七

信せざる神は恵を垂れず

虎列拉の起りてより、貝塚の先生は未だ曾て覺えざりし苦惱を其心に感じたるなり。人は皆渠の門に聚りて治を乞ふにぞ、渠の覺束無き技倆は固より此劇烈の疫病に應ずべくもあらざれば奇怪なる水藥、胡亂なる散藥或は無害なる煉藥等を手所欲に與へて、辛くも醫者たる責を塞ぎしなりけり。此數ある患者の内にて五六人だに首尾好く本復せむには、左にも右にも我名譽は繋得べしと思ひたりしに、其日の夕暮には病勢忽ち募りて、一時に四十餘名の患者を生じ多くは嘔くと登れけるほどに、渠の心痛は益加はりて、如何に爲むとも其力には及ばずなりて、獨途方に暮れたりしが、この絶跡絶命の苦紛に、歸郷以來曾て手

にだに觸れざりし醫書を練披げ、血眼になりて數卷の要所を涉獵せり。然れども信せざる神は恵を垂れず、獨逸の大博士が著したる大冊も、此慌てたる國手には恰好の療法を教へざりしなり。渠は此に於て彌狼狽たり。

加旃茶店の定兵衛の言に因れば、おのれの競争者なる新米の醫者は此機に乗じて腕を奮ひ、内海鐵助と結托して村中を駈廻り、おのれが受持の患者四名を施療せしに、渠等は逐日に快方に趣くと知りて、渠の心の驚慌は、小さき池に大波瀾を起したるが如くなりき。定兵衛は積る平生の怨恨をば此時に霽すべしと思ひけむ、わざと不審に堪へざる面色にて、彼醫者の手懸けし病人は盡く命を助かりしといふに、何故なれば先生の御藥を戴くものに限りは、と有聲に語を止めしが、されど這は上手下手の論にはあらで、不幸にも先生は死神の魅きたる者をのみ背負ひこみたまふ故ならむ、といと異しげに笑はれて、



國手は覺えず冷汗を掻きぬ。日常は昆蟲同然の定兵衛もいと恐しく思はれて、渠は勿々に別れて家路を辿りつゝ、思案に晦れて取つ追ひつ、我は如何にして此困難に處すべき。醫者といふものゝ、懲許苦勞の甚しき者ならむとは、從來些も思ひ寄りざりしなり。愆くと當初より知りたらば、我は醫者なぞにはならざりけむをなぞ、意氣地無くも思ひ弱りて、その夜は交睡みかねて明しけり。

世間の醫者は危篤なる患者の爲に、或は得知れぬ病根の爲に、寐難き夜に思を勞はす例はいと多かるべし。吞氣なる國手の貝塚六之助は、開業以來五年が間に安き夢を結ばざりしは、此夜を以て初度とはするなりけり。渠は一時に四十餘名の患者を、塵殺にして、始めて醫者の責任の重きを悟りぬ。其子の親なる六右衛門の心痛は實に幾多なるらむ。然れども剛氣鐵の如き老六衛は、渠の如く挫けず、苦みつゝも打笑ひて、之に處すべき計を案じたりけり。

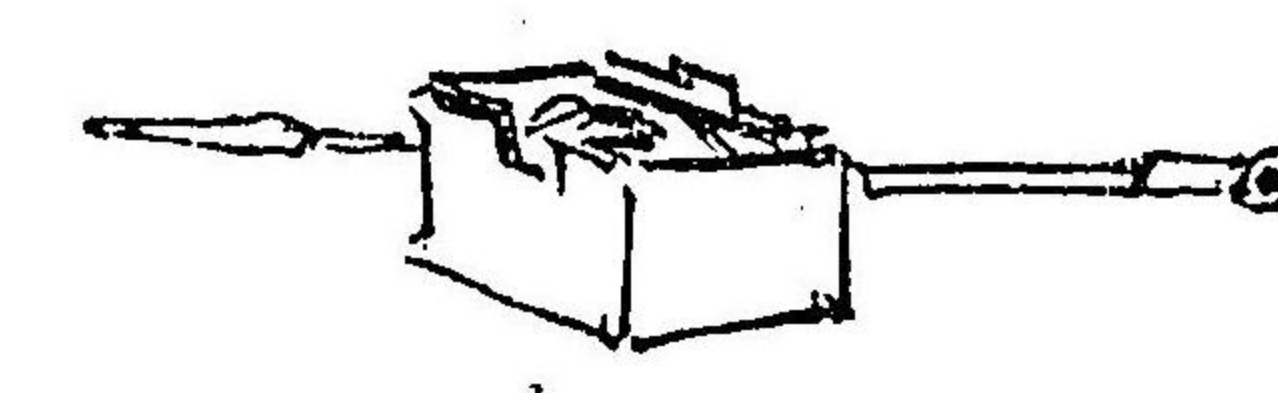
十八 決して害あるものにあらず

貝塚の家にては方に晝餐の支度最中なり。六右衛門は思案しつゝ、座敷の彼方此方

を逍遙せるが、這は渠の困却せる時の癖なり。妻の辰は茶間に購立してゐたるが、不圖も此躰を窺ひて驚きぬ。渠は此癖を能く知れ、ばなり。如何に爲給ひしやと氣遣しげに問へば、六奴が意氣地無きには困りたりと六右衛門は猶忙しげに座敷の内を往來しつゝ、また六が要なき事を爲出したるか、と渠は夫の穩からぬ氣色を見つゝ、訊ねたり。

彼醫者と警部とが合同になりて我に抗はむとせしを、やうく喉止めて置きたりしに、六奴が例の虚氣なるばかりに、又もや一個恐るべき敵を作りたるは返すくも無念なり。實に親なればこそ、愆くても愛相は盡さるなれど、六右衛門は遣る瀬無き長吁を泄せり。

此時次の間の鏡の開く音すれば、六之助が還りたりと、妻は再び膳立を急ぎぬ。渠は途上にて定兵衛に諺され、おのれの不面目と、患者の處置とに苦みつゝ、歸來れるなりけり。



國手の面は惱しげに、六右衛門の眼は恐しげに、お辰の眉は愁しげに、渠等はいづれも鎮靜返りて、式ばかりに食事を畢りぬ。
 母は箸を舍くや否や急起ちて背戸の方へ出行きぬ。這は群雞に餌を與れむとてなり。迹には父子兩箇物争したりし如く不興氣に相對ひたり。やがて父は徐に國手に向ひて、爾は此度の流行病に就きて如何に考へたるやと問出せり。如何に考へたるとは、と姑く思索して極めて恐る可きものと考へたり。と國手は應へたり。
 謂ふまでも無き事哉。それしきの事は醫者ならずとも誰か知らざるべき。今日も八人許死にしとは信か。信なり、と渠は憶する色も無く。然らば更めて問はむが、爾は受持の病人をば一個なりとも本復せしむる心算ありや。心算は無きにあらず。

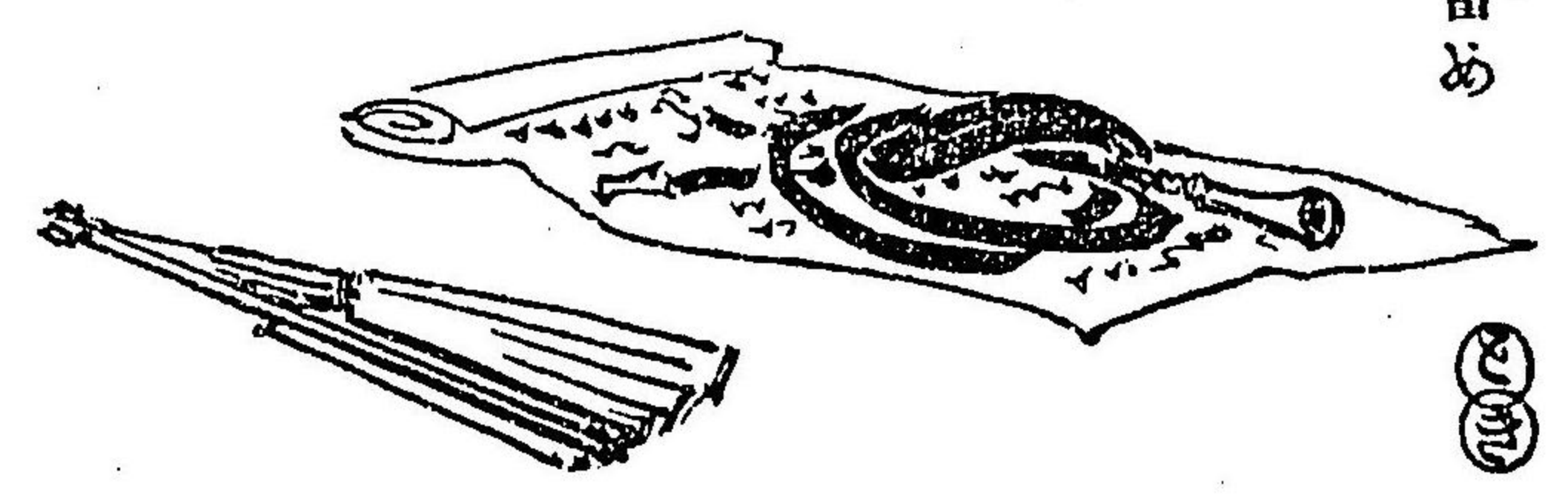
十九

今日かぎり醫者は罷めよ

爾の無學は恕すべきも、爾の虚氣は忍び難し。見よ、之を見よ、と六右衛門は一通の手紙をば國手の目前に突附けたり。是こそ内海鐵助より今朝送來せしものなりけれ。國手は疑懼手に取りて、五六行讀むと俾しく其顔は然ゆる如く、一通覽了りてはい

と頭も擧らざりけり。父は此躰を流明に掛けて、ろの水薬は何々を調合せしぞ。國手は彌恐縮して息を凝せり。
 親に何をか秘むべき。言へ言へ眞直に言へ、と勢籠みて迫らるゝにぞ、國手は這るべき路も無くて、やうく面目無き面を擡げたる。唇と唾ける父の眼は血を帯びて爛々を耀けり。國手は聲震はして、米の泔とアキズンチヤホールセスとに成りしなり。其アキズン何とやらとは何ぞ。
 純良の葡萄酒なり。
 若し恚る場合ならざらむには、此兒戯らしき細工、此禁厭らしき御水に對して六右衛門は聲を揚げて大笑もしつべかりしなり。然れども今は眞面目なり。
 手も着けられぬ大馬鹿め、方圖の知れぬ大痴漢め、爾は一歳づゝ齡取るほど愚癡になれるなり。爾の如きものは、百人の父が介添に付けばとて到底一人の信之に勝つ能はざらむ。見よ、見よ、數日を出でずして、爾は一人の患者もあらぬやうになるべし。今日限醫者は罷めよ。次手に罷めらるゝならば、人間も罷めよ、と息をも繼がず罵りたり。

國手は一言も無く、その頭は再び置栗の苔の如く頂垂れぬ。
 此上は備は村の最も地位ある尊敬せらるゝ人とならむ代に最も富める者にならざる可からず。
 謎の如き此言を國手は訝しみて、それは如何にしてと問ひぬ。父は其顔を屹と視て語るも備には要無きことなり。何事にもあれ此後は父が教ふるまゝに爲よかし。さらば怪我はあるまじきなり。
 傳染病は廿日約續きて、百名以上の死亡を出しけるが、貝塚の先生が受持ちし患者は大概寺へ送られしに渡信之の薬を與へしは續に三名の死亡にて他は悉く全快せり。
 之を見しより、村人は新しき醫者に信用を置初めて、或者は神の如く尊敬しつ。貝塚先生の甚だ恃むべからざるを私に言はぬ者無きに至りけり。
 此より後六右衛門は信之に向ひて何等の妨害をも加へず、何等の抵抗をも試みず、宛然敗將の兵を談せざる趣なるを、村人は流石の



六右衛門も此度は釜を脱ぎたりと噂し合へり。獨信之は此大頓挫をば渠の全敗の力盡きたるものとは油断せざりしなり。
 昨日までは尊大に驕暴に揚々得々として岩崎村を我物顔に往來したりし國手も、今は頭を低れ、肩を容めて、足早に道を行きぬ。而も渠は多く外出もせずなりて、速に温厚しき息子のやうに閉籠りて殊勝に暮しけり。

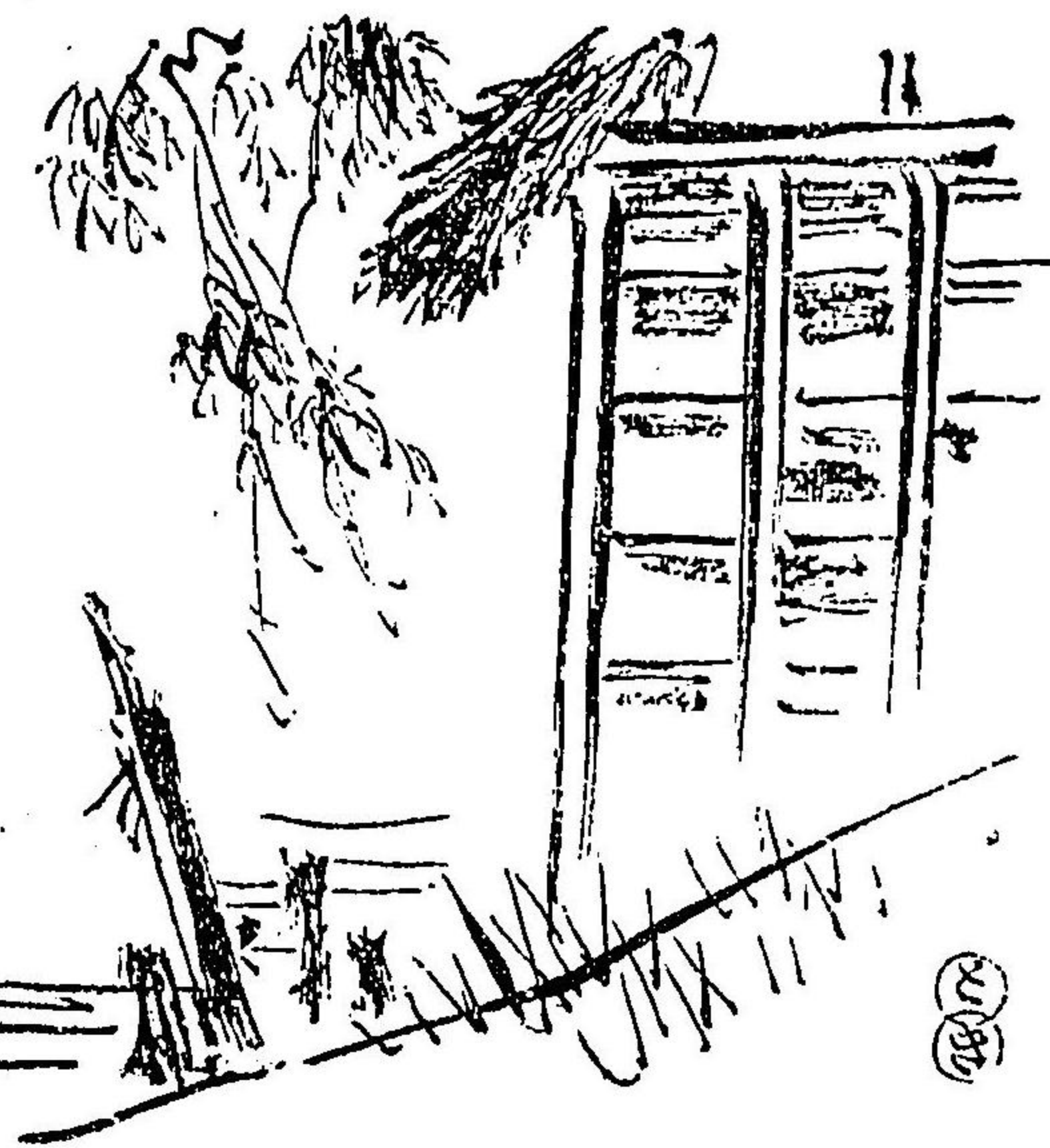
二十 私是最早已哉なれば

最後に虎列拉病に罹りたるは、貝塚家に仕へて、笛吹川の渡船を守れる源三郎なり。慇懃と聞くより國手は慌忙しく其破屋を訪れたり。渠は例の覺束無き診察一遍の後、後はや已哉なり、失期なり、と事も無げに言放ち、式ばかりに一瓶の薬を留めて出されり。迹には其死を悲む女の號泣のいと哀にぞ小屋の外には洩れたりける。
 國手は家に還りて父に言ふやうは、渡場の源三は今宵死ぬべし。遅くも必ず明日の朝は死ぬるか、と稍驚きし六右衛門は、氣の毒なる事なり、と唯一言吊ひしのみにて、次の間なる妻に向ひ、お辰よ、平兵衛の許へ人を遣りて、直様渡場を管るやうに吩咐

けよ。源三郎は死なむとなり。
 源三郎は果して遅くとも明日の朝は死ぬべきか。渠はそや我後を嗣ぐべきもの定まりて人には其死を急がるゝとも知らず惜き命の今はと悲しく枕に縋りて苦みけり。

國手の出行きし後に信之は病家を見舞はむとて此渡場に來りけるに舟はあれども箭師の影無し。家にや在らむと小屋に立寄れば人の呻く聲歎歎く聲の打交りて内に聞えたり。

信之は衝入りて見るに黯澹たる一室の隅に病人の横はれる傍に十八九約の女郎の前後も知らず泣俯したり。信之は物をも言はず病床に進み行きて我に診せよと言ひぬ。病人は忽爾眼を開き見識れる醫者の面を見



て私は最早已哉なればと頭を掉りぬ。誰か然る事は言ひしと問はれて貝塚の先生が、女郎は急來る涙の際より。

信之は打笑ひてかの先生が如何で然る事を知るべき。左も右も一回我に診せよとやうく賺して診察を了りし後我藥を飲まば死なで己むべし。如何に我藥を飲まずやと言へば女郎は夢かどばかり驚ける躰にてそれは信か。源三郎の命助かるゝとならば如何なる御藥にても飲ますべし。はやく賜へかしと迫りぬ。信之は袍を開きて立に一瓶の藥を調合してまづ其一回分を服せしめむとしたり。女郎は嬉しげに勧むる茶椀を病人は固く拒みて我はこの藥は飲まじ。信之は呆れて何ゆゑぞと問へり。

渠は息も苦しげに先生の御藥を戴きたりと知られなば我は此渡場を逐はれ擧句は村にも住難かるべし。さては生きたりとも効無き身なれば唯此儘に死なむとて泣きぬ。信之は少時打案じて其心配は無用にすべし。誰ありて我の此に來れるを知るもの無く又爾を療治したるを知るものあらざれば我も此藥を與ふる事は他言すまじければ兩箇も必らず口を嚙みて貝塚の先生の藥を飲みし躰にて濟すべし。

餘り情ある語に病人は胸迫りて物も得言はず臥したるまゝに手を合せて信之を拜みたり。女郎は涙を流して幾度か恩人の傍に額突く。信之は懇に看護の方法を説示し忍びて明日の夜も來むと契りて此門を出でにけり。

二十一 命に別條あらぬやうなり

折しも彼方より平兵衛は急來りて、久しう待ちたまひしかど會釋しつゝ舟に飛乗り、やをら雁木に漕寄せたり。今少しく前に來りしが今日は例の船頭は如何にせしと信之は然あらぬ體にて訊ねたり。渠は虎列拉に罹りて明日までは命も有らずとなりと何も知らぬ平兵衛は答へぬ。此渡守の源三郎といふは在昔より此村に住める水呑百姓の次男なり。幼き頃父母を喪ひて艱難辛苦の中に人と爲りけるが性質善良にて筋骨の逞きものなればとて廿歳の頃より貝塚家に役はれ久しく此川端の一つ家に渡を守りて暮すなりけり。

渠の枕頭に泣俯したりし女郎は、去年の秋より深くも渠を思合ひて祝言の盃爲しは未だ昨日今日なる花嫁なれば渠は戀媚の爲に寢食を忘れて看護の勞を執りけるに死ぬべしと云はれし翌朝も病人に變る事無かりければ兩箇は神にも倍して信之を有難きものに思合へり。六右衛門は尋常の百姓の如く朝々日出に先ちて起出づるを常とせるなり。今朝も疾く起きて裏口より草深き徑傳ひに川の方へ出行きしは昨夜掛けし置釣の獲物を揚げむとてなり。柳の茂に微暗き汀に下立ちて渠は二三の釣を揚げしに小魚の一尾も懸らざりしが腹を逐ひて十本許の釣を引揚げて始めて五尾の鰯鯛を得つ。愆くて家に歸らむとせしが源三は如何に爲けむと思ひて渡場の方へ歩寄りけるに忽ち小屋の内より顯れたるは嫁のお朝なり。



お朝と六右衛門は呼びぬ。女は柳の陰より馳出て出でたる六右衛門を見るより、狼狽へたる風情にて、倉皇腰を屈めたり。
 氣の毒な源三は竟に歿くなりしかと、六右衛門は故に眉を蹙めて、愁傷の色を作せり。お朝は稍當惑せる面色にて、お蔭様にて命に別條はあらぬやうなり。
 六右衛門は眼を噉りて、命に別條は無きか。今朝も無事なるか、と大方ならず呆れたり。
 先生の御藥を戴きてより、漸く苦痛も薄ぎて、今朝は優れて快きやうなり、と嬉々感荷を秤ふれば、彌驚きて、死なざりしか、死なざりしか、と吐きつゝ、六右衛門は歸行きぬ。
 此日の午後、に抵りて、此異しき物語——一度は必ず死なむとまで云はれし源三が命を拾ひし事、その治療せしは、百人の患者を殺せし貝塚の先生なる事、村中に播りて、人々は不思議の思を爲せり。國手は慙くと聞くより、嚮に失ひし名譽の大半を恢復したるやうに喜びぬ。
 信之は固く口を閉ぢて、鉄助にだに此功を語らず、源三夫婦は其虚妄にあらざる由

を吹聴したりければ、此回生起死の神術は竟に全く國手の物になりけるとぞ。

二十二 我は百圓の禮を受けたらむより

それより數日の後なりける、信之は内海が告平の宴に招かれて、夜を更したる歸途、川原の風に醉顔を吹かせつゝ、蹣跚として一路の柳の陰を辿りけるに、突然前路に黒き影の並びて、雙々顯れたり。

信之は不意に愕かされて、歩を住むれば、渠等はするくくと近く寄來りて、先生と呼びぬ。信之は漸く醉眼を定めて視れば、源三夫婦の連立ちたるなり。幽靈かと思ひしぞ、と信之は笑ひぬ。源三は幾回頭を叩げて、先生のなかりしならば、あはれ今頃は幽靈ともなるべかりし身の、慙く舊の體になりて、一昨日より變らず舟漕くまでになりける再生の御恩のほどは、夫婦が身を終るまで心に銘じて、片時も忘るまじきなり、と眼を擧りて感泣せり。

お朝は代りて言ひぬ。然れども今は世間晴れて、其御恩をば報ひ難きを如何にせむ。少時の間ぞ、想したまへかし、と苦に詫入りたり。



何をか言出づると想ひしに、其事なるか。思の報のとは事
も可笑や。醫者たるもの、人の命を救ふは醫へば、爾が舟
を漕ぎて往來の助を爲すが如し。船頭なれば舟を漕ぐ、醫
者なれば病を治す、是皆其身の務ならずや。夫婦が志はそ
や通きたり。憊る間も人に見尤められなば、身の大事なら
む。疾く行かずや、と信之は手もて追ひぬ。
夫婦は尙も物言ひたげに付めり。信之は行かむとしつゝ、
顧みて憊る夜更に何處へ行きしや。
其後染々御禮も得申さず、壺は人目に隔てられ、夜とは思
へども遅くは御迷惑なるべしとて、うかく今日となり
けるに、今宵は内海様へ御出と聞き、先の程より御歸を待
受けたりしに、憊く御目に懸りたる嬉しさ。一方ならぬ御
世話を受けながら、今迄無沙汰に棄措くとは、恩を知らざ
る畜生よ、と思召さむことの心苦かりしに、と源三が言へ

ば平生の胸も晴れて月の冴けき想する今宵かなと、お朝の愛らしき顔は輝くやう
に見えたり。
信之は連に打頷き嬉しき兩箇の志哉。我は百圓の禮を受けたらむより、満足したり、
満足したりと言捨て、踏々跟々と家路を辿りつ。
此より後岩崎村の鐘の聲は非と悲しき響をなさんりき。燒塙の岡に煙絶えて天朗
に氣清く、葡萄園の収穫は例ならず饒に、天は此樂を以て彼悲を慰めむとするかと、
想ふばかりなりけり。
一日貝塚家に近く住める人々は皆驚かされぬ。平生は寂寞として空家の如き居宅
の、今日は夙より障子を拂ふ音庭掃く人聲、奴僕の出入忙しく、犬の吠ゆるまでも慌
忙しげに午後、抵れば曾て開きし例無き正門さへ明放されたるを、何故ならむ、何
故ならむと言傳へ、聞傳へて忽ち村中の噂となりぬ。

二十三 その喪美として一升沽はずや

事の餘に唐突なれば、得もや先生の縁談にもあらざらむ、と一人が言へば、必らず然

にもあらずとは言ひ難し。今朝繁吉の語るを聞きしに先生は朝より湯に入り顔を剃り髪々に着飾りて欣欣然としてゐたるなど有繋に凡事とは見えざりしとなり、と他の一人は言へり。

左やあらむ、右やあらむ、と下馬評區々に村の社者の寄會へる前を折しも過行くは、お爲といふ貝塚の老婢なり。

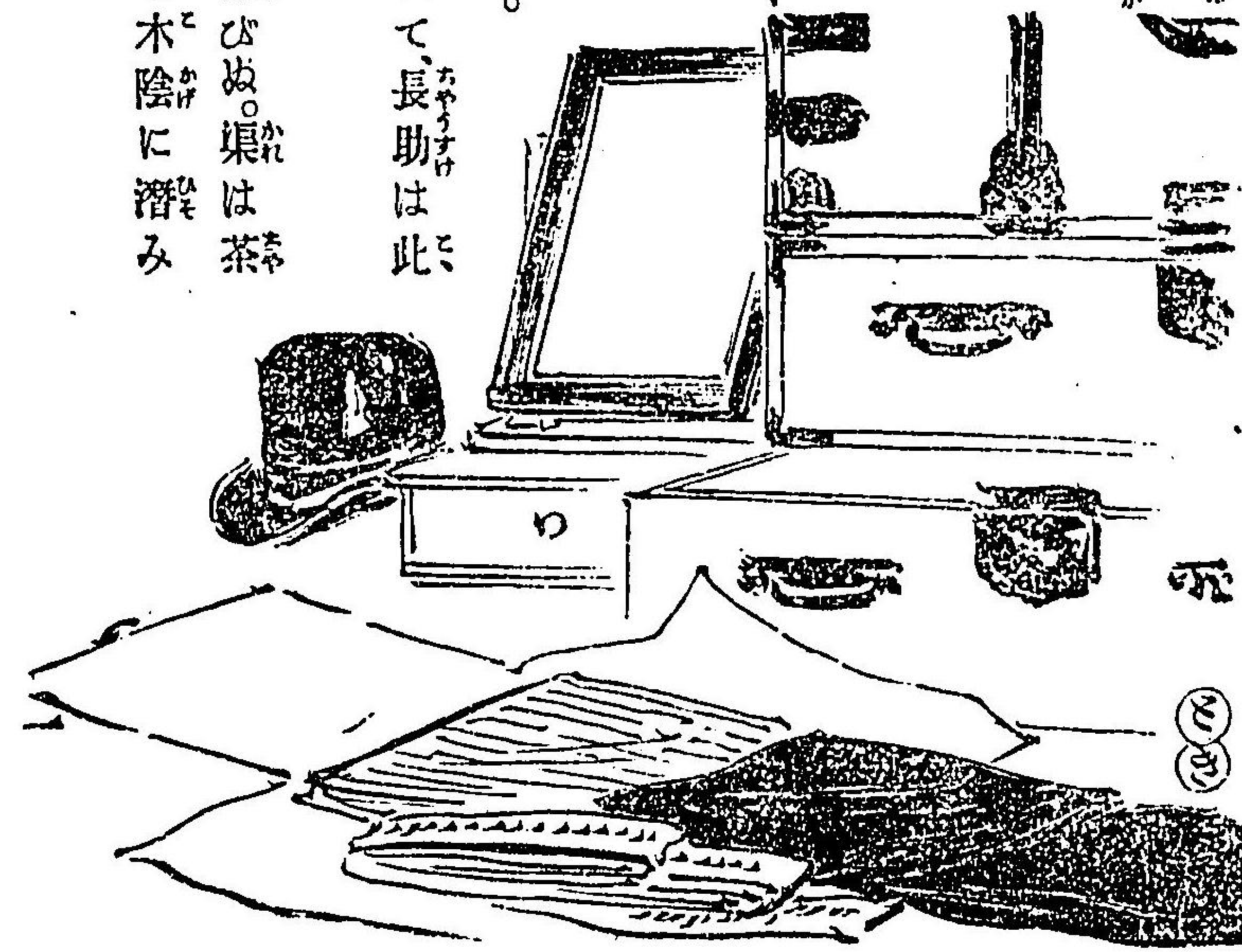
彼に聞けと言ふや否や、一箇の男走出で、呼留めたり。如何なる事か聞かせよと迫りけるに、お爲も深き事は知らずして、今宵御容様のありとは疑無けれど、うは如何様の人なるか、更に知らず。我身一人の知らざるのみならず、旦那様と御新造様と若旦那様との外に、絶えて知れるものはあらざるなり。唯若旦那様の毎に無く装し給へれば、御目出度き事などあるにはあらずやと想はるゝなりとて、慌忙しく去りぬ。

遂に秘密は解けずして午後四時になりぬ。さるほどに三輛の腕車は鞆々を轟きて、貝塚の門を出でたり。六右衛門夫婦は見違ふばかりに服を更めて、仙臺平の袴の襲高く、儼然と駕りたる國手を先に立て、胡桃の大樹の立てる四通を右に折れて、栗原街道へ向ひたり。

茶店の定兵衛は來會せたる貝塚の小作人の長助を捉へて、問訊しけるに、渠は已も訝しげに、知らず知らずと應ふるのみにて、定兵衛と與に車の後影を良久し見送りたりしが、されど一升の酒を沽はむとならば、我は今夜の内か遅くとも明日の朝までにはこの何事なるかを探り來らむ。如何に其美として一升沽はずやと唆かせば、定兵衛は先一思索して、如何にも沽はむと言ひぬ。

左にも右にも今夜の十時に再會すべしとて、長助は此を去れり。

其夜の八時過ぐる頃、渠は貝塚の裏門へ忍びぬ。渠は茶店を出でしより、此時迄栗原街道に沿へる木陰に潜みて、六右衛門一行の歸來るを待ちしなり。



道は其心に何處よりか伴來る人のあるべきを思ひければなり。然るに待てどもま
てども車の音は聞えず。日はいつか暮果て、田圃は暗く、此秘密をば蔽はひやうに
霧さへ深く立置めたるに、渠も心寂しくなりければ、一先引返して留守の様子を探
らばやと、此には忍來れるなりけり。

渠は密に高扉を攀ち、難無く庭に下立ちて、水間隠に眼を配れば、臺所には膳洗ふ
音して、座敷の方は物靜に燈火の影も微なり。一步を進め、二歩を進めて、奥深く入る
ほどに、隈笹生茂りて、一株の黒松のおかしく、紆りたる築山の後にいでたり。

内の様子を探ふには、此ぞ屈竟の塙と長助は石燈籠の陰に蹲りて、群來る蚊蚊を拂
ひつゝ、約三十分も待ちたりけり。

二十四 その美しき女兒は何者ならむ

旋て遙に車の響は輕雷の如く聞えて、次第に近きつゝ、遂に門内に入りて止れり。之
と與に玄關に出迎ふる人音して、手燭の光は俄に闇を照せり。のさくゝと眞先に入
來るは美々しう飾りたる國手なり。續きて六右衛門夫婦の後に人の姿を認めたる。

長助は、酒一升此なンめり、と瞳を凝して遙に窺へば、手燭の光は折好くも其姿の
半面を照せるに、極めて美しき極めて愛らしき女郎なり。渠は驚きつゝ、猶眼を定め
むとせしに、忽ち風有りて燈の影の動く刹那一行は見透されぬ座敷の内に入りぬ。
姑くして六右衛門の鋭き聲は、六之助六之助と呼びて、お禮を奥の八疊へ案内せよ、
と聞えし程も無く、婢の持てる手燭の光再び耀けば、六之助の後に添ひて様に出で
たる女郎の姿は、隈無く長助の眼に入りたり。

二三分の後は又舊の闇黒になりて、庭の池水に星影の五六點梢に風散ぎて、夜は靜
に更けぬ。

美しき女郎かな。六右衛門は何處より悉く美しき東西は手に入れけむ。いつもと
我等の思案に餘るは、彼老禿の仕事なりなと思ひつゝ、此庭を抜出して直に茶店
の主を訪へり。

一升の酒より作られし此物語は、逸早く村人の誰彼に傳へられぬ。此夜六右衛門が
栗原の邊より竊に美しき女郎を伴れし事、其名はお禮といふ事は、いつか公然の秘
密になりて、今は知らぬものもあらずなりけり。

此時より貝塚家の風習に勘からざる變化をば生じたり。お辰は非と盤襪を纏はずなりぬ。六右衛門は釣竿を擔げて川邊に出づることを罷めぬ。之よりも猶甚しきは、此容の來りてより茶間にていと貧しげに食事するを寝めて、八疊の中間に四人の膳を排べ、食器も一式新調に替へ、朝夕の物も味を撰みて偏に渠の意を迎へむと勵むるが如し、と例の老婢は人に語りき。

其客其美しき女郎は何者ならむ。かの鄙吝なき老禿が然ばかりの待遇を爲すは、あはれ如何なる徳を備へたる女郎ならむ。預りものか、嫁御察か其にも此にもあらぬやうなり、と老婢は言へりしとぞ。

然らば其女郎を家内の者は何と呼ぶにや、と人の訊ねけるに、旦那様は呼捨にしたまへども、他のものは様付にするなりと。

物好ならぬ村人も此秘密をば探らむもの、と私に心を着けたりしが、其後國手は殆ど醫者を罷めたる跡にて、表立ちては門外に出づること無く、但折々は定兵衛の店に訪れぬ。渠は其度客の事を問ひけれども、國手は毎も辭を濁して、要領を得せしめざりき。

此上は貝塚の家に立入りて様子を見るにあらざれば其秘密の一端をだに窺ふ能はざらむ。左右は女房して探らせばや、と定兵衛は念立ちぬ。

二十五 手を住めて聲する方を胸せり

渠の女房は親しく六右衛門の奥に出入して、人手の足らぬ折々は、奴婢に等しく役はるゝ身なれば、多少の消息は知得べしと、遂に行きて裏口より訪れつ。常の如く戸を啓けむとすれば、固く鎖したり。實に先此より怪しやと思ひつゝ、渠は聲を揚げて案内せり。やがて重氣なる足音響きて、内より戸を啓けたるはお辰なり。

お勝殿か。何用ありて、と言ふ。平生に似合はぬ魚膠無さに、渠は少しく慌てたりしが、張板の御不用ならば、拜借を願はむとて、と言脱くれば、御身の家にも在りと聞きしに、と詰められて、損じたればと、やうく辻褃を合せけるに、生憎今日は用ひたれば、又重ねてと言ふより早く閉然と戸を鎖したり。閉出されたるお勝は眼を圓くして還りけり。

やがて慙くと聞傳へたる村人は、此秘密も例の六右衛門的計畫のあるなるべしと

呷合ひて、愈油斷無く注目したりけり。
 渡信之は流行病以來遠近に信用を得て、遽に一方ならず忙しき身になりぬ。ある曉の寤覺に、此頃取紛れて久う見ざりし山の容水の姿や如何に面變りけむ、と坐に懐しく、東雲の未だ明けやらぬ空に朝戸出を思立ちて、獨おもしるく路邊の露を踏行けば、鶏犬の聲微に全村は半夜半曉の間に寝られたるに、一帯の笛吹川のみぞ目覺しう流れたる。

何處へと志すにもあらで飄然と歩みつゝ、茶店の角を左に折れて、だら／＼坂を下行けば、眼前に披れるは一面の葡萄園なり。爽なる大氣は水の如く薄着の肌を襲ひて、自から身も輕かに來るとなく川の堤に出でつ。願れば東の空はやう／＼紅く、村の彼方此方に煙のほの／＼と興るを見たり。



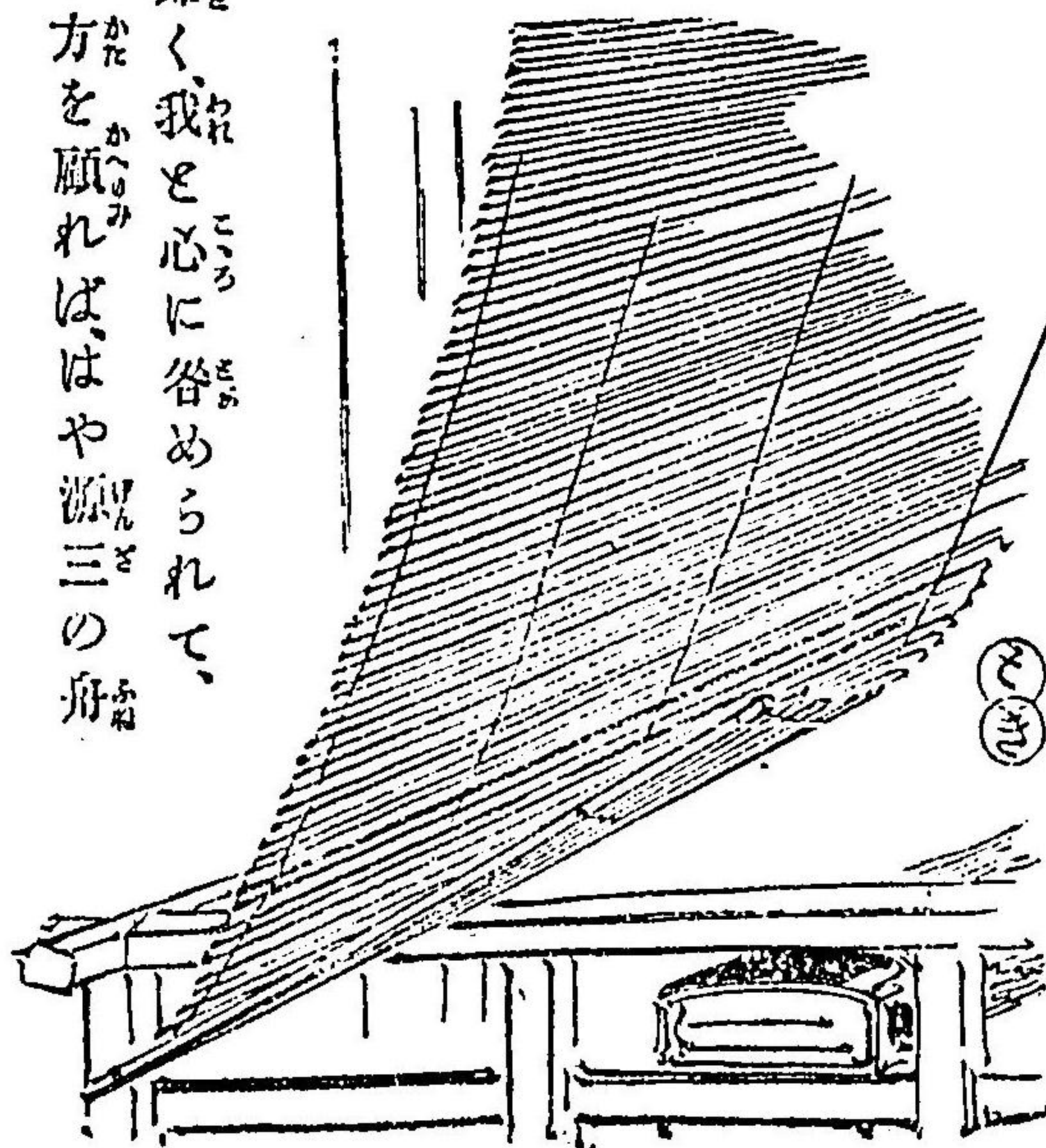
玲瓏たる天と澄徹せる水とに介まれたる自然界の萬象一として清絶ならざるは無く、之れを視たる渠の眼と、之を感じたる渠の心は、坐寒きまで淨められて、茫然と佇みたり。足下に咲ける河原撫子の露を帯びたるが、微に照來る日の影に愈美しきに偶然目留りて、進行くまゝに花は繁く、色は濃に、麗なを敷きたるかと思ゆるまでなり。信之は浮世を忘れ、醫者たるを忘れ、唯見心になりて、其花を摘始めたり。やがて一束にもなりけるを、猶飽かた彼方此方に色好きを宛めつゝ、餘念もあらざりしに、流の音に慣れたる耳は不圖異しく妙なる物の音に驚かされぬ。渠は手を住めて、聲する方を向せり。聞ゆるはいとおもしろき琴の音なり。

消き天の下澄める水の邊麗しき花の中に立ちて、此幽しくも艶なる者の音を聞きたる信之は、實に其魂や雲に入るかと想はれて、涙も落ちぬべく、尊さに少時は石の如く立盡せり。

爪音は彌妙に響きて、流も聲を遏むるばかりなり。何處よりや此調と見返る眼に入りたるは、黒き高塀を匝せる二階家なり。疑はし疑はし、彼二階より、恠る幽しき音の出づべきや——怨敵たる貝塚六右衛門の居室より。

二十六 渠は手にせる撫子を見遣りぬ
 我を忘れて聲する方に近ければ、其絃の調よりは、いと幽しき唱歌の聲も聞ゆるに
 ど、信之は恍惚として耳を傾けたる。
 其處に何と爲て在する、と不意に聲ありて叫びぬ。信之は驚きて見返れば、蘆の茂よ
 り衝と顯れたる男あり。源三なりしか、と渠は始めて心を安むじたり。
 琴の音のおもしろさに、と言ふを聞きて、先生は彼琴の音の主を知りたまふか、と源
 三は打笑みぬ。知らず、何者ならむ。六右衛門の家に琴弾くものやありけると訝れば、
 其者を御覽じたき御意はあらざるか、と渠は再び微笑みつ。見たきものなり、と信之
 も同じく微笑めば、さらば御案内申さむ。此舟に召したまへとて葦間に伴ひぬ。
 信之はまづ舟に移りて、それは何者ぞ、と訊ぬれば、美しき女郎なり。實に塵塚に鶴の
 下りたりとも謂ふべく、此村などには過物なり、と源三は誇顔に説きぬ。然ばかり美
 しき女郎のかねてより六右衛門の家に在りつるか。更に聞かざりしが、と信之は幾
 度小首を傾けたり。

源三は物談を止めて頻に舟を行りつ。葦間を分けて岸に沿ひつ、靜に一町ばかり
 も溯れば、二三株の柳の古りたるが、おぼろしく茂りて流に臨める邊に着きぬ。
 這是六右衛門が釣舟を繋ぐ所なり。
 此に信之を上陸せしめて、さて源三は言
 ひぬ。此路を眞直に行きて彼所に見ゆる
 葡萄園を横截りたまへば、南北の徑あり。
 それを南に行きたまへば、かの琴の主の
 住める二階の窓下に出でたまはむ。その
 窓こそ美しき顔を見るべき使の所なれ。
 信之は頷きつ、渠に別れて、誨へられし
 道を辿りけるが、不正の事なを企つるが如く、我と心に咎められて、
 これより返さむと念ふ心も出で、川岸の方を願れば、はや源三の舟
 は見えざりけり。
 渠は行惱めるやうの風情にて、なほ歩行を續けたりしが、竟に葡萄園の中に進み、竟

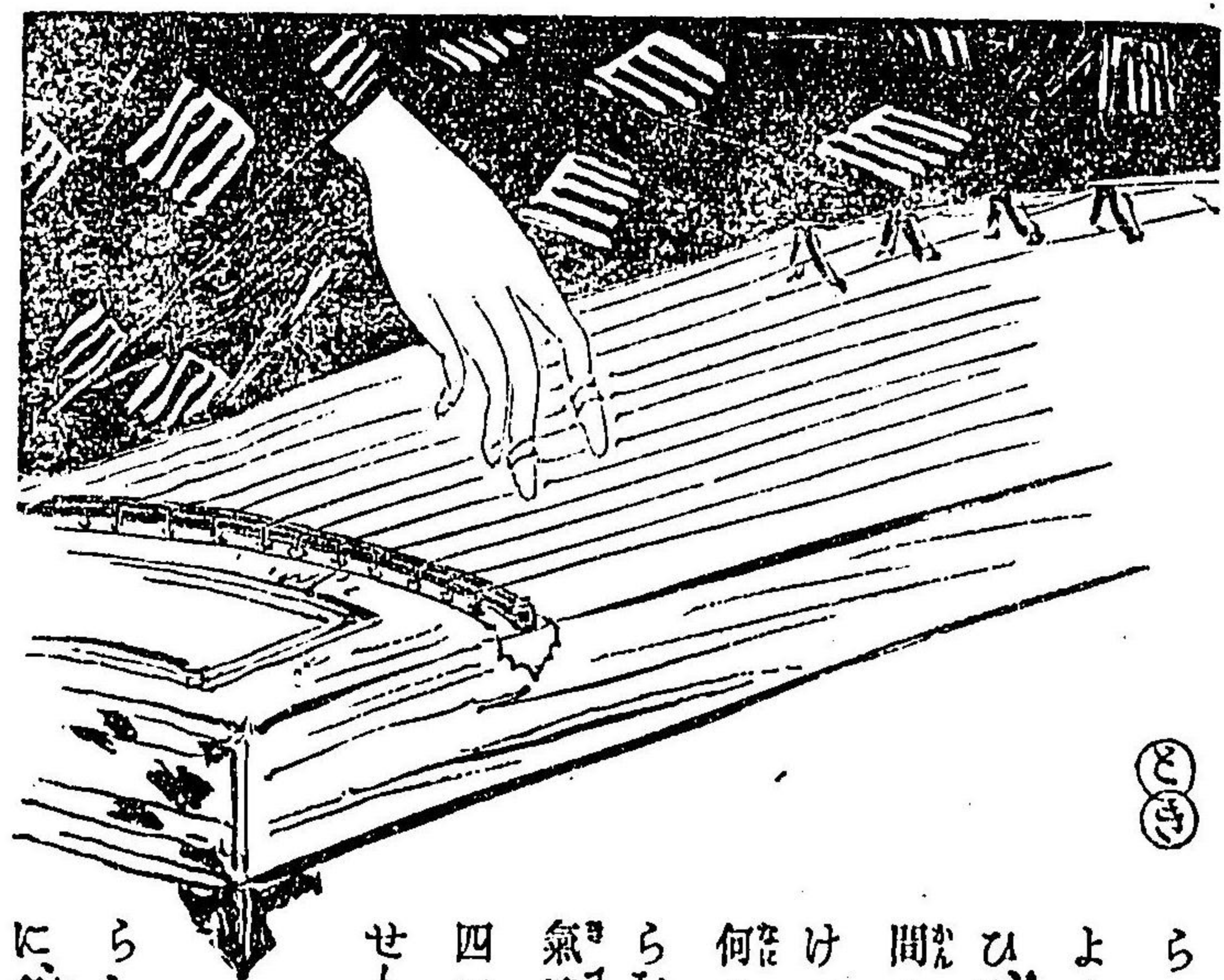


に徑に出で、竟に南に行けば低き岡あり。渠は何氣無く其上りぬ。幽しき音の出づる二階は目と鼻の間に薄りて、爪音はなほも少時聞えたりしが、はたと歌みける程も無く、實に其窓より美しき女郎は半身を顯せり。今ぞ沖る朝日は灼々と玉の如き面を照せしかば、渠は忽ち纖柔なる手を額に翳して、慌忙しく窓を閉ぢたり。信之は自失して佇みぬ。渠は日影を帯びたる美しき顔を忘るゝ能はざりしなり。渠は手にせる撫子を見遣りぬ。此花の河原に露を帯びたるに日の光の映ひたりしを、二無く麗しきものに愛でしかと、及ばず及ぶ所にあらずと、眩きて摘みへたる一束の花を、今は惜氣も無く、葦間へ投棄てたり。

二十七 戀とは一種の熱病なり

渠は戀々として此を去るに忍びず、心陰に望を繋けて待つこと良久なりしかと、遂に其障子は開かずして、唯見れば裏門より出来る人影は六右衛門なり。信之は始めて夢の覺めたる心地して急遽岡を下りぬ。家に歸りて後は心飄揚と身に添はず、唯其にのみ氣を奪はれて、渠は萬事を忘れむ

としたり。噫此躍る心燃ゆる熱は、嘗て同僚の娘を戀ひし時と些も異らざるものにあらずや。渠は悉く思ひて、れの戀に陥りたるを曉りぬ。戀とは一種の熱病に過ぎざるなり。我は實に之が爲に名譽を捨て、人生を厭ひ、擧句は身の措所にさへ窮したりしにあらずや。然るを今又好みて、苦惱の淵に陥らむとするか。決して陥るべからず、忘れても陥るべからずと、渠は雄雄しくも愛着の念を断たむとしたり。渠は此戀を棄てむと思へども、其美しき幻影を忘るゝ能はざりけり。一日一日と渠は心苦くなりぬ。彼女郎の貝塚の家に住める事、我は再び其人を見る能はざるかといふ事、我は如何なれば、悉く果敢なき戀をのみするかといふ事など、を思續けて、幾と胸も裂けむとすばかり悶へたり。渠は餘に此事に屈托して、今は務も餘所になりけると心着きつ。我は悉くであるべき身にあらず、男子は此の如く薄志なるべからず、我は戀をせむとて生れたるにあ



(と)

らす我には我たる務ありと漸く志を奮ひて
 よりは朝の散歩をも廢して暇あれば机に向
 ひ専ら醫學の研究に心を寄せたりしが一週
 間の後お町は不料も蒼白たる主の顔を見着
 けて驚きぬ。
 何とかが爲給へる御心の健れたまはぬにやあ
 らむ。知らぬ間に太く面瘦のしたまへるはど
 氣遣しげに訊ねたり。
 四五日腦の少く惱ましければと渠は纔に洩
 せり。御勉強の過ぎたまふゆゑならむ。當分御
 學問は節減にして御氣を暢めたまへな
 と懇に諫めたり。信之は唯頷きて渠を去
 らしめし後我は此果敢なき戀を棄てむが爲
 に色蒼く面瘦のせるまで心を悩ませるか。言

効も無き根性かな。我は自ら如此く心の狭き男とは思はざりしを、好好見事今より
 腸を洗ひて腹せず蒼ます平然として此戀を棄てむと誓ひぬ。
 やがて二週間の後お町は彌驚きて必ず病のあるべき由を語りぬ。實に信之はいと
 としく驚れたるなりいとしく蒼白たるなり。

二十八 中には三通の書ありて

今より約八年前の事なりける栗原驛に名たる酒造家春日太兵衛俄に病を獲て、
 不歸旅に趣きけるが迹には唯獨九歳になれる女兒のみぞ遺されし。
 その一七日の夜遠き縁者平生交りし人々集りて遺言状を開封せり。中には三通の
 書ありて、一は縁者に宛てたるもの、一は別懸なる貝塚六右衛門に宛てたるもの、一
 は我所有の財産表なり。
 縁者に宛てたる文面は我亡後は娘禮が成人の曉までは六右衛門を後見に頼みて、
 其教育婚姻家督の世話まで萬端集に任せたま旨を認めたり。之に因りて六右衛門
 は直に其席に招かれて亡人の委託を傳へられしなり。渠は快く承諾して、おのれに

宛てたる一通を披きしに、その事をば詳々も書
 聯ねたるのみにて、他に異りたる事はあらざり
 き。財産表を披けば、銀行券百枚、公債證書五百枚、
 五町の田地、十五軒の貸家、土藏五棟、附の家屋清
 酒醸造所、貸附金の證書三十枚。是皆お禮の身と
 與に、可恐き六右衛門が後見の權内に屬するも
 のなりけり。
 渠は心中喜ぶこと限無かりしかど、色にも見せ
 ず、人にも聞かせず、纒に妻のお辰には打明しつ。
 翌日より其整理に着手して、主無くては營業もならざればとて、醸酒の
 株は他に貸し、貸金は劇しく取立て、半月約が間に全く處置を了りし
 が、お禮の始末に就きては、渠も太く心を悩ましたり。一度は、これの家に
 伴來らむとも思ひしが、さては村人に此事を知らるゝ種ならむと遂に
 甲府なる靜女塾に入れて、其教育を托したり。

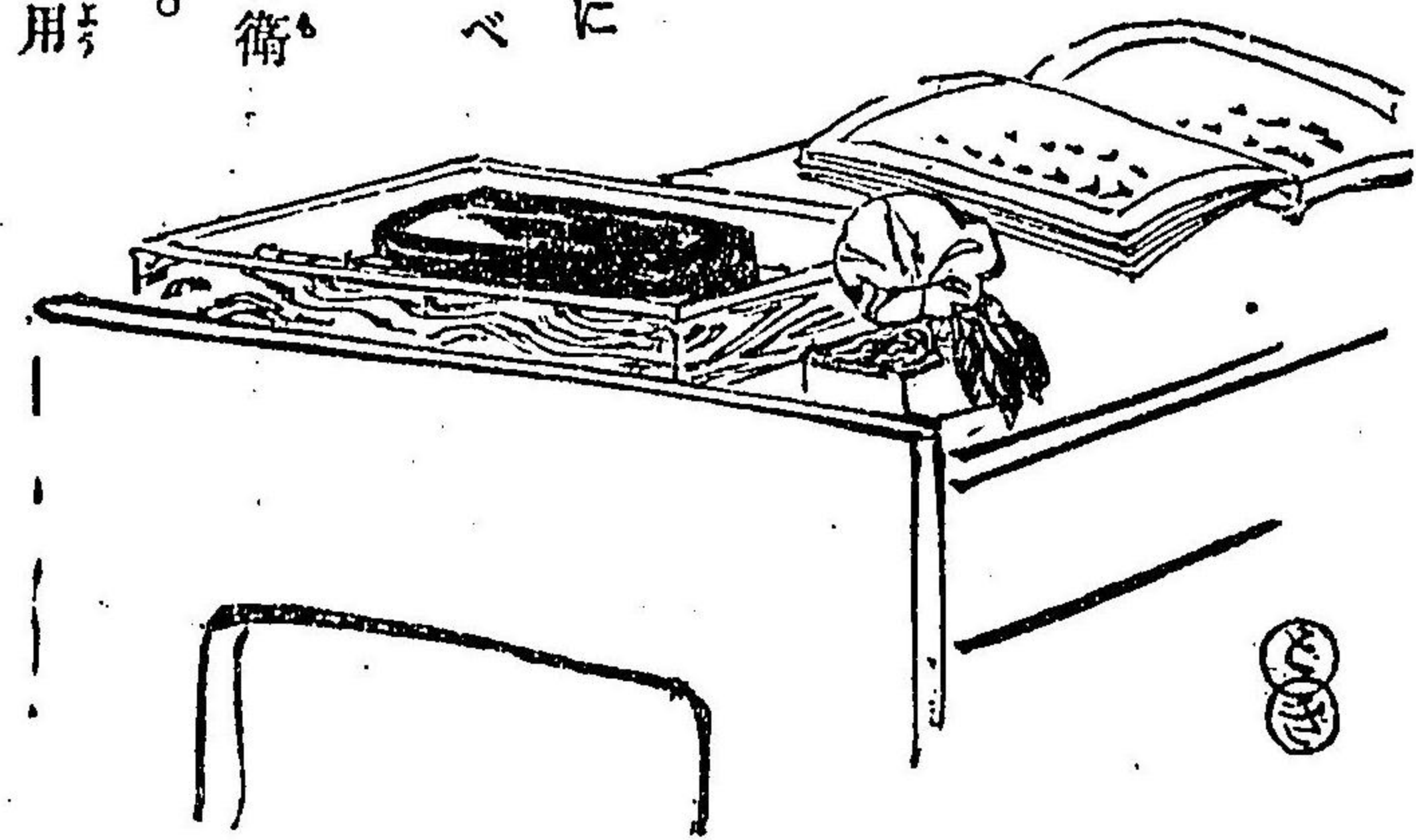


此私塾は保守的特色ある學校にて、校長を大武何子と呼び、徳川家の大奥に勤めた
 りしとて、其躰方は今の人をして驚かしむるばかりなりとぞ。然れば之に對する世
 評も喧しく、或者は文明を阻害するものなりと罵り、或者は國粹の美を保つものな
 りと稱へ、又或者は今少し歐羅巴的自由を加へたらば、完全なる日本文明教育を開
 ふべしなど。
 六右衛門がお禮を此塾に入れたるは、一種の幽閉にせむとの意なり。渠はお禮とい
 ふものを見るに、お禮が家の六之助を思ひしなり。その富裕なる春日家の遺
 産をお禮が物にせむには、お禮を我子に妻せざる可からず。さては一方には、お
 禮をば世間を知らず、無邪氣に、從順に人と爲らしめ、一方には、六之助をして一廉の
 紳士たらしめざるべからずと思ひぬ。
 此時六之助は中學校に在りしなり。然るを程無く放逐せられしかば、六右衛門は愛
 憤して、此上は紳士を罷めて、醫者に爲むと、恚くて六之助は東京に送られて、六年の
 月日を過せし間、お禮は嚴肅なる靜女塾の微暗き窓の下に、浮世の風にも觸れず、男
 の香をも嗅ぐことなくて、いと純潔に生立ちけり。

二十九 渠は彌相好を願せり

愆く六之助は歸來りて自家は學びたりと云へる醫術の業を始めけるに左にも
 右にも村人の尊敬を受くるやうになりければかねての大望成就も近きに在らむ
 と六右衛門は心陰に樂みたりき。然れば國手と競争せむとて此村に來りし醫者は、
 皆六右衛門が爲に窘められて終には逐るゝに至りしも此故なり。渠は我子の他の
 醫者と拮抗すべき力の有らざれば爲に敗を取るに於ては春日家押領の企圖も水
 の泡になりなむと知りて其志を遂げむまでは骨が舍利になるとも此村に二人の
 醫者はあらせじと覺悟したるなり。
 然りながら渠は渡信之にのみは曾て有らざりし大失敗を取りて村人の信用をさ
 へ奪はれたりければ今は一日も早く彼計畫を實施するに若かずと思ひて遂にお
 禮を伴來りしは否應無しに六之助と結婚せしめむが爲なりき。
 七年が間の束縛を解かれたるお禮の歡喜は實に謂ふばかり無くこれより我は如
 何に樂き世に出づるならむと籠鳥の雲を望みて羽繕するが如く勇みたりしに來

て見れば案に相違して一間の内に閉籠めたるまゝ門の外をも窺はしめざるは何
 故ならむ。戶外には朝日の光野山の翠露を帶たる葡
 萄園玉を敷ける笛吹川かもしるき鳥の啼音往來ふ
 渡船など珍らしども珍らしきものゝ眼に餘るを曾
 て些の外出も許したまはぬは何故ぞとお禮は堪へ
 かねて一日六右衛門に問へり。
 渠は答へて云ふやうそれに深き理はあらず唯御身
 の年若ければなり。若き女子の妾に外出するはいと
 切きものなり。まして我家は此村に重せらるゝがゆゑに
 輕々しき事はなり難し。然れどやがて御身の身も定るべ
 ければそれまでの辛抱と思ひたまへ。
 お禮は身の定ると云ふを聞尤めて問反しけるに六右衛
 門は言を濁してやがて詳う語る時あるべしと言ひぬ。
 折から一箇の婢來りてお禮を見るより若旦那様の御用



ありとて頻にお庭を尋ねてゐたまへば、疾く御越あるべしと言ふ。お禮は急ぎて築山を回り、雑裁の下道を行けば、池ありて、橋を渡れば、たもしろく、菖の絡ひて、風情ある茅葺の四阿あり。柱に靠れて佇めるは、今出陣より歸りたる國手なり。香水の氣は五六間此方より芬々として鼻を撲てり。渠はお禮を見ると、俾しく身を翻して四阿の内に入り、切杭の腰掛を拂ひて、此へととと言ひつゝ、流石に色を含みてお禮を見迎へたり。娘は臆せる色無く、衝と入りて其腰掛の側に立ちて、何御用か聞かせたまへ、と魚膠無く言ひぬ。國手は満面に微笑を帯びて、今日は收めて御身に浸々と言ひたき事あれは、そのやうに急かすとも、まづ此に慰ひて、緩々聞きたまはずや、好き話なり、と渠は彌相好を頷せり。

三十 然も事無げに打笑みたり

然れと極めて大事の件なれば、輕々には聞きたまふな。若し此事の成らざらむには、我は存ふべからざる身となりぬべし。

お禮は驚きて六之助の顔を打目成りぬ。渠は然こそ言はぬばかりの氣色にて、御身は我双親の歸身を實の娘の如く最愛むを知りたまふべし。尙御身は我の御身を愛むことは實の妹にも過ぎたりと知りたまはざるか。双親の御身を實の娘に爲むと思へるを知りたまはざる。我は實の男にて、御身を實の娘にぞと徐お禮に寄添ひつゝ、隙を窺ひて其手を握らむとせり。お禮は恰も蛇などを見たる如く、手を引籠めて急遽しく身を退きぬ。六之助は稍憤れる聲音にて、さては御身は我を嫌ひたまふかと詰寄せたり。努々嫌ふにはあらざれと餘に思懸けぬ事なれば、今は左右の考も起らざればなり。實に御身の言はるゝ如く、這は極めて大事なれば、四五日の猶豫は與へたまへかし。其間に篤と分別して御答を申すべしと聞くに、六之助の面はやうく和ぎて、さらば御身は我を嫌ひたまふにはあらざるかと又少しく摺寄りぬ。それも篤と考へたる上ならではと、お禮は此問答を煩く思へるやうなり。渠は再び面腹らして考へたる上にて、好くの嫌ふのといふことあるべきや。必らず孰かは今の胸の中に在るべきなり。それを聞かせたまへと、切に迫られて、好くといふにもあらねば、強ちに嫌ふ

とにもあらず所謂其間の何とも無きなれば考へたる上ならでは御挨拶は難爲きなり。されを憚る事を餘に迫りたまはと、竟には厭忌にもなりなむと言ふ。

六之助は驚きて然らば復とは迫るまじければ四五日の内に必ず好き返事を聞かせたまへ。假初にも男の口より憚る言云ひ出で、若し御身に不肯を言はれなば、我は面目を失ひて、一日も生きてあるべきにあらねば、我を憐れと思ひ、一人を助くと思ひて、必ずくと思ひて、色めく流汗を送りて、再び渠の手を捉へむとせしを、お禮は辛くも免脱けて母屋の方へぞ走行きける。

六之助は直に父の居間に到りて、唯今篤と渠の心底を聴きたるに、我を嫌ふにはあらざる由。想ふに十中七八は我物なるべしと告げたり。さらば祝言の事は承知したるかど父は問ひぬ。我を嫌ふにはあらねど、其事は一身の大事なれば、篤と分別の上ならでは挨拶もなり難ければ、四五日猶豫せよとの事なりと語るに、父は苦笑して、お禮は俯よりも負に賢し。好し然らば此後の事は父と母にて好きに計ふべし。俯の努むべきは不束なる事して賢きお禮に愛相盡されぬやうにせよかし。いつもと千日の葦を双親に刈らせて、一日に炊くは俯の業なり。屹と慎めと窘むれば此

度の事は必ず心を勞したまふべからず。男同士ならば負くることもあらむ。高が敵手は女なるを、と六之助は然も事無げに打笑みたり。

三十一 天へも昇るとや謂はむ

六右衛門夫婦を首として、家内の者は誰も彼も速に若旦那を賞賛し、此村内は未郡中にも並ぶ者無き勝れたる士のやうに噂して、お禮の心を動さむとせり。

世間を知らず男を諷らざる處女の心は果して動かされつ。お禮は始此賞賛を疑ひしなり。然れば意を注ぎて渠が毎日の一言一行を察たりしに、思しき相貌、切き所置風、我歡を買はむとする様子などは、一々疑惑を増すのみなりけり。憚くても此邊に儕罕なる紳士なるかど、いと訝しかりしに、人の噂は一も二も六之助の譽のみなるに、さては我眼の違へるにやあらむと、更に自家を疑ふ心も起りぬ。

世間にては憚るを好男子とは言ふならむ。憚るを才子とは言ふならむ。憚るを紳士とは言ふならむかし。何も我心には染まねども、世間にては持離すなるべし。さては我心の愧れるならむと、渠はやうく自家を捨て、世間といふに惑はされけむ。今



園へ趣けり。

は世間の好男子なる世間の才子なる世間の賢き士なる六之助に向ひて、お禮は稍其感情を變へて、さまでは嫌ふべき人にもあらずと思へるやうになりぬ。

陰ながら此様子を見たるお辰は、一日お禮に叩きて御身は我等の娘にならむ意はあらずや、と猫撫聲して問へりしに、お禮は羞しげに頷きたりき。愆くて六之助も今は全く我物になりけると思へば、はや心を安むじて、彼時約束せし挨拶を聞かむとも爲でいと樂しげに其日を送れり。

未だ外出を許されざりしお禮は再び六右衛門に迫りて、近き邊の景色を見に行かむと願へり。今はと思ひて、渠も納得したりければ、その翌朝お辰に伴はれて、お禮は始て笛吹川に沿ひたる葡萄園へ趣けり。

渠が此時の想は如何なりけむ。實に天へも昇るとや謂はむ戀人に迎へられて獄を出づるとや謂はむ。山の翠も、川の流も、鳥の聲も、木草の枝葉も、焦れ、焦れし物の限身の邊に飛りたる怡悦に幾ど我を忘れて、到る所に佇み、到る所に眺めつゝ、唯足の行くに任せて進みぬ。お辰は小作人と物語りける間に、傍に在ると思ひしお禮の消失せたるに驚きて、園の中を驅廻り、血眼になりて尋ねけるに、渠は何處へも行かず流に臨める石の陰に、餘念無く四面の景色を眺めたるなり。

お辰はやうく見付けては、や還らむと急立つれば、お禮は悲しげに、今姑此處に居きたまへとて、如何に言へども可かず、曳けをも動くまじき氣色なるに、お辰も持餘して、おのれは還らざるべからざる用事を抱へたる身なればとて、曰む無く小作人の一箇を附けて、此葡萄園の外へは一步も出ずまじき由を固く命じて、獨還りぬ。

三十二 黒黒と呼ぶ聲は木間より

お禮は自家の後に人のあるをも打惚れ、唯興に任せて行くほそに、不圖眼前に顯れたるは、見も慣はぬ麗しき一つの蝶なり。渠は之を逐ふとしも無く、逐行きて、いつか

笛 吹 川

葡萄園の裏口に來りぬ。蝶は翻々と外に出でたり。お禮は猶も逐はんとしたりしが、此より一步も出づるなかれど、誠められしを思出して監督の男の如何に見らむと、渠は此時始めて顧みけるに、在るべしと思ひし人の形も影もあらざるは、何れや行きけむと退歩して隈無く四邊を覗しけれと、目の及ぶ所には在らざりけり。渠は之に心を寛して、窺に園の外に出でぬ。一條の徑は草の中に隠顯して遠く耳れり。二十間許の彼方に最大なる朴の樹あり。渠はその下蔭までと進んきて、梢の蟬の閉に鳴くを聴き、澄しつゝ、睡れる如く幹に掛れたり。何處よりや來りけむ、黒き洞毛の犬の凄しく大なるが、矢庭に藪間より躍出で、お禮を目掛けて一散に飛來りぬ。渠は驚きて起上れば、犬は尾を掉りて懐しげに摺寄りたり。然れども恐しさに、お禮は手を抗げて叱叱と逐はむとせり。折から黒黒と呼ぶ聲の程近き木間より聞えければ、犬は忽ち頭を回して聲する方を目成りたり。お禮も同じく其方を見遣りけるに、やがて徐々と顯れたる一箇の男あり。お禮は半は珍しく、半は驚きて凝然と其姿を眺たるに、霜降ふらねるの單衣に藍鼠の紋縮緬の兵見帯して、一條の織杖を携へ、笠帽を頂きたり。身材高く肩背せて面の

笛 吹 川

色の白きに帽の庇の下より金縁の眼鏡の見えたるなど飽かず見好げなる哉と、お禮は先其一目の姿に心を動かされつ。男は間近に進來りて、帽子を脱りて軽く會釋し、想したまへ。此犬の嘸や御身を駭かせしなるへし。然れど這は決して恐れ給ふべきものにあらず。極めて温順ければ、と脚下に戯るゝ犬の頭を拵きぬ。お禮は困じたる風情にて俯けり。其人を見るだに眩げなるを、今又慙く物言ひかけられて、心の鼓動



に堪へざるなりけり。渠は此に在るべき心地もせざれど、言を返さず去るべきにあらず。ば、やうく覺束無げに答へたり。そのやうに仰せられな。道に一時は驚きしが、今は、と言ひつゝ、木蔭を出で、徐に此場を遁れむとせしを、男は思入りたる躰にて急遽しく呼止めたり。お禮は已む無く足を住めて羞しげに



男の方を見遣りぬ。其面は桃の花の日影に酔ひて、匂滴るゝばかりなる色に染みたり。

三十三 御身を念るゝ能はざるなり

快く願たるに禮の顔をば最嬉しげに見遣りて、御馴染もあらぬ方に甚だ不躰ながら一言申したき事あるを聞かせ給はむやと男は進寄りて、礼の肩に軽く手を懸けたり。
怨せらるゝを厭へる氣色も無く、礼は仇無き眼して見識ぬ紳士の面を懐しげに打目成れり。
怨る不躰なる行爲をするさへあるに、猶又怨る事を打明けむは狂氣の沙汰とも思ひたまふべし。然れど我の御身を見るは今日を初發にはあらず。我は久しき前より御身に、男は面を蔽めたり。礼は之をも厭へる氣色は無く、同じく面を蔽めつゝ佇みぬ。
我の始て御身を見しは、此月の初旬なりけり。朝登く此堤を散歩したりしに、偶然も

妙なる琴の音を聞きたりき。御身は其を覺えたまふならむ。我は其音に牽かれて、御身の住へる二階の下に立寄りけるに、御身は窓を開きて外方を眺めたまへり。しことありき。其の時始めて御身の姿を見てしより、我は日夜毎に御身の係を念るゝ能はざるなり。
有禁に禮も此端的の言に驚きて、其仇無き眼の中に稍怖れたる色を顯せり。男は彌語を和げて渠の心の騒擾を鎮めむとす。怪しからぬ事を言ふ奴と然ぞや驚きも怖れもしたまはむ。然れど我は御身の迷惑したまはむ事を爲るものならねば、あはれ冀くは今姑思ふ事を言はせた

まへ。恁麼聞かせたまはむや、と優しう問へば、お禮は縁に領きたり。
 如何に我は今一度御身を見むものと願ひしと思ひ給ふや。如何に我は此心を御身
 に通せむものと苦みしと思ひ給ふぞ。然れど如何にせむ。御身は我怨敵たる貝塚六
 右衛門の許に住みたまふなり。御身は我憎と繋がる縁のありとやらなり。さては幾
 度か此戀を諦めむとせしかども、我は到底御身を捨るゝ能はざるなり。
 我は渡信之とて、此村に近頃來りける醫者なり。貝塚の先生とは敵味方なる同業者
 なり。然れば如何に御身を慕ふとも、我思は到底愜ふべきにあらざれど、我は終に御
 身を捨るゝ能はざるなり。
 呼、此上は我胸に言ふべき事もあらずかし。もし我思ふ一々を名残無く言はしめば、
 一日語るども盡くまじければ、我は之にて満足せむ。唯嬉しきは、恁ばかりの不眠を
 も假したまひて、今まで能くも忍ばせたまひしこと是なり。用事も然や有しけむ
 を引住めたる罪は幾重にも免したまへ、と渠は其肩に懸けたる手をばやうく放
 しぬ。お禮は俯きて、行かむともせざりけり。

三十四 かねての疑を露さばやと

葡萄園の内より濁聲高く嬢様お禮様と折から喚くは、監督に附けられたる小作人
 の尋ぬるなりけり。

信之は此聲を聞き、御身はお禮様と云ひ給ふか。我はお禮様といふ名を永く忘れ
 ざるべし。殘多ければ、はやく此處を去りたまへ。人目に懸からば大事ならむ。呼、今
 日別れては又何日、と信之は思に耐へかねたる風情なり。小作人の呼ぶ聲は益近き
 て、はや其處に來れると覺しきに、お禮は惶忙しく身を翻して、必ず又見えむと縁に
 言捨て、園の内に走入りぬ。
 又見えむとや、と信之は其嬉しき言を誦して、入口まで慕行きしが、竟に見ねずなり
 ければ、龍鏡引返して、再び朴の木蔭に來りつ。唯見れば、根方に小さき光る物の遺ち
 たるを、何氣無く織杖の頭に草を分けて、覗るに、お禮の挿せし紫陽花の丸の簪なり。
 それと見るより拾ひ取りて、猶渠を見る心地やしけむ。信之は少時眼も放たで、心頻
 に樂む如く弄りたりしが、黒の伏立つるに、空想の夢を覺して、やうく此處を立去
 りけり。



お禮は此時より戀といふものゝ如何に樂しく如何に忘れぬかを悟りたるなり。その燃ゆるばかりの男の辭その畫のやうなる人の姿は別れて後ぞいと戀しく其時を憶出せば漫に身も浮き魂も脱出づく。渠は憤しさの餘一言をも忘れざる男の辭を心の内に反復して猶其をば解釋せむと試たり。彼人は此村の醫者なりとか。さては六之助様とは同業なるを一言も憚る人の有りとも聞かざりしは何故ならむ。彼人は賢父様をば怨敵と言ひ誓と言ひたまひければ家内の者の涙のわの字だに口にせざるは其故ならむ歟。渠は此事を糺さむとの念はありながら然るべき人もあらざりければそのまゝにこそ過せしか朝に夕に村の木陰の懐しさは得しも忘られで去年見し夢

よりも心に迹無くなりけるは六之助と結婚の契なり。一日お禮は茶間にお爲のみ獨居たるを伺ひてかねての疑を辨さばやと此村の人口は約を幾許ならむと先然り氣無く問出せり。三千約とやらとお爲は針の運を停めて頭を擧げたり。三千といふ人数に唯一人の醫者にては六之助様の繁忙は尋常ならざらむと誘はるゝとも知らぬお爲は唯有の儘を外にも一人あればと言ひぬ。何とか云ふ人ならむとお禮はいと平氣を作りて訊ねたり。渡信之とて近來東京より來りける人なるが世間の噂にては憚る田舎などには過ぎたるほどの上手なりとか。其醫者様の來らざりし前には村人は皆此方をば頼みたりしが今はと言ひつゝお爲は四邊を向せり。さては其迄村には外に醫者は無かりけるかと問はれて、幾人も來にけれども村人は誰も此方の大旦那様を怖れて他へ療治を頼むものゝあらざるより長くは續かで皆徂きしなり。

如何なれば村人は賢父様を怖るゝや、とお禮は渠の言を遮りぬ。お禮は故と慄きて、嬢様は旦那様の可憐を知り給はざるか。世には頭に角生ひ、口より痰を吐て、人を取啖ふ鬼ありと聞けど、内の旦那様のやうに可憐き人物を見しことはあらずと、猶も言はむとせしを速に控へて、恚る事は假初にも嬢様の御耳に入るべきにはあらずと、りしを、と鼓舌して、呼と大息したり。

我聞きたりとて他言だにせずは何か有らむ。憚無く猶も悉しう聞かせよ。然らば今も村人は其醫者を頼まざるか、とお禮は膝の前むを覺えず。老婢は頭を掉りて、先頃此村に虎列拉の行りしより以來、内の若旦那様は哀にも信用を失ひたまひ、その醫者の上手といふ噂のみ高くなりて、と聞く事毎の耳新しきにお禮は益摺寄りて、その醫者の暴に信用を得て、六之助様の在効も無くなられしは何故ぞ。

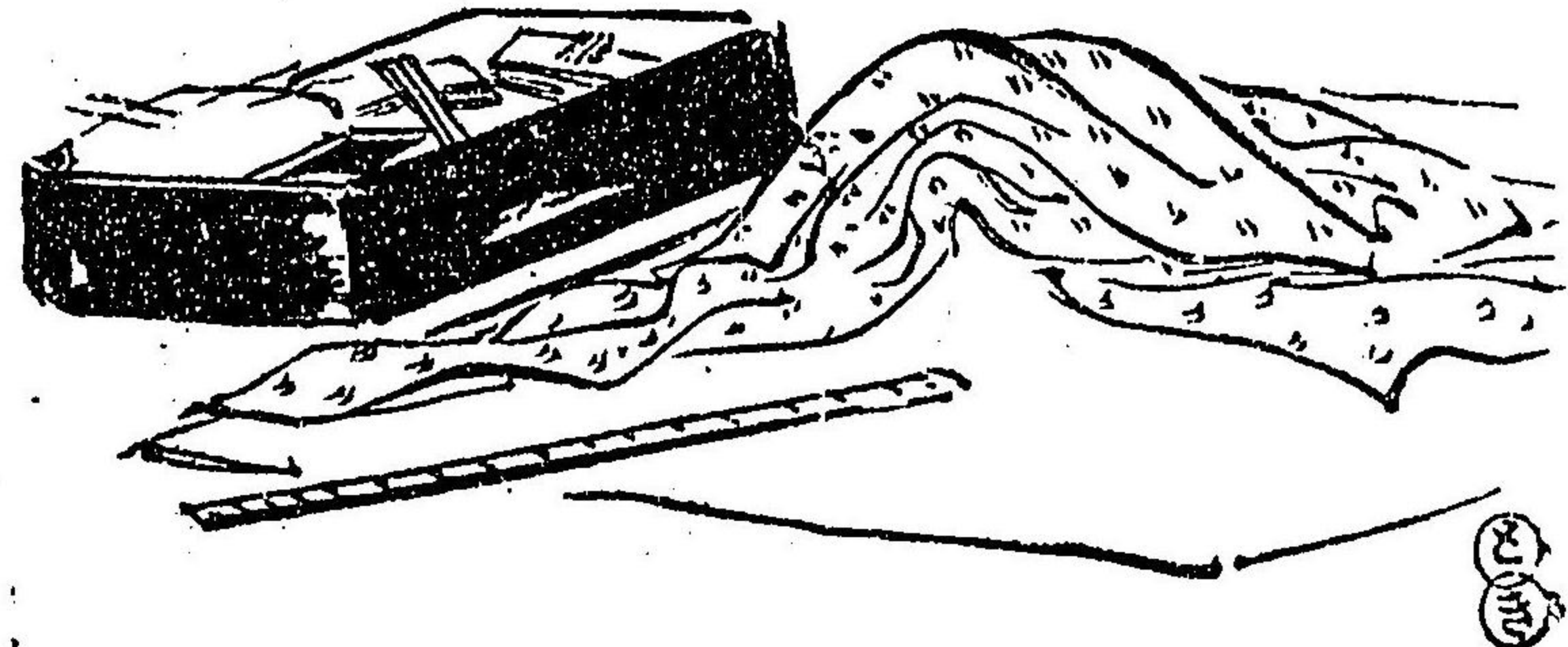
我等は能くも知らねど、世間の噂にては、若旦那様は學問も無く、意氣地も無く、療治も極めて下手なりとやら。其證據は、虎列拉騒動の時、若旦那様の手懸し病人は十人が九人まで死にけるに、其醫者の診たりしは十人が九人まで本復せしなり。然れば其日より若旦那様は村中に愛相を盡されて、旦那様も有弊に其人の手腕には恐れ

たまひけむ爲すまゝに信せて、従來のやうに抄々しう抵抗も爲給はざるなり。

お禮は猶深く問ひぬ。さては其醫者は學問も有り、療治も上手なるにや。

學問のみならず療治のみならず容貌といひ性情といひ、孰れに不到はあらずとて、此村のみか、栗原勝沼の遠きより車をもて遊ぶるなど、曾て此村の醫者には例のあらざる事なり。其の門へ行きて見たまへ、朝々玄關には溢るゝばかりの薬取なり。實に其醫者の病人に深切なることは、一度療治を受けしものゝ長く忘るゝ能はざるまでなりと。

お禮はおのれが爪音に信之の醉へりしより、此物語には一層心を蕩されたりき。六右衛門は凄しく噤りつゝ、畑より歸來りぬ。兩箇の物語は此に途切れつ。されどもお禮は聞ふばかり無く満足して、部屋に歸りしが、やかた窓の前なる小



机に倚りて、曩日逢へりし人を幻に見つゝ恍惚としておたりけり。
 凡そ世の中に我戀人の好き陰言を聞くばかり心強くも嬉しき事はあらざらむ。ま
 して其人の素性をだに知らざりし身には殊にも深く感じたるべし。此樂しさと與
 にお禮の小さき胸に塞りたるは、おのれの後見人の親とも頼める人の果して頼ま
 れぬ人なるか、あらぬかの憂慮なり。實に彼人も好物と言ひ給ひしが、お爲も可恐き
 人と言ひき。我には然しも見ざれど、人の言も痕跡の無き虚誕にはあらざらむかし。

三十六 御身に一件の願あり

六右衛門は臆氣ながらお禮の様子の變りたるを認めて、初度は怪しきことに思ひ
 しが、這は婚禮の近くを虞るゝ如き樂ひ如き娘氣の爲せる業ならむを、と敢て深く
 は咎めざりしなりけり。
 葡萄の收穫も全く果てたれば、今は祝言を急ぐべしとて、お禮の支度を調へむ爲に、
 渠を伴ひて四五日内に栗原へ行くべしと、六右衛門はお辰に吩咐けたり。お禮も其
 座に在りて聞きぬ。

祝言の一語は深く女郎の心を騒せり。今の今まで忘れたりし
 は其結婚なり。我は六之助の妻とならざるべからざるかと思
 へば、渠の眼前に在るも思はしくて、お禮は忽ち起ちて部
 屋に歸りぬ。
 情無き我身味氣無き浮世果敢無き戀など潮の湧く
 やうに小さき胸に溢れて悶へ悶へて一夜を明せり。
 思通りては唯涙の出づるのみにて、身を免るべき分由
 別は出でざりしなり。然れども心に染まぬ縁は飽くまでも結
 ばじと思定めて、其朝六之助に向ひて、左にも右にも言出さむ
 としたりしかど、女の口より恚る事を、と有繋に心弱りて過し
 けるが、さては竟に推附けられて進退稱はぬやうになりなむ。
 如何にも言はむは今の間なりと、又思返して夕暮近く六之
 助の室に造りぬ。
 渠はお禮の姿を見るより、喜色を滿面に溢へて逸へたり。實に此



二三週間お禮は六之助の室に訪れしことの絶えてあらざりしなり。六之助は大早に雲霓を望みたる心地して見苦きまでにその機嫌を取らむと励めたり。お禮は有繋に言出しかねつゝ、なほ物言ひたげに見ゆるをば渠は益悦びて撲満を割らむとしては幾度か手を控へて樂むやうの氣色なりしが、お禮は竟に口を開きて御身に一件の願ありと打出せり。

六之助は身も顫ふばかりに悦びて、衝と摺寄り羞しげに俯ける女郎の顔は海棠や雨を帯びたると飽かず見入りつゝ、如何なる事にも必ず聴かむ。裏まず語りたまへ。妻として夫に何の遠慮かあらむと猶直々と寄添ふにぞ、お禮は僅れむとしたる。

御身と義の日約束せし事に就きてなり。とお禮は言ひぬ。六之助は少しく氣の脱けたる眼色にて約束せし事とはと問反しぬ。

祝言に就きての御挨拶なり。やうく此頃分別の定りたれば、それを申さむとてなり。

渠の眼色は益氣の脱けたるやうにて、其挨拶は疾に親達より聞きたるものを。然

れを我よりは未だ聞きたまはざるならむとお禮は面を擧げて渠の氣色を伺ひぬ。

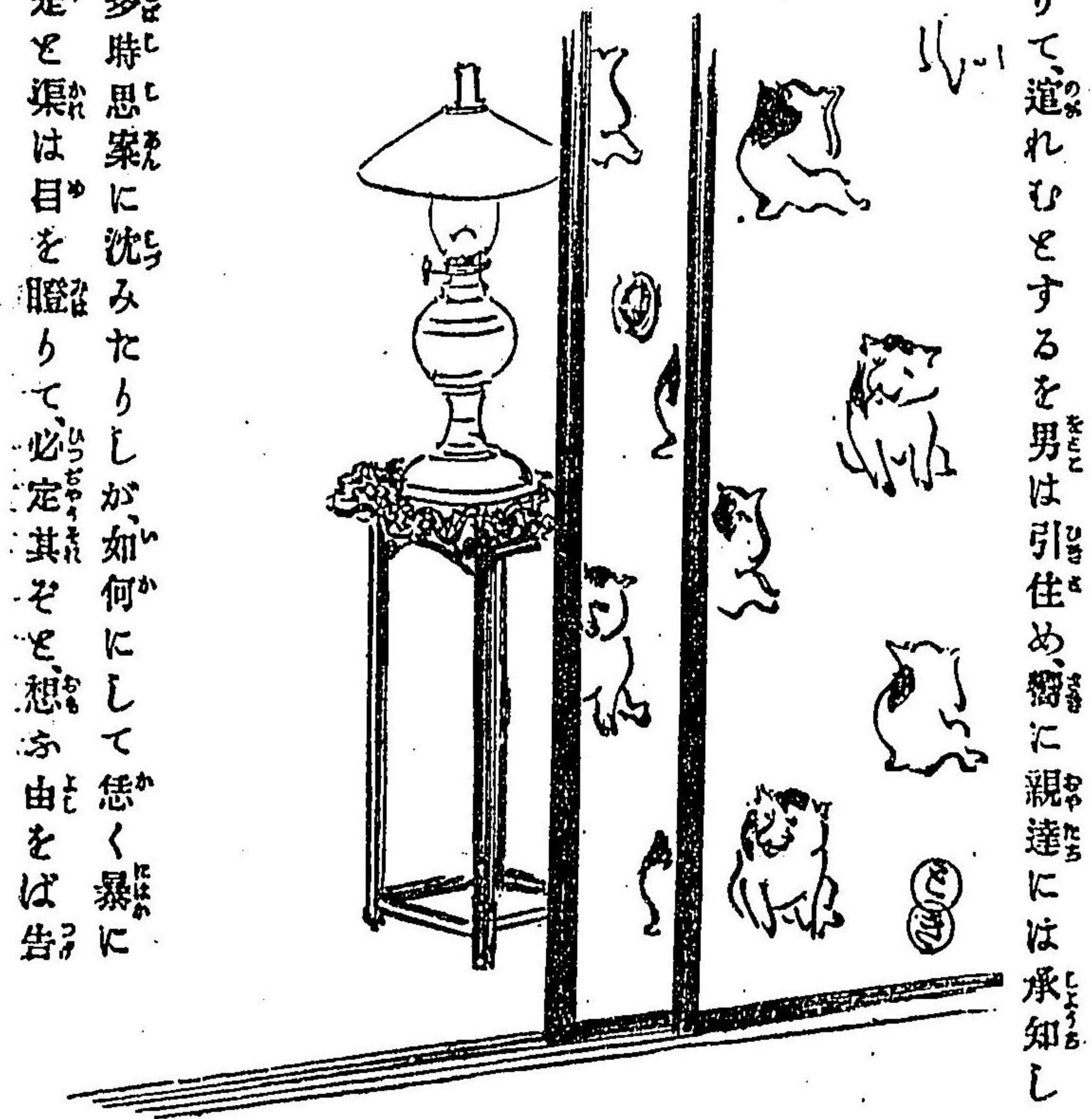
三十七

他に戀しき男ありて

我は此身を愛みたまへる賢父様賢母様の實の娘にならむは願うても無きことなれども、御身と夫婦にならむよりは兄妹になりたきなり。とお禮は疑懼言出せり。

兄妹になりたきならば夫婦にもなり、兄妹にもなりて睦しうすべし。我は何故に御身が然まで兄妹になりたきやらむ、更に其意を得ざるなり。御身は兄妹よりも夫婦の睦しきを知らざるか、と六之助は徐女郎の手を執りて懐しげに弄りたり。今はお禮も屹と胸を据ゑて思合はる同士ならでは夫婦には成難けれど、兄妹ならば、然は無くとも、一思に言断れば、我は慙くまで御身を思へるに、さては御身は我を思ひたまはぬか、と六之助は始めて驚けり。お禮は其時太く震へる聲にて、我は御身を思はざればと捉れし手をば衝と退けば計らざりき。御身は我を思ひたまはざるか、それゆゑに兄妹にならむと言ひたまふか、と六之助は目に稜立て、詰寄せたり。お禮は在るにも有られぬ心地を忍びて、我は御身を思はざれば夫婦にはなるまじき

意なりと言ひも流らす起上りて道れむとするを男は引住め、嚮に親達には承知し
ながら今に及びて情無き其
挨拶は何事ぞや。此身に氣に
入らぬ節もあらば唯御身の
言ふ所欲に改めむ。何をか腹
立ちて今更然は言ひたまふ
ぞ。我は御身に棄てられては、
と責るを引放して御身に氣
に入らぬ節も無ければ腹立
てるにもあらず。左右は御身
を思はねばなり。とお禮は室
を駆出せり。



六之助は惘然と腕を扶きて多時思案に沈みたりしが如何にして急ぐ暴に
渠の心は變りたるならむ。或是と渠は目を睜りて必定其ぞと想ふ由をば告

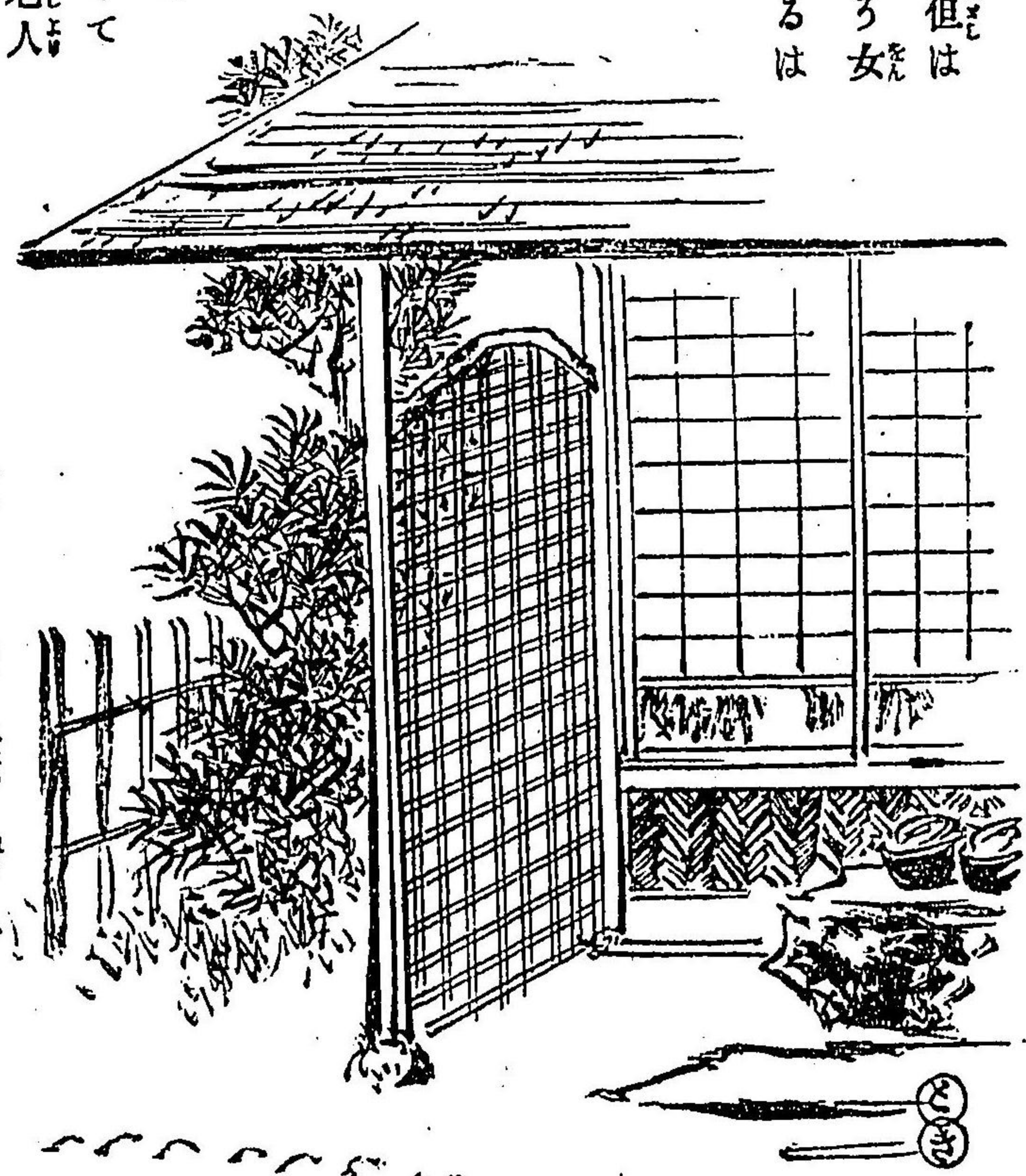
ひとてか直に起ちて父の居間へ趣きけり。
其夜九時頃六右衛門は然り氣無くお禮の部屋に入來りぬ。女郎は早くも其意を推
しければ或は怖れ或は惑ひて如何はせむと控へたり。六右衛門は心の怒氣を蔽は
むとするが如き微笑を作りて今六之助より聞きし事のさりと信しからねば自
身に恥と質さむと思ひて來れるなりと強ひて聲をも和げつ。
お禮は差俯きてそは信なりと言放てる調子は幾と全身の力を集めたるやうなり。
何故なればと六右衛門は推返して訊ねたり。
何故といふほどの事はあらざれど六之助様と夫婦にならむと思ふ念の露ばかり
も有らざればなりと聞くや六右衛門の面上より作りし微笑は忽ち去りてその念
は何時より有らずなりけるぞと和ぎし聲も稍尖りて其方は他に戀しき男ありて
我六之助をば嫌ふならむと星を指されしお禮の顔は紅の如くなりて得堪へぬば
かりに其胸は轟けり。

三十八 滴々と涙を墮して見せたり

六右衛門は早くも女郎の氣色を見て取りしが、然あらぬ体にて再び語を和げつ。臆
 我は亡くなられし父御に其方の行末を托まれてより、幾許心を碎きて、其方の爲に
 盡したると思ふぞ。寐ても寤めても、太兵衛殿の遺言を反古にせしと、唯其のみを心
 に懸けて、今は漸く其方も人並に生育ちぬれば、此上は氣樂に隠居して、優しき其方
 の介抱をも受けばやと、樂みし効も無く、要無き事を言出して、猶も我等を困めむと
 するか。餘と言へば心無き人かな。六之助とて人に後指さるる者にもあらず。我口
 より言はひは異なるものなれど、此村にては二無く尊敬せらるる身なれば、此處彼處
 より嫁に與れむと言ひ入れしも、數ありしが、我は舊時より其方ならではと可愛く
 思ひたれば、二十軒にも餘る縁談を皆斷りし。愆くまで思ふ我等の心にもなりて、
 唯とは言はずや。我は其方を生の娘のやうに思ふものを、六右衛門は滴々と涙を
 墮して見せたり。

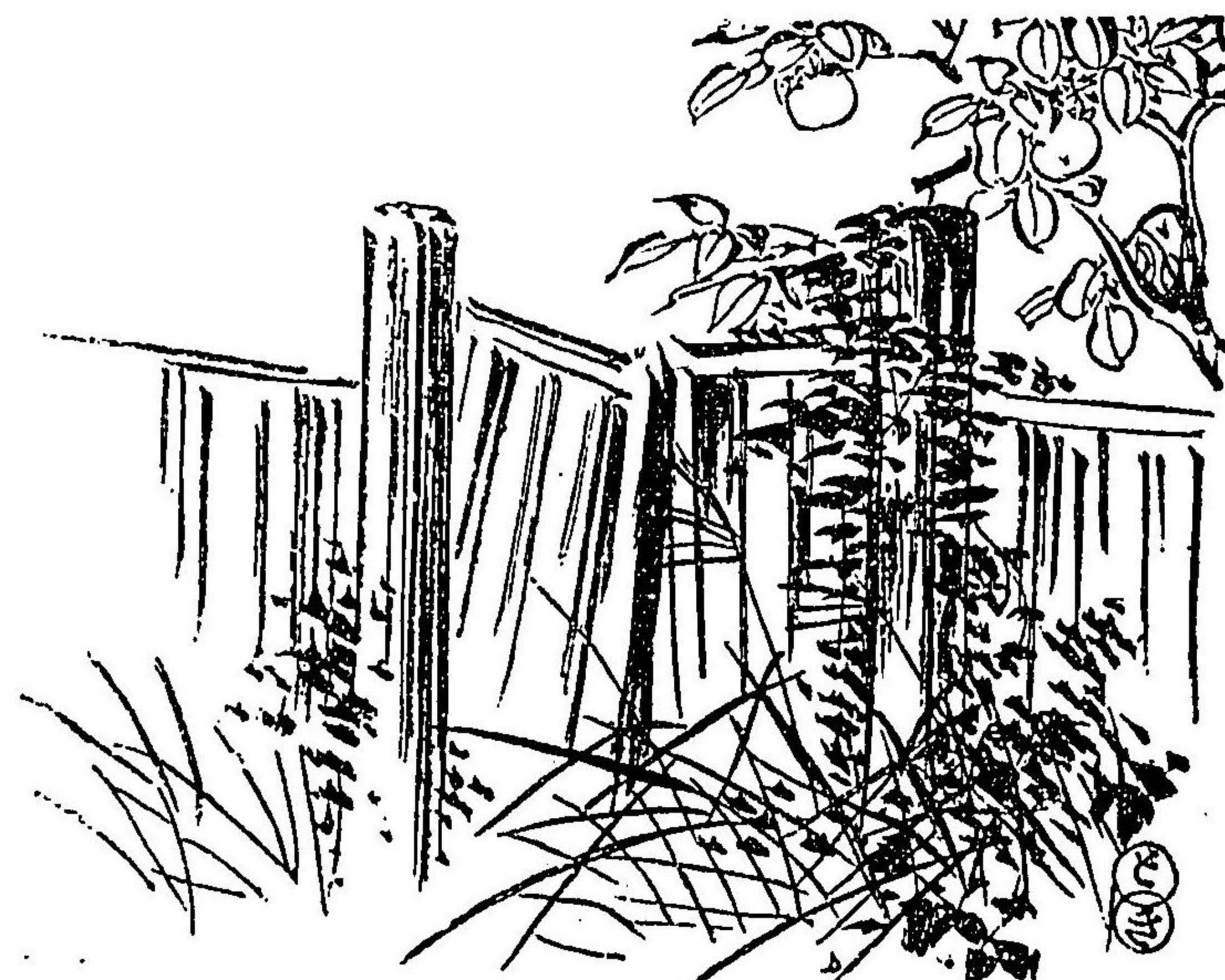
お禮は理に責められて、否とも言はれず、唯とは言ひ兼ねて、我は努々祝言を辭むに
 あらず。在りし静女塾の戀しきなり。願ふは今より甲府の學校へ還したまへと言ふ
 を六右衛門は熟聽きて、再び學校に入りて如何にせむとの意ぞ。十年間も教育受け

て未だ足らずと思へるか、但は
 學者にならむとする歟。凡そ女
 子の學者ほど世に不幸なるは
 あらざるなり。渠等は世間
 に棄てられ、男に管はれぬ
 身の成の果にあらざるは
 なし。女子といふものは、人
 の妻となりて、家を齊へ、
 子を育つるが道にあら
 ずや。我等よりは其方こ
 ろなかく、愆る辨はある
 べきなれ。されども年若くて
 は無分別は免れざらむ。老人
 は善からぬ事を言はぬものなり。よく心を落着けて、篤と再び了



笛をしたまへ、と應答だに拂々しからず、打發れたるお禮を願り、六右衛門は此を立出でたりけり。
渠は臥戸に入りても目は合はで、只管此事を考へたり。お禮めは必定男を戀初めたるならむ。さては誰なるべきと、渠は村中の壯者を一人殘さず心に盡きぬ。されど其數の中に誰かお禮の戀人を指すべき者を見出さず、左にも右にも女の思付くべきは、我家の六之助を措きては、此村に在らざるなり。其六之助を嫌ひて何者に心を移すべき。假に心を移すものありとしても、獲の鼠に伴き渠の身は何日如何にして其者に逢ひて、其者と語りけむ。或は全く自からの變心なるべきか。されども其心より嫌ふやうになりたるは何に因りてならむと、彌々考慮は及ばずなりて、其夜は竟に眠りしが、明る朝は目覺むると、與に又其事を思復しつゝ、例の夙て家を出で、葡萄園に向ひけるが、渠は劈頭川の堤に立ちて、其處よりお禮の住める二階の見ゆるか、あらぬかを試みしに、高塚に隔てられて見えず、見えずと、咄きつゝ、川下を指して進行きぬ。

三十九 さては我推量は謬りしか
堤の次第に高りたるに、此よりは如何と、足を住めて窺ひけるに、仍塚に遮られて、座敷の内は見えざりければ、遂に進みて、信之が登りし丘の上に来りけり。
實に此こそはお禮の坐りたるまでも見ゆべき足端なりけれ、と一團の疑念は端無くも、渠の心頭を衝きて起れり。然れども、這は餘り邪推ならむとも思ひ、又は事は常に意外の邊より生ずれば、なと取つ追ひつ、思案しつゝ、家に歸りけるが、渠はお辰にも語らで、窺に其手懸を免めむと工夫したりけり。
翌日六右衛門は漁にとて出でたりしが、程も無く左の足を曳き、歸來りて、何所にて怪我するか知れぬものかな。櫓を外して尻居に仆ると、機に絶か、踝を打ちけり。とて、六之助の一診を経て、塗藥を施し、綿帯せし後は、安かに臥してあらざるべからざるを、六右衛門は無聊に堪へざりけるなり。
お禮は優くも之を慰めむとて、新聞を持來りて讀まむと言ふを、六右衛門は深く喜びて、それは夜の娛樂にして、今は琴を聴かひ。この脚なれば、梯子は昇り難ければ、奥の四疊半に移りて、二三日は彼處に留りたまはずや。然すれば、朝に晩に來往ひて、病



中の退屈を忘るべしとて直にお禮は庭に向へる閑静の一室に移されたり。渠は此に六右衛門を介抱して四日を過ぎぬ。然しもあらざりし足の傷は全く癒えて、再び好める漁に出づるやうになりけれども六右衛門はお禮を二階へ還さむとせず。恚くて我家の寶を覗はるゝ虞のあらすなりけるを喜びて、若果して渠の戀せるならば、定めて驚き感ふならむと私に思設けたりしに、お禮は然る氣色をも顯さるに、さては我推量は限りしかど、六右衛門は盆渠の心の底を疑ひぬ。恚る有様にて幾日か事も無くて過ぎけり。其間六右衛門が鋭き眼色と、お辰が隈無き

注意と六之助が妬さの穿鑿は、お禮の坐臥行住を影の知く守りたり。渠は然りども知らざりければ、又敢て再會の首尾せむと企つるにもあらざりしなり。貝塚の裏庭の畑の奥に、長く棄てられて野を見るやうに荒果てたる空地のありけり。草は人の肩を埋むるまでに生茂り、年經る澁柿の二本枝を交せる葉陰の暗きに、朽ちたる木戸の骨を開かれざるがあり。お禮は其後弗と外出を許されざる寂寞に、此荒野の露を分けて、得知らぬ草の花を尋ね、夕は月に仰き、蟲に俯して、覺束無くも慰みたりけり。

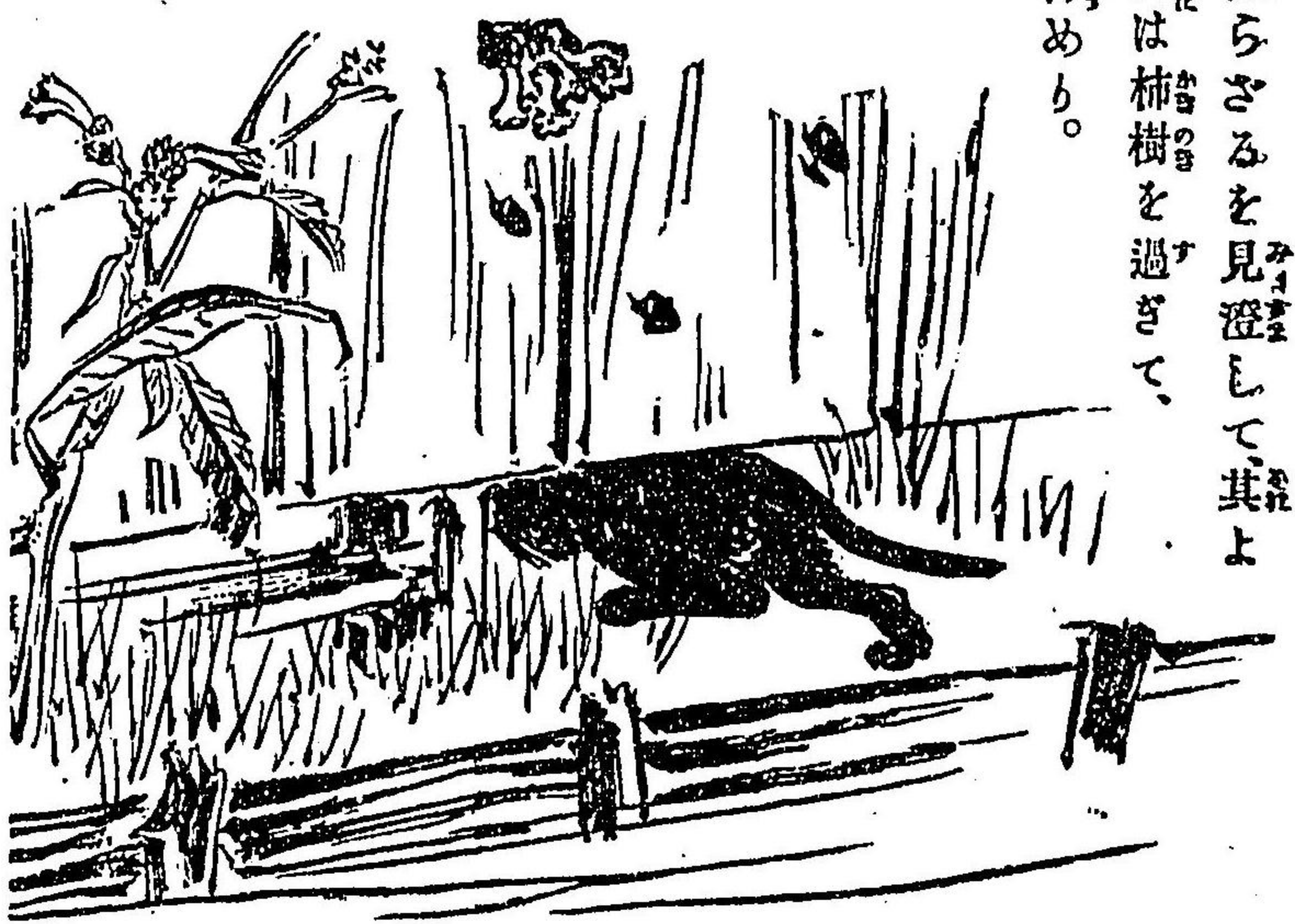
四十 心したまへ誰も見人あらざるか

渡信之は病家よりの歸途懐しさの餘貝塚家の背面なる裏路を傳ひて、將に其木戸を過ぎむとしつゝ、堀の内に入りの語を聞着けたり。渠は思はず立寄りて耳を欝つれば、其人と或人と物語るなりけり。折から少く隔りて女の呼立つる聲に、何ぞと答ふるはお禮と語りし男の鐵啞聲なり。村長様の見えられたれば、と呼ぶに應じて、此方には人の動く氣勢せり。

信之は節孔を見付けたれば、四邊に人の在らざるを見澄して、其上より内の様子を窺ひつ。六右衛門の歩行く姿は柿樹を過ぎて、お禮は二三間此方の叢間に物思はしく佇めり。渠の後影の見えずなりけるを待ちて、信之は震へる小聲を勵して、お禮殿、お禮殿と呼びぬ。

女郎は聞ふばかり無く驚ける氣色にて、其聲の何處より來りけむと疑ひつ。頻りに四邊を响したり。然れども人影のあらざれば、再び聲やすると耳を傾けて待つよと見るより、信之は又一聲お禮殿と呼びて驚きたまふな。我なり、渡信之なりと指頭にて剝啄と堀を敲きたり。

此時お禮の面は雪の山の夕映せるが如



くなりて、直々と堀際に寄りて、渡橋かと打頭ける聲して呼びぬ。心したまへ。誰も見る人はあらざるか、と外なる聲の響むれば、お禮は少焉前後を候ひて、お氣遣あそばされな。此は座敷よりは見えぬ庭には人もあらざるなり。思懸けずも如何にして憚る所には來給ひける。其節孔より外面を窺はむとせり。

御身を見初めし日より、御身と語りし日より、我心の樂しさと苦しさと、實に語には盡し難し。夜毎の夢も御身に逢はずといふこと無し。憚くまでに我思は深ければ、御身は我敵の家に養はれたまふ人なれば、浸々此心の内を語るべき機のあるを、我は此上なく口惜く思ふなり。

如何なれば御身は此家に養はれたまふか。將又御身は如何なる人の愛兒なるか。苦しからずは打明けたまはずや。成るべくは窺に此本戸を啓きて、少時なりとも出で來たまはずや。恐らくは御身は此家に在りて、幽囚も同じき苦艱を受けて居たまふならむ。永遠憚る所に在らむより、遁れて我に來たまはずや。

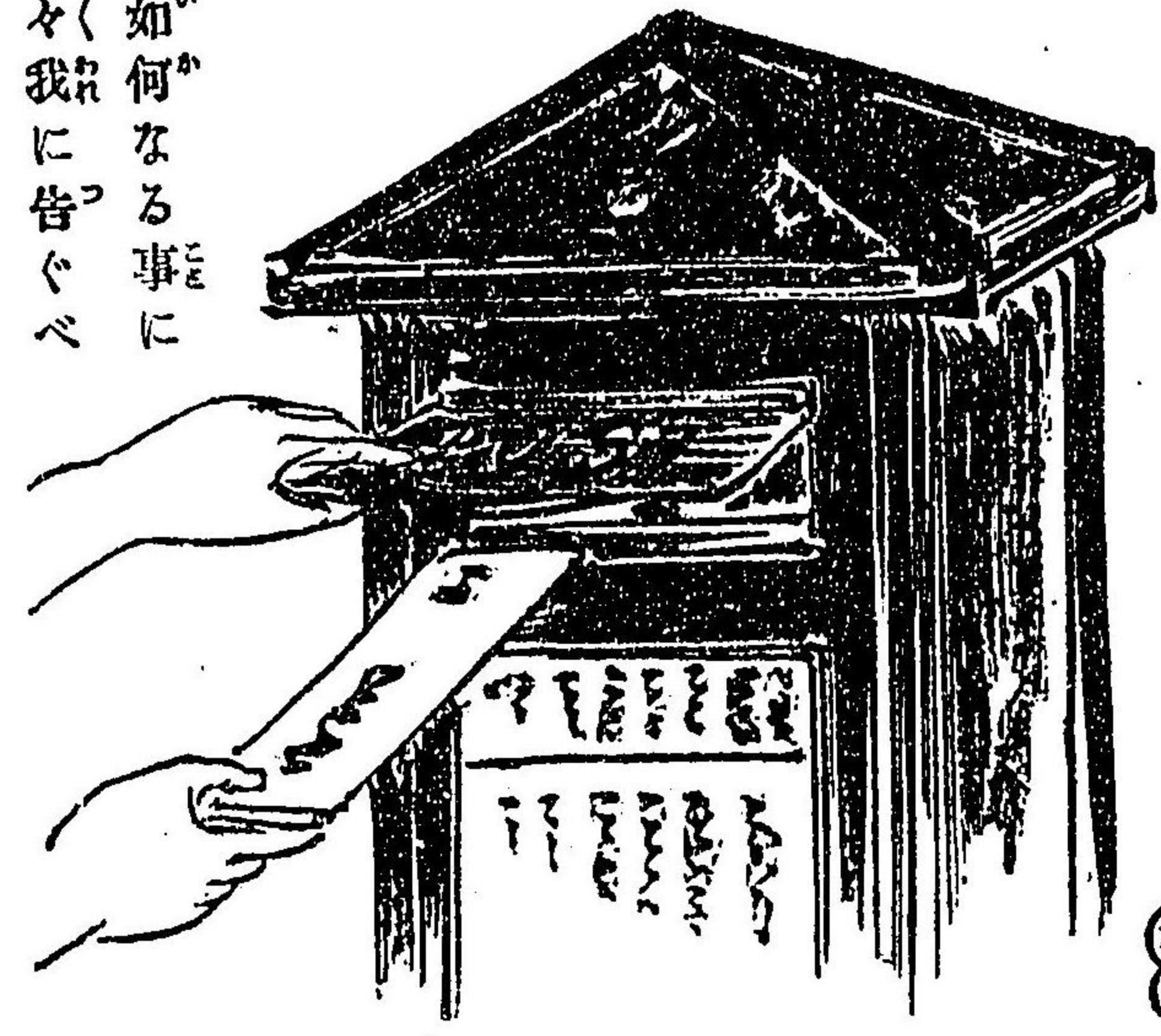
我も渡信之なり。いかで便無き女子を欺きて、名譽と與に御身を棄つべきや。我平生を知りたまはざる御身なれば、憚る恐しき事言出づるを、なかく疎しく浮きたる

者にとや思ひたまはむ。されど這は信之が口の語るにあらず思に過られたる人の心の聲を聞き給へ。如何に如何にと隔の塀を推して誠は自から聲音にも顯れたり。

四十一 一度は疑ひ、一度は危みぬ

お禮の心は動きしかど、有繋に娘氣の物怖して、御志の程は仇にも思はねど、今といひて今御言に従ひ難き仔細もあり。又餘り道ならぬやうにて心にも咎めらるれば、今日は忝なき御言に背くとも、明の夜の九時頃願はくは更めて此まで忍ばせたまへかし。さては此身の素性此に養はるゝ次第をば、詳う文にして御覽に入れたき意なり。もしや御差支などありて御出の成はずば、その次の夜に立寄らせたまへ。幾日なりとも我は御身を待たむ。
折しも母屋の方に人の聲す。お禮は驚きて振返りしが、はやく今日は狙きたまへ。誰やら来るやうなれば、と急立つれば、今一言と外なる聲は殘惜げに言ひぬ。
何をかど女郎の問へば、御身は具に我を思ひたまへるか。確に聞かせたまへとなり。お禮は姑し躊躇ひしが、人音の近く聞ゆるやうなるに慌て、明夜の文を見たまへ、

と緩に言捨て、走行きぬ。
怒るべしとは得も知らざる六右衛門は、其後何の怪しき節もあらざるに拍子は抜けたれど、或は餘り人目の嚴かりしより、渠の却りて用心せしやも知れざれば、と渠は竟に探索の手を變へつ。腹心の定兵衛元藏、長助の三人に耳語して、從來は客分の娘を大事に助はる餘り、叨に外出も爲せざりしに、近來氣鬱の病の起るべき氣色なれば、以後は心の輝るやうに、村の内を散歩せしめむと思ふなり。人を附けむとすれば、煩しとて嫌ふ故に、往々單獨出すともあるべし。されば爾等は人にも秘し、渠にも曉られぬやう、陰身に添ひて渠を護るべし。且如何なる事にもあれ、渠の身に關せる事は大小と無く、一々我に告ぐべ



吹笛

きぞ。其種に因りては随分褒美を取らすべしと手筈のしたりとは知らざれども、お禮は一度は疑ひ一度は危みぬ。這は幾度とも知らず我より願ひし事なるを曾て許せしこともあらずして、今遂に彼方より言出せしは毒を進めらるゝにはあらずや、と有繫に疵有つ脚の氣味悪かりしが怒ひ辭まばなく、異まるべく戸外の景色も懐しければ言はるゝまゝに家を出でて天王の社笛吹川の堤なを疲るゝまで見廻りたり。

今宵戀人に送るべき長文は昨夜の中に認めてければ歸りて後は頻に胸のみ躍らせて唯其時刻の到るを待てり。やうく夜食を了りてお禮は我室へ起たむとせしに、今日はお爲が病氣にて先程より臥したれば我と與に勝手の後形附を手傳ひたまへ、とお辰に引住められて、それを果せば今日の新聞を讀みて聞かせずや、と此度は六右衛門の註文なり。

四十二 渴したる耳の潺湲を聽得たるごとく

這は如何にせむと思ひしかと、所詮は辭むべきにあらざれば、お禮は然あらぬ氣色

にて、言ふがままに新聞を讀聞かせつ。然れを心は固より此に在らで、木戸の外に彷徨たまひて、今やくと彼人の然こそは待詫びたまふらめと、口惜さ悲しと身を責めて、其讀聲も竟には涙に曇らむとせり。

やうく讀了りて時計を見れば、はや九時三十分を指したるに、彼人は必ず歸り給ひしならむと思へど、心濟まねば彼文を懐にして、お禮は約束の所に忍びぬ。まづ外方の氣勢を候ひ此に在りとの合圖をもしたりけれど、應ずる人のあらざるに、愆くとは想はぬにしもあらずしが、來て見ればいと口惜さに立戻る足も重く、寐ねての夢も穩からず、心苦き一夜は明けて翌日は午後より六右衛門父子は他出して、お辰の一箇茶の間に針仕事してゐたりければ、お禮も其側に行きて編物の針を把らむとせしに編みかけたる肉色の毛糸は生性盡きたるなり。

お辰は之を見て遊び旁自ら買うて來たまはずやと言ひぬ。お禮は呆れて渠の面を目成れり。一步も門外の土を踐ませざりし嚴さに引替へて昨日より速に獨行を許せしさへ異しと思へるに、買物にまで獨り行けどは、餘を附へば自由の過ぎたるにあらずや。必ず此には遠謀のあるならむと、有繫に心着きけれども、用心だにせばと

思定めて、絲店の在所を問ひけるに、天王の社へ行く道を右に曲りて、火見楷子の立てる邊に郵便局あり。其三軒先なれば、直に知らるべしと誨へられぬ。

郵便局の一語は、渴したる耳の潺湲を聴得たる如く、お禮の心に響きしは、誰も見るとの有らざらむには、渠は昨夜の文をば投函



して、些の苦も無く、戀しき人の許へ送らばやと、忽ち思着きければなり。お禮は室に還りて、手匣の底の底に秘めたりし文をば、手早く帯の間に移して、門外に出でつ。田舎の町は極めて閑寂なるものなり。往來亦車馬の喧しきも無く、人の忙々に行くもあらで、油

を擇むる音の長閑なる所を過ぎて、街道を右に折るれば、直に郵便局の前に到れり。渠はポストに立寄る先に、然り氣無く前後に眼を配りしが、折から過るものも見る人もあらずと見定めて、渠は物の中へ毒を投するやうに、かの一封を投函して、再び四邊を胸しつゝ、足早に立退きて、人知れず額の汗を拭ひき。二十分計の後、村人等は此美しき女郎の黄八丈の服紗包を抱へて、町より歸來れる姿を見付けて、彼此噂し合へりけり。

四十三 懐しき方よりの音信なりき

お禮の想へりし如く、信之は其夜木戸の外に、一時間餘も立盡したりしが、待てども待てども、人の出来る氣勢もせざりしより、或は渠の心を疑ひ、或は渠の身を危みつゝ、空しく家に歸りては、お禮の睡を成さざりしより、なほ幾層の苦悶を懐きて、夜を明せしが、翌日も物憂く午前を過し、やがて病家を問はむと支度せる所に、れ町は一封の郵書を持來れり。信之は裏書を見むとせしに、有らず。消印を見れば、此村のなり。誰ならむと眉を擧め

て宛名の手跡を熟視せしに大なる文字は男めけとも筆勢の自から優しげなるは女筆なるべしと益疑ひて開封すれば嬉しく懐しき方よりの音信なりき。初恋の女児は其震へる織く麗しき文字にて未だ覚えざりし感情を寫さむとしたるなり。渠は到底寫得ざりしかと信之は其の寫得ざるをも讀得たり。

今日此頃の我胸の内は其の外には御身と雖も知りたまはざらむ。妾は必ずしく御身を忘れざるべし。御身も決して我身を棄てたまはざれ。

妾は栗原に生れて父は春日太兵衛とて人にも知られし酒造家なりしが妾は稚なき頃母に別れ十歳の後父に先たゝれてよりその遺言に因りて後見人と頼める六右衛門殿に引取られ今年まで八年が間甲府の靜女塾といふに入學したりしなり。我身は富めりや將貧しきや更に知らねども幾多の遺産はありと嘗て人傳に聞きしかと六右衛門殿は一度も然る事を告げたまはざれば虚實は知らねど大方は貧しき身上と思したまへかし。

六右衛門殿夫婦は妾の思ふ所にては御身が言ひたまひし如き憎むべき人にはあらざらむ。孤子の妾をば憐みて實の親のやうに何彼と深切にしたまへり。妾は實に

御身と相見しまでは頭に六之助殿と結婚せよと擲られて其下心のありけるなり。然れば妾若し御身に會はず御身を戀ひずあらば想ふに今頃は盃もせしなるべし。御身に會ひし後妾は竟に彼人との結婚を拒みたり。然れども六右衛門殿夫婦は此我儘なる妾をも憎みたまはでいと深切に待ひたまふを見るに就けて妾は飽くまでも彼人々を悪人とは念はざるなり。

幸ひに昨日より妾は最早一間に閉籠めらるゝ身にはあらず。なりぬ。昨日は半日單身にて村の内を散歩せしなればやがて嬉しき逢瀬のあるべきを御身も妾と與に樂みたまはずや。

其折にも問はまほしう妾の如何にしても疑はしき事二件あるなり。人は御身と六右衛門殿とを容れ難き體同士と云はずや。二には六之助殿をば蔵匿なり意氣地無なり



と言ふとかや。何故に悪人にもあらぬものを御身は悪人と言ひ又警敵とは爲たまふらむ。何故に其父母の口を極めて稱賛すほどの六之助殿をば村人は口汚くも辱ひるならむ。

妾が家は人目の殿しければ忘れても文など送らせたまふべからず。唯徐に時節をば待ちたまへかし。妾は御身を忘るゝ能はず御身も妾を棄てたまふな。妾は寐ても寤めても御身の事を忘れざるなり。御身も斯如く妾を忘れたまはざるか。

渠の惜き筆は取急ぎてや此に止めつ。信之は此文を鑿らで見返し見返しやうく巻納めて懐に入れたりしが又取出して或所を見返し其文辭をば樂しげに暗記しつゝ始めて出診の途に就きぬ。

四十四 お禮の指す方に舟を寄せたり

或朝六右衛門は渡守の源三に舟を操らして料を張れる折から、お禮は其岸の頭に歩來りて、おのれも俱に乗らむことを懇望せり。六右衛門は輒く肯ひて我は用事あれば今より歸らざるべからず。然れど所望とあらば杉戸の邊まで乗りて見るべし、

と直に綱を収めて舟を漕寄すれば、お禮は珍しげに乗移りぬ。入替りて六右衛門は陸に上り、源三よ、鹿想の無きやう丁寧も心を着けよ。お禮も餘長くは遊ばまじきぞ、と獲物を擧げて急行きけり。

源三は楫を把りて忽ち中流に推出せり。澄徹りたる秋の空は大なる明鏡を展べたる如く、日は高く懸りて、其光は謂ふべからざる一種の秋の色を放てり。兩岸の木葉は稍黄みて堤の草は色々の花を着けたり。

一刷の遠山は眉の如く、天の低る邊に横はりて、遥き林に顔行く渡鳥の聲々は、萩の上風に吹散らされつ。舟は蘆の花の亂發して、水上雪積む一白の間を出入し、或は岸に沿ひ或は中流に泛び行くとも無く、漕ぐとも無く、不知岩崎村を背後にして、村立つ柳の堤を過れば、はや村境に近き目標は雲衝くばかりの銀杏立てり。其先に然しては高からねども、絶壁を削成したる崖の十間ばかりに亘れる處は、變死の淵と

仇名に呼びて、川水も其邊ばかりは黒く淀みて、怪しき物も住むとぞ言傳へたりける。之を過ぐれば、堤は又元の如く連れり。折しも草の陰より人の頭を顯して、彼舟を打目成るは、貝塚の裏より出入る貂相なり。

渠は先づ片笑みて、左右は飲代にせばやと獨語ちしが、再び葦間に身を潜めつゝ、細き徑を傳ひくつて、彼舟を何處までも逐行きけるに、遂に杉戸村の入口に着きたり。お禮は村の景色を眺めたりしが、やがて源三に向ひて、今鳥の飛立ちし邊に舟を着けたまはずやと言ひぬ。御身は陸に上りて遊びたまはむとするか、と渡守は問へり。此より歩みて歸らむと思ふなり。舟の中も飽きたればとて、切に需むるに、源三も竟に其意に任せて、お禮の指す方に舟を寄せたり。元藏は見付けられじと周章きて、葦間より這出づるより早く、路の傍なる木茂の中に隠入りけり。

急くてお禮は徐々に堤の上を歩みて、かの銀杏の樹下に來りけるに、踏處も有らぬ落葉に交りて、黄なる木實は珠數の緒の切れたるやうに墮散りたり。渠は見るより嬉しく杖を抜きて、手信に拾取りぬ。取れども拾へども盡きざるに、渠は幾と己を喪れて、此樹蔭の俣となりけり。多時は俯きて黄金を拾ふに餘念あらざりし耳朶に、落葉を踏破く、蹻音の不圖聞えければ、渠は縁に面を擧げぬ。唯見れば、箇抑什麼其人は、思も寄らぬ渡信之なり。

四十五 いつまでも見物せざるべからざるなり

二人は袴と寄添ひたるまゝ、少時は言もあらざりけり。元藏は松の樹蔭より窺ひつゝ、好き仕事哉、寡くとも五十錢の價値はありと微笑みぬ。怒るべしとも知らざれば、二人は堤より見えざる小蔭に入りて、鴛鴦の如く睦しげに相倚りて思ふがまゝに語ひけり。

御身は實に我を思ひたまふか。妾は御身を忘れざるなり。此語は天地の在らむ限り、人類の在らむ限りは、若き男と女とが言ふに飽かざる不朽の言なるべし。戀といふも此の二つの語に過ぎず。——此語をば男女の受授するに過ぎざるなり。二人も此語をば種々に言替へつゝ、或は手を執り、或は笑を交して、時の移るも覺えず、唯離れかねてゐたり。此長き間、葦間に忍びたる元藏の苦惱は實に謂ふべからざるものなりけむ。渠は一刻も早く六右衛門に告げむと思へども、岩崎村へ行かむには、二人が側を過ぎざるべからざるに當惑して、思々しくも渠等の爲すまゝを、いつまでも見物せざるべからざるなり。良ありて二人は其單調なる戀歌を唱ふを息め

たり。然れを渠等は仍起たずして語ひつ。
信之は問はるゝまゝに、六右衛門の可
恐き事六之助の思なる事又おのれが此村に來りて太甚しく妨
害を受けし事など、具に説聞かせて、やがて六右衛門の我に復讐
すべき時も來るべしと、聞くにお禮は心を傷めて、もしも此事の



露はれなば御身の禍は愈劇甚しからむ。如かず知れざる先に、妾は此可恐後見人の
手を脱れむには。さては彼處を出で、一度舊の學校に歸りて後徐に分別せむは如
何。左にも右にも心を定むる事あらば、其折に又文を參らすべし。今日は是にて、どお
禮は先起上りて、餘り遅はらば疑を招かむほどに、と口には言へども、飽かず男の面
を目成りて佇みぬ。
又何日逢はるべきと、心細げに言はれて、お禮も打委れ何日とは知られぬと、近來は
外出を許されたれば、又途上にて逢はむことは難からじと言ふ。然れを今日のやう
に人目の有らぬ處にて邂逅ひ、愆く浸々語るべき機は有難かるべし。それに就けて
も惜まるゝ名残かなと、信之はお禮の手をば得放たざりけり。
そのまゝ二人は推並びて十間ばかりも行きけるが、今はと思ひて立別れぬ。時分は
好しと、元藏は勃起々々と、義間を出でむとせしに、お禮は忽ち小戻して、其處に仍立
てる信之を呼びぬ。元藏は慌てゝ舊の所へ這入りけるが、やうく頭を擡げて見れ
ば、二人は又一箇になりて、立話を始めたり。渠は呆れて、頭を柔れぬ。
二人は遂に別れて、お禮は其道を眞直に岩崎の方へ急行きぬ。信之は其後姿を見送



詰寄せたり。
旦那様必ず驚きたまふなと元藏は先渠の心を激して、さて言はむとせしが、氣を變へて誰ぞか思召すと抑ゆれば、急ぎに急きたる六右衛門は額に脈を顯して、閉話措きて、語れ語れと苛立ちしが、渡信之！と聞くに、俾しく全身の血は忽ち逆上して、朱を沃きたるばかりの眼は凄しく輝きつゝ、顔く唇を咬緊めて、彼彼と如何なる事ありしぞ。語り聞かせよと、言ふ聲は呻くに似たり。
元藏は爰ぞ五十錢と思へば、在りし始末に尾筋を添へて、業々しく語出だしけるを聞澄せし六右衛門の面上には、沸々と

りて根の生ひたるが如く立盡せり。

四十六 嬢様には情郎あり

不圖用事を思出せし信之は、若皇しく踵を旋して杉戸村の方に向へり。其を見りよる元藏は飛出して、岩崎村の捷徑を一散走に、早くも貝塚の裏口に着きぬ。納屋の前に六右衛門は釣道具の修復をして居たり。元藏は駈寄りて、旦那様嬢様の事に就きて、ど迫れる呼吸に聲の過ひを、六右衛門は手もて抑へて、此方に來れど、裏口の木蔭に伴ひ、さて如何にせし、と仍聲を潜めて問へり。
元藏は見よがしに心の動悸を撫で、語れば長き事なれども、摘みて申さば唯の一語嬢様には情郎あり。
六右衛門は頭上に一撃を受けたる如く慌て驚きて、誰にか聞きし、と渠にこそ罪あるやうに、其貉相を確と睨付けたり。
聞きしにはあらず、現に此眼の見たりしなり、と渠は褒美の五十錢をはや匂はせり。現に見しと。誰ぞ誰ぞ、その對手は、と六右衛門は鼻息暴く拳を握りて、奴輩やれど

して進りける怒氣のやうく消ゆると見れば、困却せる氣色の著しく、顯來りぬ。渠は頂を低れて、良久打案じたりしが、元藏に向ひて、好奸はや行け。此後は猶も監督を怠るべからずと、身を翻して母家の方へ行かむとす。元藏は心殘れるやうに、其後に添ひ行くを、六右衛門は振向きて、何ぞ尙ほ言ふことあるかと問ひしが、直に頷きて、然なり忘れたり。今日の褒美を、爾は望むなるべしと、苦笑すれば、渠は續けさまに小腰を屈め、輕らかに頭を掻きて、もし御褒美の價値もあらば、と其得意なる作笑を放てり。約束通り褒美は遣るべし。今夜改めて來るべし。慙くて二人は別れけり。

六右衛門は道の遠きを取りて、故と畑を廻り、木間を潜り、十分に緩歩しつゝ、お禮に對する今後の手段を工夫せり。渠は庭に入りて、其内を一周し、復背戸に出で、頻に思凝しけれども、然るべき工夫も出でざりしより、竟に家に入りて、二階に上り、その夕暮まで前後左右思案して、漸く一計を得てしなり。

四十七 かの醫者様の噂は無きか

夜に入りて後六右衛門は竊に妻子を呼寄せて、元藏が密告の趣を物語り、之と與に彼手段を授けて、特に六之助に向ひては、又之をさへ爲損じなば、事は全く破れて、更に爲む術はあるまじきなり。爾も此度を一世一代の樹功と念ひて、適れ失るまじき予と嚴切に云聞かせ、手始として、まづお辰に其計の實行を命じたりき。

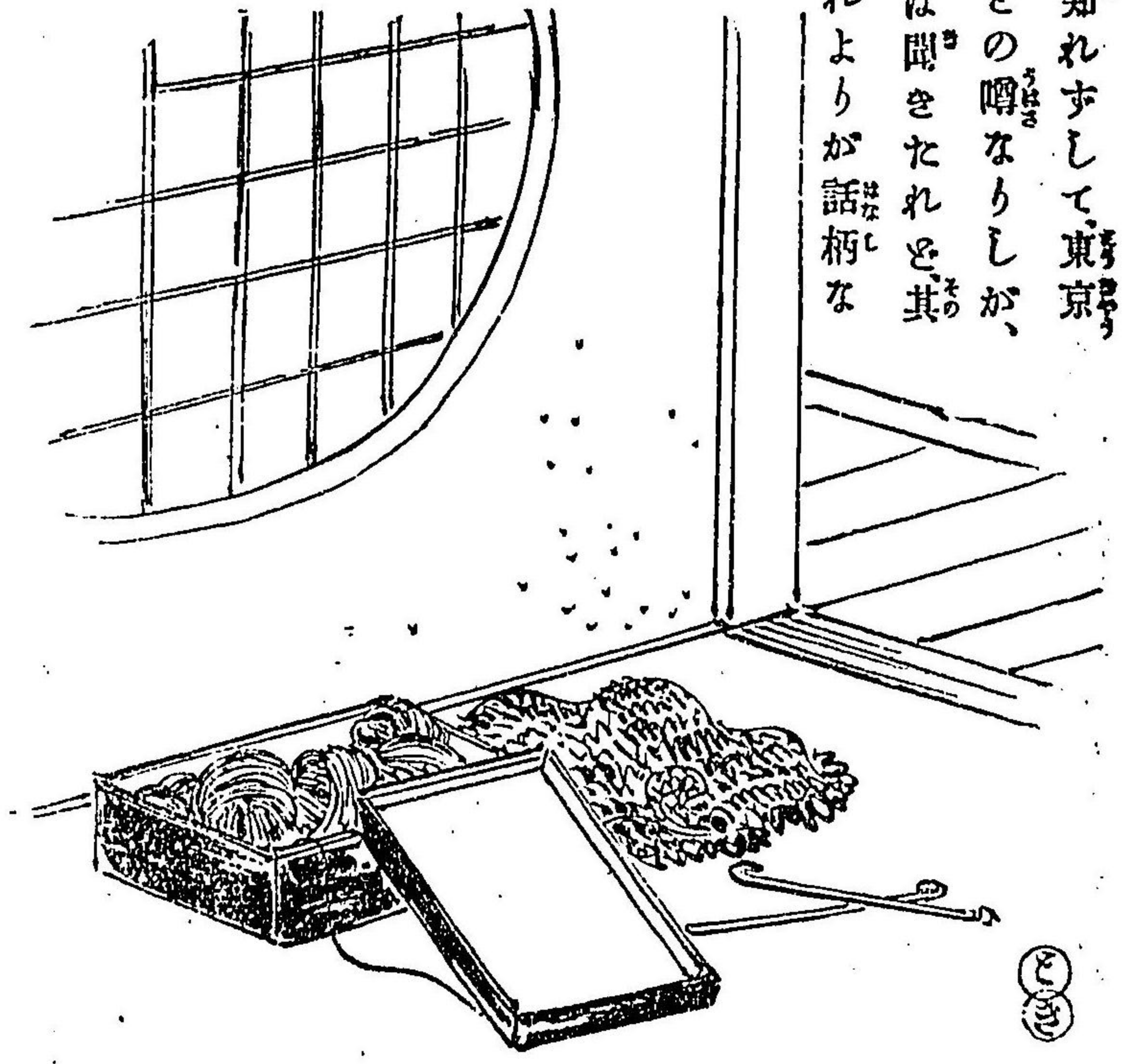
翌日の午後、後定兵衛の女房は訪來りぬ。然して用ありげにも見えざるは、茶話に來れるなるべし。お辰は例よりも歡びて迎へ、直に奥の四疊半に伴ひけるが、其處にはお禮が物靜に今朝より編物してゐたるなり。

やがて一句三句語ひし後、お辰は忽ち話頭を轉へて、さて其後かの醫者様の噂は無きかと言ふ。お禮とはつと思ひしが、曉られじと、猶俯して、鍼の選を忙うせり。

女房は薄き唇を翻して、身持悪き人物ほを始末に困るものはあらずかし。正直眞法の田舎者などは、思も寄らぬ事なれば、唯呆れ果つるばかりなるも、有理なり。それに就けても、油斷のならぬは、東京の人かな。我等は幾と愛相を盡したり、と然もく、面を皺むれば、さては又何か爲出したるか、とお辰も眉を蹙めたり。

何か爲出したるの段にはあらず。先頃の油屋の娘の一條は知りたまふならむ。其折

家出せしより久しく行方の知れずして東京の駿河臺とやらに匿れたりとの噂なりしが、と言ふをお辰は遮りて、其事は聞きたれど其後は如何せしにや。然ればそれよりが話柄なり。一昨日とやら不意に歸來りけるにぞ親達は驚くやら、喜ぶやら、今まで何處に如何にして在りけると責ければ、泣く泣く娘の白状せしと云ふを聞きしに、渠をば唆せしは正しく渡殿なりといふにあらすや。種々に嘯して家出を憑め、栗原なる慶安宿を頼みて、人知れず其處の奥の間に



に匿ひ、一週間に二度づゝ行きては泊込みて、二月が間思ふまゝの玩弄物にして樂みたりしを、彼醫者様の家に老たる婢のあるを知りたまはむかの炊婢のお町が嗅着け、荒神様の暴れたるやうに我鳴立て、喧嘩の欲は追炊の烟の如く、目口も開かれぬばかりに燦べられ、流石の渡殿も堪りかねて、無據當分栗原の方へは、まこと二三軒の病家がありながら、それをも棄て、足踏の稱はぬ身となり、慶安には宿錢の滞りたるを、如何にしても拂はざるより、主の婆は腹立ちて、彼娘をば親許に還せしなり。

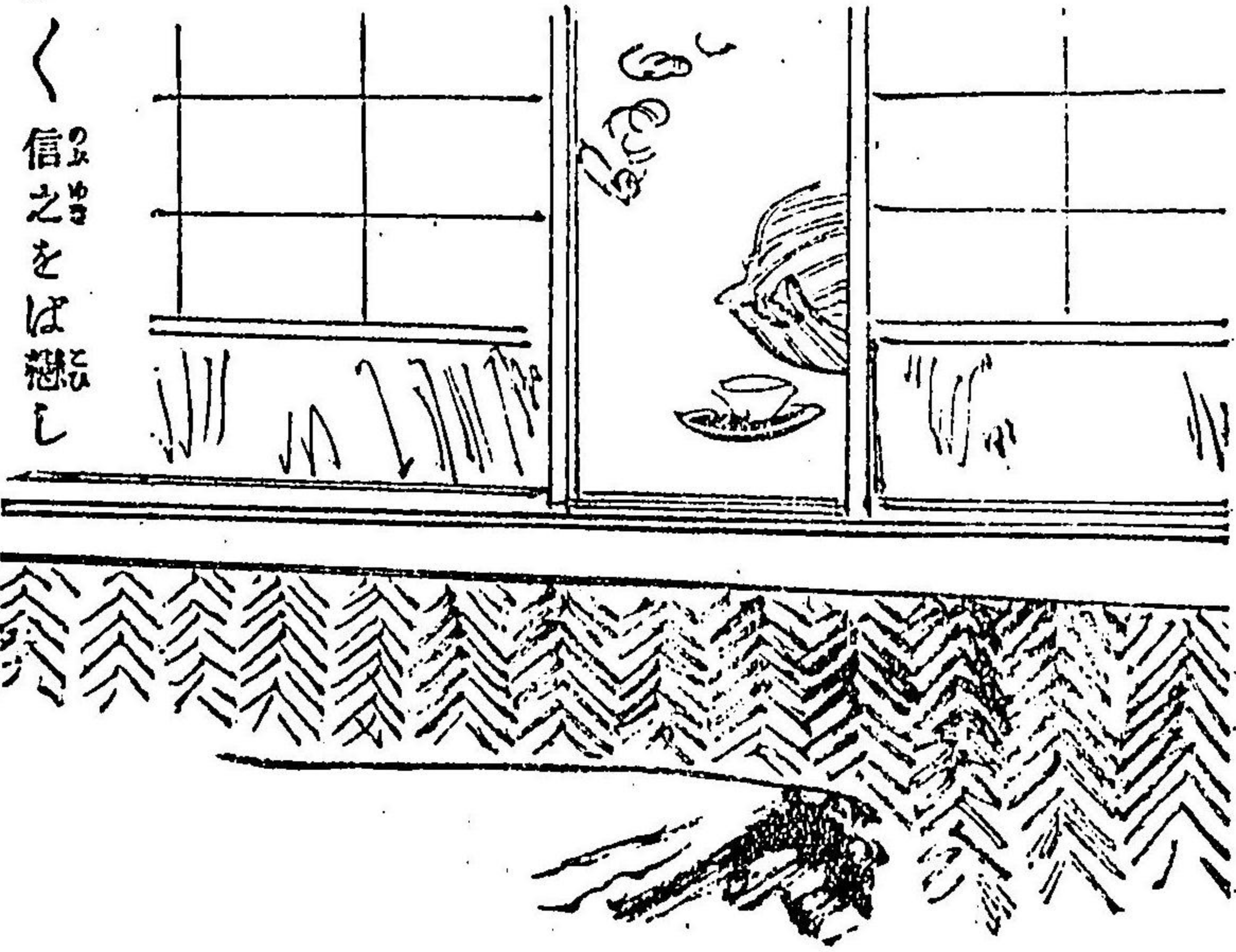
慙くと知りたる親達の立腹は一方ならず、裁判所へ持出して、此怨を辨さむとまで騒立てしを、間に人の入りて、大方は内濟にて納らむとの噂なり。お辰は聞訖りて、可恐しや、可恐しや、と慄く、眞似して密にお禮の様子を伺ひたり。

四十八 如何に泣き、如何に悲み……

女房の舌は下坂の車の如き勢にて、其物語を續けたり。尙又勝沼の替部の奥方の眉目好きをば聞きたまへるならむ。渡殿は彼奥方をさへ

口説落して今は怪しき中なりと云へば是も露はれむ時は定めて目覺しき大騒動の起るならむ。
 人非人人非人とお辰は獨り罵りて狼に傍へも寄られぬ人物かな。我は其人を名に
 は聞けども未だ見しことあらざるが御身は知らむ什麼なる人物ぞ。
 顔は優しく女子のやうにて打見は物堅く温厚なる好き男なりと定兵衛の女房は
 答へぬ。
 實に人は眉目より心なり。まして男子の身は容の好きを何にか爲べき。畢竟は身持
 の壞るゝ種なり。業平源氏のやうに美しくとも心腸の腐れたるは男の屑ならずや。
 況き世間には女を瞞して世渡る者のありと聞きしを今の今まで信とは思はざり
 しが現に有之もの哉とお辰は太く此物語に感じたる氣色なりけり。
 二人は猶も信之の私行に就きて聞苦しき事の種々を語合へり。傍に在りけるお禮
 の心は如何なりけむ。無邪氣なる女兒は一圖に之を眞に受けて始の程は我耳の隠
 れるにはあらずやと疑ひしがやうく涙は零れ身は震ひて編物の鍼の運も鈍り
 しなり。後にはるの厭はしき汚はしき物語を聞くに忍びずなりて竟に庭に出でた

渠は人無き所に如何に泣き如何に悲み、
 如何に耻ぢ如何に悔い如何に歎きけむ。
 果は此世に在るを憂しとの心も出づる
 までに失望したりけり。
 一時間ほども経てお禮は四疊半に歸來
 りぬ。定兵衛の妻とはや還りて在らず。お
 辰も此には居ざりけり。渠は何氣無く壁
 に懸けたる姿見の前に立ちたるが其顔
 は涙に汚れて色は梨の花のやうに蒼白
 めたるを見るより慙くては人に見尤め
 られむと再び庭に出て此念を紛らさむ
 とせり。然れどお禮の戀は此物語にて忽
 ち覺め果てしにはあらざるなり。今もなか



信之をば戀し

き人に思へるなり。渠の恚ばかり悲み苦むは、此不義不徳の人非人をば忘れむとし
て得忘れざるが爲なりき。渠は右にも左にも此戀を棄てざるべからず、恚る男を疎
まざるべからず。然れど無垢の心に彩りたる初恋は、輒く別去る能はざりしなり。恚
くてぞ此に在らむは、樂からず一日も早く舊の静女塾に復らむの心彌急になりけ
る。

渠は此日より沈鬱して、卒に病めるが如くなれり。六右衛門夫婦は之を見て、其計の
申りけるを、歡ぶこと限無く、始の程こそ有樂に忘れられ、然もあらめ。十日とは經た
ぬ間に、渠が心の発結の解けなむ後は、一も二も無く六之助に順はむと、手に取るや
うに言合へりけり。

四十九 渠は十分に信じたるなり

一日お辰は買物に行かむとて、進まぬお禮を強ひて同道しつ。二人は町に出で、ま
づ馴染の太物店に入りぬ。六右衛門は其奸策を行はむと、既に此にも手を廻したれ
ば、信之の不徳は店番せる女房の口よりも喋々しく説出されぬ。渠の語る所に據れ

ば、信之の不品行は決して今に始まりしにはあらで、村の娘どもの囁され弄まれし
は、實に六七人の多きに逢ふとなり。

此を出で、乾物屋に行けば、又同じき事の種々罵られけり。二人は猶行きて、小間物
を商へるお玉の店に憩ひぬ。此にては特に多く殊に詳く、又其噂なりき。

此二時間許のお禮の心の苦は、謂ふべき方もあらざりしなり。渠は可成り聞かざら
むやうに努めしかと、懐しき人の噂なりければ、自から耳にも入易く、其度々に消え
も入りたき想して、やうく歸去を急ぐ途にお辰は行違ひし一人の女兒を指して、
彼こそ渡といふ無頼の醫者に、勾引されし油屋のお政なりと、誨へられて、お禮は慌
しく振返りけるが、後に後姿を見たるのみにて、女兒は横町を曲りてけり。

恚くてお禮はもはやお辰の言を疑ふ心は、一點もあらずなりぬ。渠は十分に信之の
放埒無頼を信じたるなり。

其夜渠は六右衛門に向ひて、甲府の學校に復りたき由を懇々も言出でぬ。六右衛門
は案に相違して、何ゆゑなれば、切に然る事を言ふならむ。御身の齡にては、學校を出
で、嫁に適くこそ世間の例なるに、それは我より先草葉の蔭なる親御が、不得心な

るべし。我不肖ながら遺言ありて後見人に頼まれたるからは如何で御身の行末善からむやうにと計はで已むべきや。何の故に今年學校より引取りたりと思ふ。將身を定めむは何時なりと思ふ。然は雖も一も二も無く御身の願を斥けむとにあらねば、學校に復らで慥はぬ其理由をば聞かせずや。

其理由は、とお禮は少く塞りしが、妾は夫を有つことを頼く念ふゆゑに、難に復りて學問を修行し、單身心安う教師などして果てばやの志なりと答へぬ。愚なる事を言ふ人哉。さては此六右衛門御身が父御の墓に詣づべき面もあらず。親亡き後は其遺言を受けたる此老禿こそ御身の父とも母とも頼まるべきなれ。我とても亦他人とも思はぬ御身の爲に、悪かれとて何一つ計ひしこともあらずかし。親と思ひて我言を用ゐたまへ。年若き内は思慮淺く、分別も定らざれば、一圖の了簡に任せて過りたる事爲出し及ばぬ後に至りて悔ゆるも多かり。まづは心を鎮め、篤と思案せよ、と言を留めて六右衛門は出行きけり。

渠は篤と思案するほど、此家に留るべき心は無く、益甲府の學校へ往かむことを冀へり。やがて教師にならば、讀書習字の傍に、裁縫、插花、琴、茶湯の指南をもせばやな

と、唯其先の先のみを考へつ。

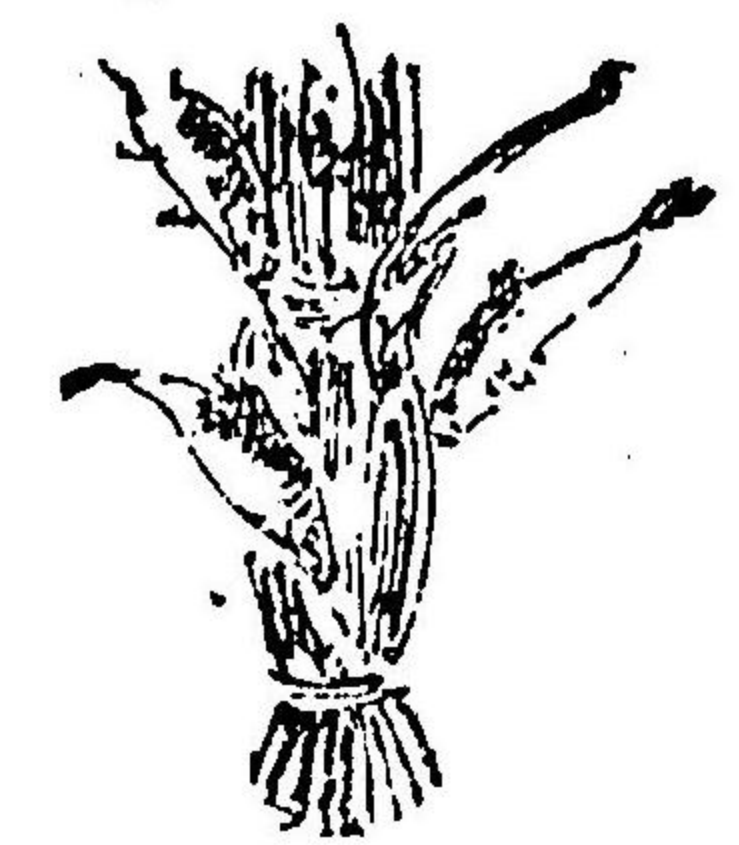
五十 證據なる哉 證據なる哉

定兵衛が茶店の奥には、村の壯者五六人寄集りて、いと賑しく、笑聲の外に轟くは、造酒屋の息子なる喜太郎が、手製の葡萄酒と新酒とを持來り、心合ひたる友に其味を誇らむとて、午後より此に小酌の筵を開きたるなり。

偶然來合せし六之助も、識る顔のみなりければ、團樂に入りて、今とはや衆も七分の酔を發したる頃なり。渠は東京に在りける折の物語して、頻に色事の手柄を陳べ、有るとあらゆる美き女は片端より手に入れけるやうに吹聴するを、一座舉りて不承知なる中に、喜太郎は日常渠に懐からざれば、その賦法螺の別けて、心憎さを肚に居ゑかねて、君の言はるゝ如く、君は東京にて色男の免許を取りたまひしか知らねども、そは君の手腕にあらずして、金力の御蔭と謂はざるべからず。金氣の戀は本戀にあらず、色事中の下の下なるものなり。試に狂言を見たまへ。金持風を吹せて、女子を靡かせむとするもの、曾て其志を遂げたる例無し。往々有るものは、皆其情夫に

盡せし實の紙餘を難有く頂戴させらるゝに過ぎざるなり。失禮ながら先生の戀も如斯きものならむのみ。それを證明せむとならば君が此村にての連戦連敗は如何。曾て一度も手柄を見せしこと無きにあらずや。安ぞ東京の色男が其故郷にてすかんの紋のイ菱なる理あり。小判の黄なる色男は我等の與みせざる所なり。と酒氣に乗じて憚も無く罵りたり。

六之助は空囁きて君の常に村中第一の美人と崇むるは誰ぞと一句定めて鬼膽をも破らむする面色なり。喜太郎は冷笑して答を爲さざりければ渠は盆意氣昂りて我は



金氣の色男か、下下の下の色事師か自ら知らず。然れども我は一村の羨望して措かざる花の如き美人を我物にしたる艶福を以て退

いて満足せむのみ、と其鼻頭に笑を湛へて渠を眼下に見つとも玻璃盃を引きて大嚼せり。

爾時喜太郎は故と天井を仰ぎて雷の如く笑ひ君が満足したまふ艶福とは君が家の御禮殿の事なるか。實にもお禮殿は村一番の美人なり。否郡中の第一否、甲州随一とも謂ふべきなり。もし彼人を手に入れれば甲州随一の艶福は論無きことなり。然れど恐らく君の福は此如く大ならざらむ。君にして此福を享けたらば、君は其果報に焼けて祝言の朝黒焦になりたまふべし。幸に君は此火難を免るべき相あり。謹んで賀すと再び大笑せり。

恠くと聞はより六之助は切齒をなしてさては君はお禮を我物にあらずと謂ふか、と眼を瞋して詰寄せたり。喜太郎は落付拂ひて我の獨り言のみならず村中に然思はぬ人は一人もあらざらむ。まこと君の物とならば何ぞ確なる證據を見せたまへ。證據證據！證據のあらぬ事は皆虚なり。名ありて實無き獨合點の艶福ならば、病癩も天人に惚れらるべし。證據なる哉、證據なる哉と六之助の眼前へ兩手を差付けて物なと受取らむとする軀を爲せり。

五十一 這は面白し面白し

言句も出でざりし六之助は今にも噓付むする勢にて唯眼を睜りて予るたりける。喜太郎は然も心地快げに腕廻して折々お禮殿の單身逍遙するは見しかども未だ嘗て君と陸しげに迷立ちしをば聞かざるなり。御自慢の我物ならば適には手をも引合ひて衆にも見せたまはずや。口頭而已の色男にては誰しも承知はせざるなり。と益賣立てられて六之助は屹と思案し然ばかり陸しき所を見たと思はば何時にても御覽に入れむ。明日とも謂はず今夜にてもと臆する色無く言放てり。這は面白しと喜太郎始め一座の壯者は席を進めて色男の正躰是非に拜まひと言ふものあれば我は上酒の六割一樽を賭けむと乗むは喜太郎なり。壯者は益興に入りて先生は何をか賭けたまふ。我等五人こそ證人なれと懲酒つれば渠は各位に夕飯を振舞はむと誓ひて然らば今宵川に浴へる葡萄園の奥なる夢見谷の邊を、我はお禮の手を携へて行くべし。それより二人して何處へ行くべきか君等は知る能はざらむ。もし此言に相違あらば六人に散財すべき覺悟なりと居長高になれば喜

太郎も後へは退かず然あらむには我は六割一樽を吞まざるべし。



這は彌面白しと壯者は手を拍ちて唯立てぬ。然らば入時の鐘の前後に君等は彼處へ行くことを忘れたまふな。今宵は月有れば君等は忝なくも色男の正躰を拜むを得むと六之助は大缸の横はる如

く氣を吐きたり。
 いづれも諾して漸く談の冷却せる頃渠は先獨此席を起ちぬ。喜太郎は渠の揚々と
 出行くを見送り心には染まねど我等は明日は彼奴の馳走に預らざるを得ざるな
 り。然れど其口を嗽はむ爲めに畢竟は我も一樽の損を爲ざるべからずと言へば壯
 者の一人は打笑ひて我等は孰へ頼けても飯か酒かに有付くべし。今宵の八時こそ
 天下の分目なれと言ふを天下にあらず酒と飯との分目なりと又一人が興じてい
 づれも面白し面白しと茲に盃を飲めて一同は家路に就きぬ。
 櫻に茶店を出でし六之助は我家には還らで直に渡守の源三が宿を訪れつ。渠は在
 らで、お朝のみ獨り濼槽下に夕餉の膳碗を洗ひてゐたりしが六之助の入來るを見
 るより忙々しく出迎へて下にも措かず款待たむと蒼皇家の内を駈廻るを管ふな
 管ふなど六之助は領主の殿が其民に言を賜ふやうなる勿躰にて渠の健々しく動
 くを眺めたりしがやがて用ありげにお朝と呼懸け渠の忽ち下座に臨るを待ちて
 今日母の其方に遣らむとて買來りたる物あれば此より我と與に來るべし。源三が
 留守にても差支はあらざるべしと言ふ。

れ朝は唯々として渠と與に門を出でぬ。時に川水は纒に白く夕暮は四面に薄りて、
 山も林も一様に黒みわたれり。

五十二 その色その綱その模様まで

愆くて二人は貝塚の裏口より奥まりたる一間に入りぬ。其床の間に崩黃の四布風
 呂敷に褰みたるは女物の裕と縹袴と帯の三品なり。
 是は、ど六之助は指しつ。我婚禮の賀に母より其方への寄贈なり。さぞ似合はむと思
 へば、假に着て見よと手づから取下して燈の前に披ぐれば、お朝は怡悦に轟く胸を
 鎮めつゝ左さま右さまに見惚れたり。
 此衣類こそ例の奸策に用ゐる爲に昨日栗原より購來りたるものにて其色其綱其
 模様までお禮の常に着たるに能くも類たるなりけれ。
 言はるゝまゝにお朝はおのれのを脱ぎて此縮緬の襟を掛けたる縹袴に糸織の袴
 を着て、島縹子と友禪縮緬の晝夜帯を結めたる姿は我ながら見違ふばかり美しき
 に驚きて遣ちたりし資を拾へる如き顔して立てり。六之助は手を拍ちて愆くまで

似合ふべしとは思懸けざりしを、母の見ば定めて喜ぶことならむ。生憎今日は杉戸まで行きて未だ還らざれば、之を得見せぬ口惜さよと言訖りて、又有間打眺めて、その亂れたる髪を撫付けよ。帯は太鼓に結改すべし。善善今は誰か平生のお朝と見るものあらむや。

羞しくもあり嬉しさは又一層に氣色ばみて、お朝は立ちつ居つ山鳥の水に影を見るらむ風情にて、姑は自ら他も忘れて、此の絳綵と鳴る裕と腰の邊の融くるばかりなる帯とに心を奪はれておたりけり。

意に稱ひたるか、と六之助は微笑みぬ。お朝の言ふべき語を知らざるまでの歡喜は、其面上にぞ顯れたる。徳ばかり似合ひたるものを、何の事無く脱がせむも惜しければ、母にも家内の者にも内證にて、近邊まで戸外へ出で、見すや、と六之助は言ひぬ。お朝は俯して、もし御袋様に知れなば、と唯其のみを氣遣ふを、知れては可からねど、少時の間なれば、と聞くほど、渠は此の姿を村人に見られ、且は源三に見せむことを、矢も楯も耐らず冀へるなり。

然らば、とお朝とはや起ちかけぬ。餘り往來ある處は、噂の種にならむも煩ければ、四

辻の火見の邊より夢見谷に出で、川岸をば行かむと、六之助は再びお朝を連れて、裏口より忍びて出でけり。

推並びて二人の行く状は、宛然戀人の手を取合ひて、陸しう語るやうなり。然れど渠等は一言を交ふるにもあらで、菰荷園に沿へる徑を辿りて、緩に町に出づれば、又町を出で、竟に約したる夢見谷の此方に來りぬ。

六之助は、や彼奴等の見らむと想へば、盡きせぬ話に道の惜まるゝ如く、故と歩を緩めつゝ、用無きに物言ひかけて、益々朝に寄添ひたり。

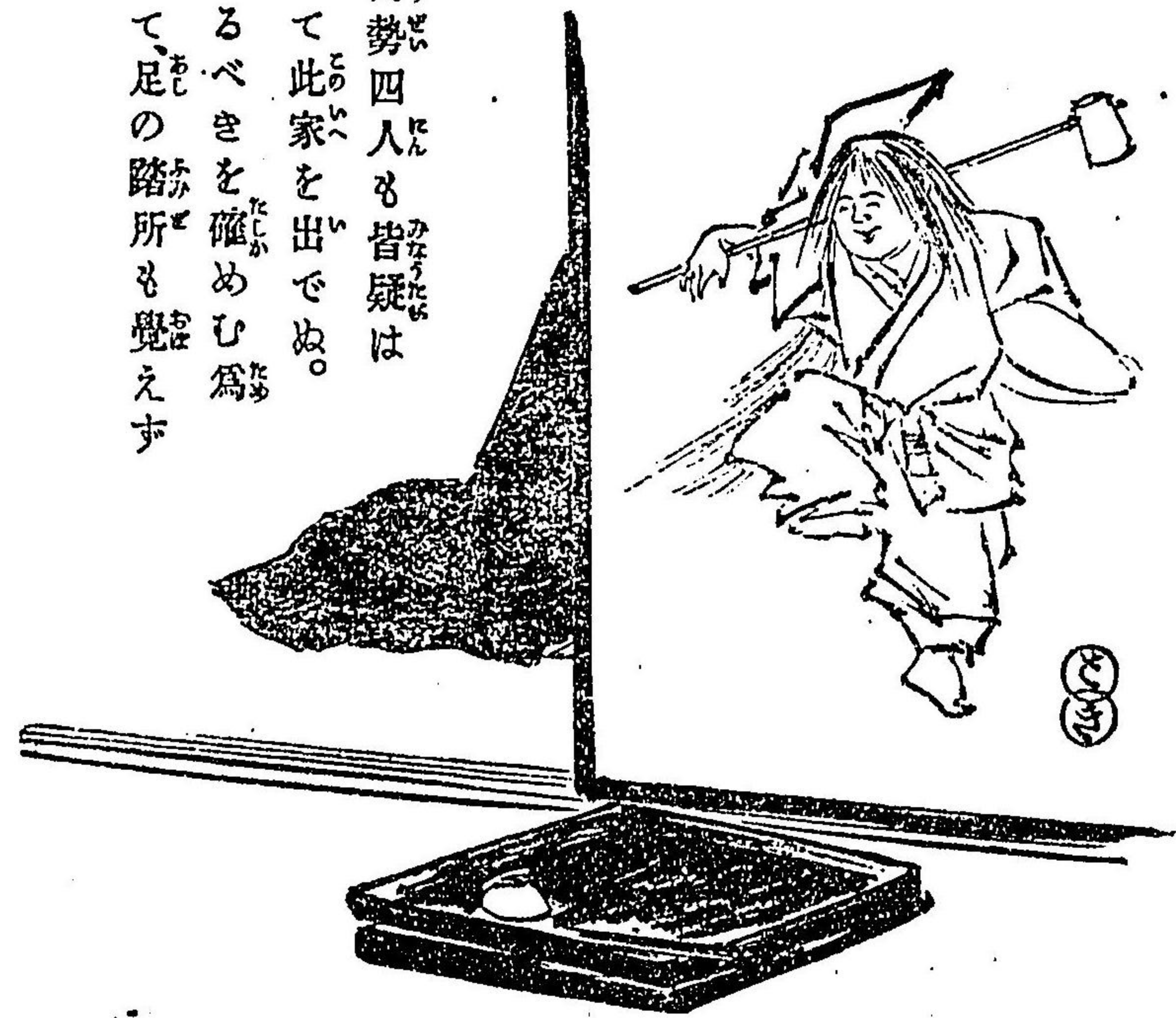
五十三 我見しまゝに語りけり

彼方の木陰に待受けたる壯者等は、之を見るより慌驚ぎて、其女をば正しくお禮と想へるなりけり。特に不審に堪へざりし喜太郎さへ、替玉ならむとは思懸けざりければ、此噂は忽ち掃りて、信之の耳をも驚かせり。

渠は腹立たしくも、妬ましくも、限無く思亂れつゝ、虚妄なり、虚妄なり、と獨願きぬ。然れども、告ぐる者は、現に見しと云ふ人の名をさへ數へけるに、おのれの親しうせる

造酒家の喜太郎も其内に在りけるなり。信之は渠の常に貝塚に懐からざるを知れ、ば其疑は益深く、此上は實否を糺さむとて、時を移さず喜太郎の家を訪れたり。今日來りたるは、異しき風説の類なるを御身に訊ねむと思ひて、言ひも訖らざるに、喜太郎は早合點して、愚味なる田舎者の妄語は、先生の名譽を傷くるに足ざるなり。必ず心を勞はしたまふべからずと言ふ。うの風説と云ふは、我身に關したる事ならず、他の身の上なりと聞き、渠は其意を得ざる面色にて控へたり。然こそと思へば、信之はいと、語に出しかねたりしが、今更言はせ、己むべきにあらざれば、かの貝塚に養はるゝお禮とやら云ふ女郎に就きて、と打出しけるに、喜太郎は愈其意を料りかねて、信之の顔を打目成りけるが、先生は彼女郎をば、職りたまふか。又如何なれば、渠が身上の事を心に懸けては、訊ねたまふぞと問られて、今は愁に寒むべき所ならずと分別して、信之は竟に渠との間を打明けたり。喜太郎の吃驚は實に天地も覆りたるばかりなりき。羞しさを打忘れて、渠が一筋に問ひかくる夢見谷の一條をば、有繫に氣毒とは思ひつゝも、喜太郎は我見しまゝに語りけるに、信之の面は見る

變りて、そは果して信なるか。御身は實に渠の聲をも聞き、渠の顔をも見たりしか、と口の吃するまでに激したり。顔は見ず、聲は聞かざりしが、月明にて其姿をば、紛ふ方無く見たりしなり。お禮殿にあらすとせば、誰か此村に然るべき美人のあらむや。年紀と云ひ、體度と云ひ、正しくお禮殿と見たるは、我のみならず、同勢四人も皆疑はざるを、と聞くほど、信之は彌心亂れて、此家を出でぬ。渠の此に訪れしは、畢竟事の虛妄なるべきを確めむ爲なりしを、却りて満腔の苦惱を懐きて、足の踏所も覺えず歸來れり。



然れを左にも右にも今一度お禮に會ひて親しく其事を糺さむと思ひぬ。さて如何にしてか渠に會はむ。その他出を候はむか。かの裏門にて首尾を待たむか。外に便もあらざればと、渠は其半日を、貝塚家の周圍、笛吹川の堤さては草深き徑の彼方此方に暮しければ、遂にその形をだに見ざりけり。

五十四 はや程も無き社までと

その翌日より三日間は鎮守の祭なり。

穀物の收穫も終り、葡萄の培養も大方果てければ、村人は此祭日を一年中の骨休も遊び時とも、酒飲む日とも、樂の窮無き好時節に念へるなり。

神樂囃子は曉天の雲に響きて、二旗の大旗は微黒き森の樹に閃き、芝居見世物飲食店の小屋は此に一村を成して、夙より繁昌を極め、樽天王を昇廻る子等の叫喚、山車を曳行く牛の長吟は、遠近に聞えて、人は騒ぎ家は賑ひ、町は軒提灯に飾られ、野は配き顔に填められたり。

村の四辻に養蠶を業とせる豪農の門には紫の幕を打廻して、神壇を飾り、酒饌を供

じたる廣前に
菘被の鏡を抜
きて、壯者の誰彼を問はず飲
むに任せ、騒ぐに任すを家例



とせるがゆゑに、大勢集りて思ふまゝに打興じたり。
 唐茄子冠したる一箇の男は、酔を醒さむとて往來を眺めたりしが、來たり來たりと
 卒に叫びて、一同の注意を促せり。何事とも知らざれども、渠等は拳を握め、盃を舍き
 て指されし方を見遣りぬ。
 來れるは村中一等の美人なり。渠等は片唾を嘔みてお禮の近くを待受けたり。
 渠は途上人に顔を覗かるゝ厭はしさに、引返さむと思ひしかども、はや程も無き社ま
 でと、やうく此まで來りけるに、又衆の群りたるを心苦く、足疾に過ぎむとせしに、
 渠等は一齊に家も崩れむばかりの聲を揚げて、貝塚先生の奥方萬歳と囃せり。お禮
 は駭きて駈出せば、矢庭に三人ばかり飛出して、ばらくと逐來り、先夜は御樂と肩
 を拊つものあり。之を避くれば、醫者機殺と言ひつゝ、熱柿の如き面を差出すもあり。
 前に立塞りて、今日は御單身か、と手を握らむとするもあり。お禮は辛くも身を躲し
 て脱れけるが、何故とも此嘲弄の意を解する能はざりしなり。唯無法なる醉漢の可
 恐さに慌忙しく參詣を了りて、此度は向の路を取らず、裏道傳ひに來りけるに、又も
 や五六人の壯者の徑より出來るに會へり。

一箇は忽ち聲を懸けて、嬢様今日は何故に先生と同道は爲たまはざる。お禮は此腹
 立たしき職言を云し男を窺に見遣りて、駈脱けむとすれば、他の一箇は二三間ばか
 りも逐ひかけつゝ、然ばかり男を懼れたまふ御身にはあらざらむ。戀人を二人まで
 も有ちたまへる人には似氣なからずや。少時留りて、我等に一杯の酌を恵みたまへ
 と呼はりぬ。お禮は一散に走りて、やうく虎口を脱れ、人無き所に立ちて後を見返
 りつゝ、不覺に流るゝ無念の涙を拭ひて、何故なれば村人は妾を六之助殿の妻と謂
 ひ、又戀人を二人有てるとは謂ふならむ。妾は何の過ありて、慙く人々に侮り辱めら
 るゝならむ。
 思ひてもく、渠は此意を知る能はざりき。然れども猶種々に思廻しつゝ、人氣のあ
 らぬ徑を擇びて、悄々家路を辿りけり。

五十五 唯一呼吸に打べたりけり

唯有る角にて、渠は又復男に會へり。例の可恐に能くも見ずして、行違はむとすれば、
 男は緊と袂を捉へて、お禮殿と寄添ひぬ。

お禮は驚きつゝ面を擧ぐれば其人は渡信之なり。好き所にて會ひたる哉。御身に會はむ會はむとて昨日より我は幾許心を費したりと思ひたまふぞと猶寄添ふを衝退けて否否妾は最早御身と言も交すまじきなり。御身は妾を欺きたまへり。妾は然りとも知らず只管御身をばと急來る涙に吭塞りて恨めしげに男の面を目成りたりしが何思ひけむ衝と身を離して走りぬ。

信之は不意を撃たれて爲むやうを忘れたりしが六七間後れて遂に逐蒐けたり。お禮は若者の手を脱れたりしよりも猶一心不亂に走れり。信之は間近になれる時生憎前途に一群の人影を認めければ口惜しながら踵を回らしけり。

お禮は悲しく情無く味氣無く將又謂ふ可からざる思に惱されつゝ我家に近く來りけるに背後より嬢様と呼ぶ聲を聞けり。

例の嘲弄と思へば足を疾めて顧盼もせざりしに其聲は益近きて女子の呼ぶやうなるに渠は竟に振返りぬ。

老婢のかためは息喘き駆寄りて嬢様は情無き御方かな。あれほど呼びしに聞えぬ風して逃げたまふは何故ぞと端無もお禮の臉の紅く腫れたるを見付けて泣き給

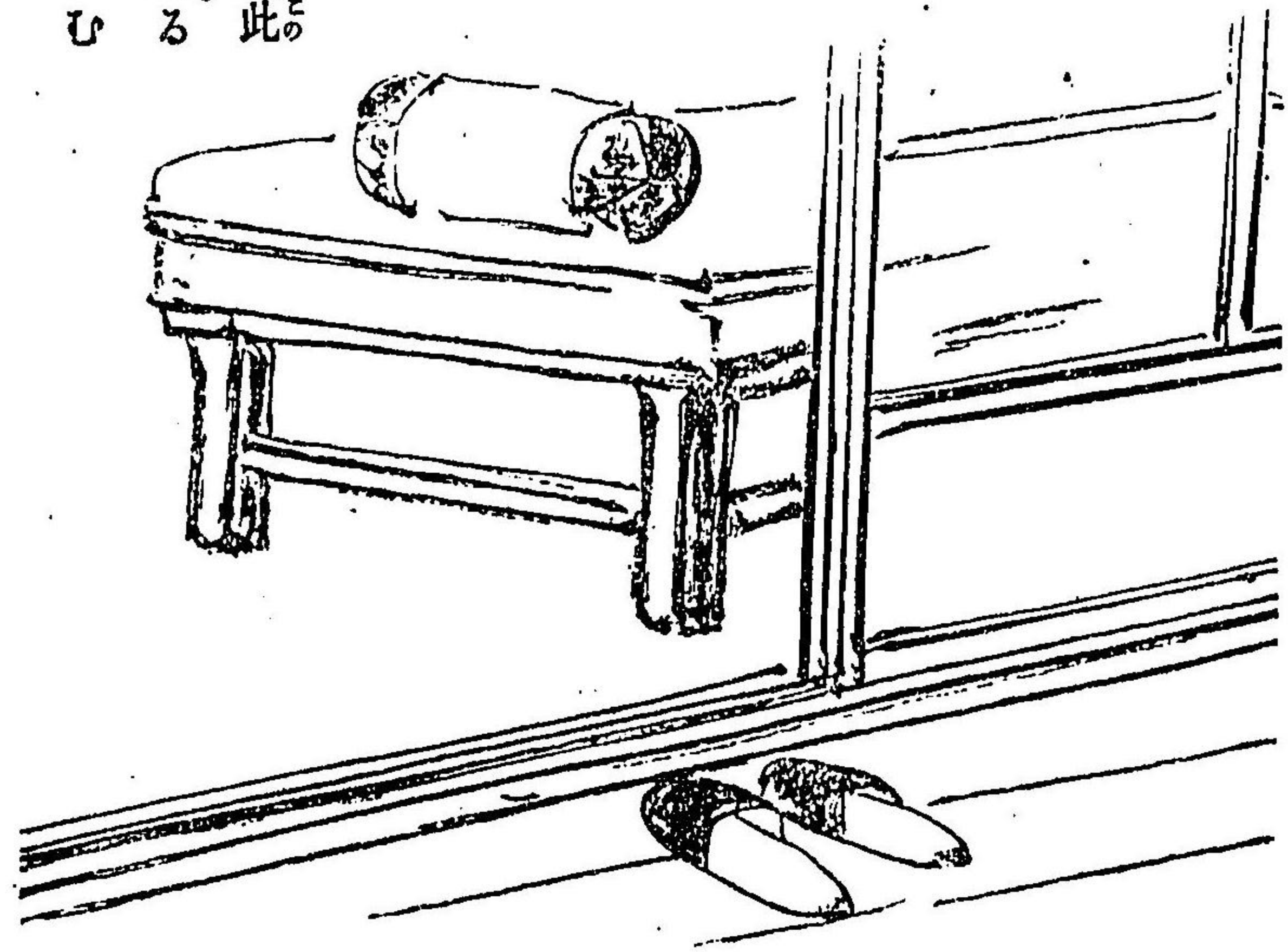
ひしか。何をか泣き給ひしと問へど顔を掩ひて應へざるを益怪みて問詰められお禮は竟に其太く辱められし始末を語りぬ。然れを御身は先の夜若旦那様と夢見谷へ行き給ひしにあらすやとお爲の訝ればお禮は呆れて夢にも知らぬ事と言へど渠は頭を掉りて現に村人の見しといふものあるを奈何にせむ。而のみならず御身は慙く若旦那様に身を許しなから又一方には渡様とも怪しき約束ありと知らぬ者はあらざるまでに高き噂のあるものをと唯一呼吸に打べたりけり。慙くと聴きたるお禮は目眩くばかり驚きて脚下深く身の沈行くかと思へり。

我心の内と我身の事は神や佛の知りたまふべし。如何なる噂のありとも覺あらぬ事は覺有らざるなりと又更に涙に晦れつゝ家に歸りぬ。

渠は室に入りて有間は茫然としておたりしが心の激せしも漸く静り行くほどに我噂の悪様に傳へらるゝは誰が爲し業ならむと思ひつゝ嫌はしき六之助の妻なりと衆人に思はるゝ悔しさを慙しは渾身の寒く慄くばかりなりしが渠は六之助を捉へて此事を糺さむと遂に起ちて其室を覗ひぬ。

五十六 もはや御身は我妻なり
 其處には在らで、渠は診察所の寢臺に横はりて新聞を讀みてゐたりしが、我を呼ぶ
 聲の嬉しさに、蹶起きて見れば、お禮の面上には憤怒の色の凄しく顯れたり。
 御身に聞かねばならぬ事ありと、渠の聲は絶々なるまでに、慄けり。村には息はしき
 噂の播まらて、妾は爲に聞ふばかり無き耻辱を受けたり。村人は皆妾をば御身の妻
 なりと云ふにあらすや。先の夜妾は御身に伴れられて、夢見谷へ行きしと云ふにあ
 らすや。慙く根も無き事を言觸せしは何人ならむ、定めて御身は知りたまふべし。恐
 らく御身ならでは知らざらむ。聞かせたまへ、疾く聞かせたまはずやと、息巻きぬ。
 我にはあらぬものを、と六之助の當惑するを見るより、お禮は益苛立ちて、我にはあ
 らずと、御身は言ひたまふか。其始御身の口より吹聴せしとは、確に定兵衛より聞き
 たりと知りたまはずや。妾は御身の妻と何日許せしぞ。御身と連立らて何日夜行は
 せしぞと、四邊を憚らす泣聲になりて、責立つれば、六之助は狼狽へて、まづ靜にした
 まへ。何事も皆御身を思ふより爲せし業なれば、その始末、我言ふ所を聴きたまへ、と
 言はせも果てず、お禮は赫と急上げて、御身は妾に無き名を負はせて、妾を辱めて、な

ほ妾を思ふと言ひたまふか、と渠は其血
 の燃ゆるばかりに怒を増せり。
 我は御身を思ひ、御身を妻にせむと思へ
 ばこそ、慙る計をも行ひしなれ。此眞意を
 御身は知らざるべし。さては腹立ちたま
 ふも有理ながら、我は御身を妻にせむと
 て、幾許心を費したりと想ひたまふぞ。此
 意を酌みて、今は其愠を解きたまへかし。
 村にてははや誰も御身と我の間を知ら
 ざるものあらす。御身が心を通はず、渡信
 之も、と言未して、渠はお禮の面を窺ひつ。
 渠も御身の我妻になりたるを聞きてより、此
 頃は會ふ人毎に口を極めて御身の事を罵る
 由なれば、御身は左にも右にも我妻にならむ



外に御身の立つべき地はあらざるなり。
 お禮は餘の事に言句も出ざりしが渠の言に因りて信之が不徳の風説も或は其身に同じき捏造にあらずやと思付きければ今思へば人の言ひしに違はず渡様に悪名負はせしも皆御身が計にてありけるよと嘲つが如く故と言へば六之助は片笑みて然なり然なり。我等の心を費せしは實に其にても知らるべしと何の苦も無く言放ちぬ。
 お禮は骨身に透る恨に堪へかねて今は言も出でず容も動かす唯益蒼になりて打慄く身を我と抱緊めて支へたり。とも知らぬ六之助はもはや御身は我妻なりと寄るを拂ひてお禮は走出でけり。

五十七 妻にせむの意なりしかと

信之は彼風説を確めむと一日半を費して漸くお禮に會ふを得たりしかば嬉しやと思ひし効も無くふのれを見るより早く遁去りしは噂に違はず變心したるなりと腸も斷るゝばかりに思亂れ家に歸るも夢路を辿りて書齋に入ると伴しく横に

仆れて有間は幾と性体をも失ひけるなり。

纏て入來れるお助は寝たると思ひて呼起し渡守の源三が是非に會ひたきとて來れる由を取次ぎぬ。

信之は徐身を起して待つ間程無く渠はお助に導かれて恐懼入來りしが信之を見て疊に傾伏し何とも相濟まぬ事を爲出來したり。唯先生の御心の寛大何卒此罪を免したまへど泣かぬばかりに詫入りたり。唯呆れたる信之は語を和げて其仔細を質せり。

源三は我妻の道具に役はるゝとは知らず六之助に欺かれお禮に似たる衣服を着せられて渠と與に夢見谷の月に歩みし其夜の事をば具に抒べつ。

此の物語をして今一日早く聞くを得せしめたらむには信之は如何に歡びたりけむ。然れど今はその戀も壞れて渠は物言ひしも答へられず寄添ひしをも逃げられてお禮の心は全く他人になりたるなり。

信之の心にはや一點の希望もあらずなりぬ。さては此村に住むべき念もあらざれば戀人の無罪を告ぐる物語をもなかく口惜く聞きしなり。

渠は臆て源三に向ひて御身は何と思ひて、お禮殿の事をば我に告げむとて故々来りけるぞ、と訝しげに渠の面を見遣りぬ。源三は稍困じたる躰なりしが、先生は彼人をば奥様にせむとの御意にはあらずやと辛くも言出せり。

爾時信之は苦々しげに領きて村人よりや聞きつらむ。實に其言の如く妻にせむとの意なりしかを、昨日より其契も破れて今は他人とならざるべからざるなり。

自言ひて自萎れつゝ、信之は獨り思案に暮れたり。源三も次手惡さに別を告げて起ちぬ。渠は益思に沈みて、一度は無上の樂境なりし此の岩崎村も忽ち煩惱苦痛の魔坑となりて、心は裂かれ身は焚かるゝばかりの苛責に堪へざれば去るべし去らざるべからずと決心して、左右は内海を訪れむと、速に服を更めて門口に出づれば、前なる丘を傳ひて、彼方より駈來る童あり。

信之を見るより疾風の如く飛して一文字に下來り、渠の前に立ちて恭しく禮を施し、内懷より小さき一通の文を出して渡さむとせり。

何方よりぞ、と信之は疑を撚りて、渠の手なる文の表書を視たり。

五十八

親戚會議といふは？

密に之を先生に届けよ、と貝塚様のお爲殿より托まれたりと、童は件の狀を無理強に手渡して走りぬ。

信之は熱と表書の手跡を視て、其人よりと知りければ直に家に入りて封を開きつ。首には今朝の情無かりしを殿々詫びて、全く六之助等の計に乗せられし始末を精細に記し、又あのれの事を悪さまに御身の耳に入れたるも同じく渠等の計なれば互に疑を釋きて、今より後は舊に倍して我は御身を思ふべければ、御身も我を捨て給はざらむやうと、哀に語を盡して、末文には、此恐ろしき後見人の束縛に堪へざれば、一日も早く此方の關係を絶ちて、御身の許へ引取られむやう、唯速に計ひたまへかしと書きたり。

信之は眉をも焦るゝやうに心慌て、即別勝沼へ車を飛ばしぬ。渠は分署長に會ひて、後見者なる法律上の權利義務を問ひ併せて之に對する處置を相談せむと思ひてなり。

勝沼に着きたるは日晡なりき。渠は分署長を見るより、御身は無二の親友と頼まる

人の一大困難を救ひたまふを否まざるべしと前
 招して在りし次第を打明けしに、渠は長
 き物語を聴訖りて、且は怪み、且は駭き頓
 に言は出でざるを、如何にすべきと信之
 は膝を前めて迫りけり。
 分署長は有繫に困じて、這は極めて難き
 事なり。かの六右衛門なる老禿は一條繩
 にては稱はぬ奸徒なり。倍して彼奴が全力を擧げて着手したる仕
 事なれば尋常の手段にては及び難し。右左は裁判沙汰に爲ざるべ
 からずと首を傾けて打案じぬ。
 裁判沙汰にせば果してその憐むべき孤兒を救ふを得べきか、と信
 之は問ひぬ。唯と保証は難爲けれど、其筋に知人もあれば萬事問合
 せて首尾を計ふべしと分署長は猶沈吟せるなり。
 信之は獨急立ちて、法律上後見者の権利といふは凡そ如何なるも



ものなるや。恰も父が其子に對する如きものなりと言ひたまふか。然らば丁年に達
 せざる少女はその後見者の許諾を得ざれば如何なる事をも爲す能はざるか。
 然れども親戚會議といふものありて、後見者に不都合ありと認むる時は何時にて
 もその委任を解くを得べし。
 親戚會議といふは？
 二名以上の親戚より成立つものなり。若親戚のあらざれば友人の中より選ぶを得
 べし。
 その會議無くしては、到底後見者の委任を解くべからざるか。
 斷じて能はずと分署長は頭を掉りぬ。
 五十九 大騙兒は何處に在る
 恚くて談は夜の闌くるまで盡きざりしかば、信之は竟に一泊して、殘る方無く手筈
 を定めて還りけるが、實に此夜なりきお禮は貝塚の家を忍び出で、渡が門を叩き、
 お町の優しき介抱を受けて、其留守宅に一夜を明せしなり。

朝になりて六右衛門が家内は上を下へと騒擾しつゝ、八方に手配してお禮の行方を索めたり。六右衛門は確に其と睨みければ例の股肱と頼める輩に内意を含めて、信之が家の四方を圍ませ絶えず様子を候はしめたり。

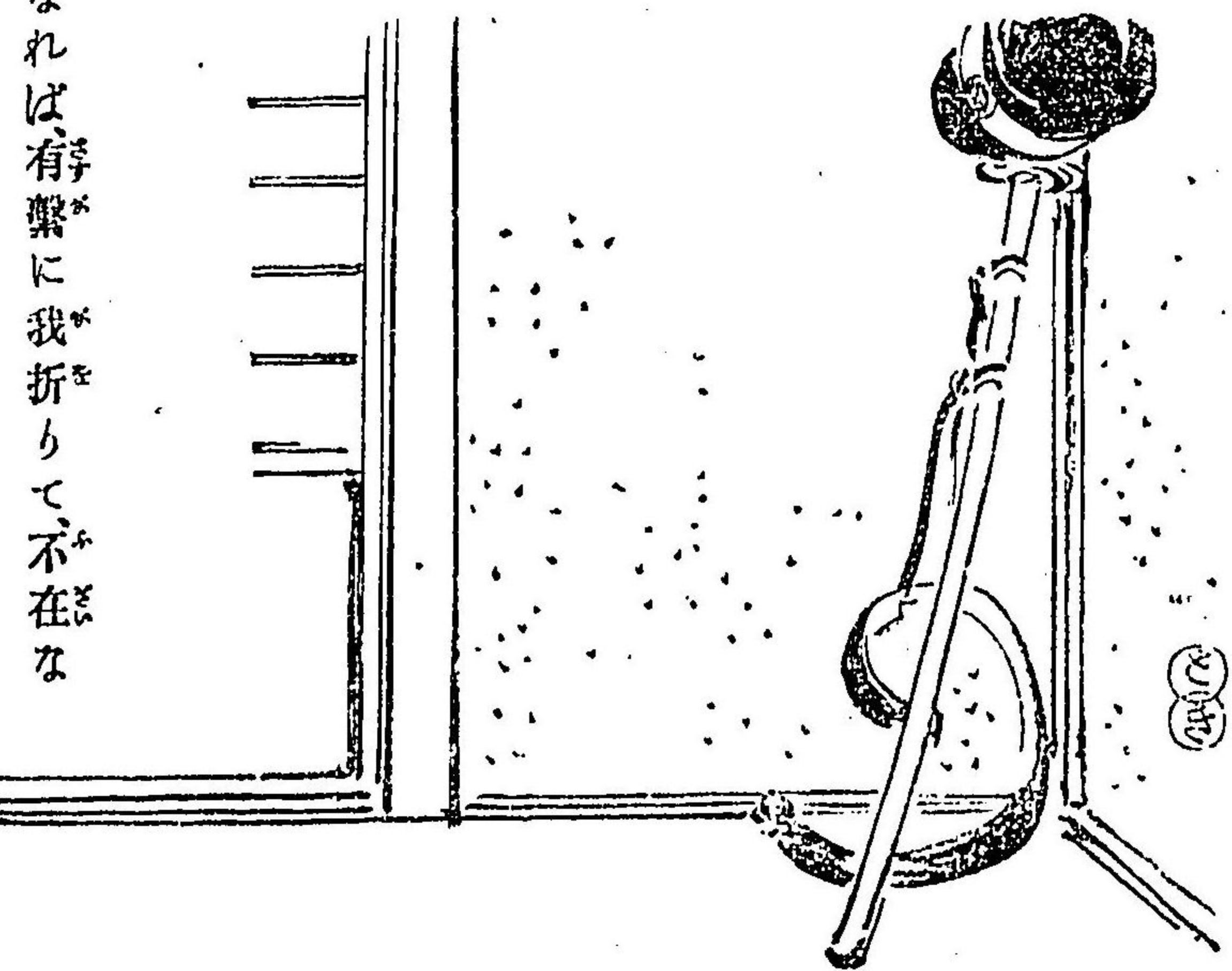
愆くとは知らず歸來にける信之は我書齋の内にお禮の在るに驚き段々仔細を聴きて緩に心を安むしけれと、途上謀者と覺しきもの、徘徊するを見れば油断はならずとて更にお禮を奥まりたる一間に匿ひ分署長との物語の摸様を説聞かせ、主従心を盡して劬りけり。

午後三時を過ぐれどもお禮の踪蹟は未審かならずとの注進に六右衛門は業を拂して信之の方に相違あるべきやう無ければはやく證據を見出し、四の五の言はせず亂入して家捜せよと阿修羅王の如く暴れて自ら撃つて出でひと息巻く折から、門外遽に騒がしく六之助殿に會はむ大騙兒は何處に在ると聲々に罵りぬ。

取次に出でし初は色を變へて奥に駆來り酒造家の喜太郎を先に立て、村の若者五人玄關に立塞り、若旦那様に會はひとて喧嘩仕懸にて來れるやうなりと聞くと仰しく然らぬだに苛立ちたる六右衛門は廻廳の如く座を起ちて玄關に懸るゝよ

り早く六之助に何用あるやと大喝せり。

喜太郎は冷笑ひて六右衛門が悴の大騙兒に言草ありて來りたり。いで彼奴を此に曳出せと詰寄すれば六右衛門が大音聲は落雷の如く黙らぬか二才めが貝塚六右衛門とも謂はるゝ大々盡の若旦那に騙兒はあらざるや。亂心したるか吃醉ひたるか面洗ひて來るべしと身を顛はして腹立てば、壯者の一人は忽ち進出で、渠が六割一樽の賭に源三が女房をお禮に仕立て、たのれ等を欺きければ、此事に就きて一同六之助に言分ある旨を告げたり。



強情我慢の六右衛門も心に覺えある事なれば有繋に我折りて不在な

りと詐り、辛くも此場を這れむとせしに不在とあらば歸宅のほを此にて待たむと、各式臺に腰懸けて、動くべくも見えざりけるを、明日の九時頃には必ず會はずべければ、今日は順しう還りたまへど、漸く宥めて引取らせつ。さて其夜の内に渠は栗原なる知邊の許へ六之助をば走らせけり。

六十

卒に熱を得たりとて

此翌日六右衛門は不意に役場の召喚を受けたり。此實に渠が後見の委任を解くべく、春日の親戚が連署して届出でたるに因るなりけり。然れども、渠は断じて此要求を容れざりければ、親戚等は已むを得ず、此上は法廷に争はむとて引取りぬ。六右衛門は飽くまで志を枉げじと覺悟して、家に還ると齊しく、今日の始末をお辰にも語り、惶忙しく裏口を出でたりしは、笛吹川の葦間を分けて、小舟の中に工夫を運らさむとてなり。彼方にも用意をさく、解無く速に訴訟の手續を経たりければ、六右衛門は竟に栗原の裁判所に喚出されつ。渠の剛愎も、渠の抗辯も、渠の覺悟も、條理の爲には挫かれ

て固より金輪際まで不服ながら、其後見を解かざるべからざる申告を受くるに至れり。泣喚きてお辰が此失敗を悔ひ、傍に六右衛門の面は暗ふべからざる苦痛の色を顯して、打萎れておたりけるが、卒に熱を得たりとて、晝より臥戸に入りて苦み悶へけり。

一昨日よりの大雨はいとゞしく降沃ぎ、道は黒き浪を揚げ、川は凄しく渦巻きて、家は戸を閉ぢ、人は往來を絶ちて、天地は唯風と水との暴るゝに任せつ。日晡れては物の凄さも彌勝る八時の鐘を聞くより、病に悩むと見えし六右衛門は猛虎の睡覺めたるやうに起出で、密に下人の如く打扮ち、篋笠に形を晦して、我家を忍出でけるが、此時雨は小歇して、風は全く收りけるなり。渠は直に隣なる杉戸村に抵りて、彼方此方を彷徨ひしが、唯有る家より出でし童を喚び、我は野田家の使なるが、急病人ありて隣村まで渡といふ醫者様を迎へに行かねばならぬと、外に今一所行くべき方あれば、其醫者様の迎をば我に代りて托まれずや。駄賃は是なりと、十錢銀貨一片を與へければ、童は喜びて、其道を走りきぬ。

野田家と云ふは杉戸村に名たる豪農なり。信之は今しも使を受けて、大事の病家なればと取るものも取敢へず、車を命じて、險路の開を急がせつゝ、やうく變死淵に差蒐りぬ。

來れ晚しと待に待ちたる六右衛門は、遺過したる車を背面より力の限推したりければ、啊呀と云ふ間に顔れ行く人も車も絶壁を踏外して、逆巻く浪の底深く生死も分かす墮入りたりけり。

六十一 此は渡先生の車なり

翌朝村人の一箇は水増れる川中に浮きつ沈みつ人力車の流行くを見付けて、速に人々を呼集め、舟を出して引揚げたり。渠等は見るとより驚きて、這は渡先生の車なり、と同音に叫びぬ。さては先生も此水に命を失ひたまひけるか、と人は走りて信之の家を訪れけるに、昨夜杉戸村へ赴きしまゝ、未だ歸らずとありければ、誰もく涙を揮ひて世に難有くも情深かりし人の非業の死をば、謂ふ方無く悲みつゝ、我先に二十餘艘の小舟は急流に入亂れて、其死骸の搜索に努めたり。七名の巡査も出張

して力を結せしかと三時間の後、鐵に車夫の遺骸を得たるのみなりき。

此凶報に接したる勝沼分署長は飛ぶ鳥の翼も間意き心地して駈付けたりしが、渡の玄關に跳入りて、お町の顔を見るや否や、先生は如何にしたる、と叫びたり。幸ひに御別條無く、渡守の源三に助けられたまひて、其方に療養したまふ由の使來りしなり、と再び驚かされたる分署長は生きて居たるか、と雀躍しつゝ、源三の家に走りぬ。

信之はお禮に介抱されつゝ、問はるゝまゝに昨夜の顛末を語りければ、分署長は直に此村駐在の警部を訪て、云々と通じたりしが、翌日の暮方に及て、渠は二名の巡査を率ゐて、嫌疑者なる貝塚六右衛門の家に踏入りたり。這は銀貨を買ひし童より探偵せしなりけり。

六右衛門は一間の内に熱に冒されて、然も苦しげに臥したり。警部は進入りて、嫌疑の廉に因りて拘引せむとせしに、渠は病に托して飽くまで抗辯せり。看病せるお辰も、兩三日以來、悉く病に臥して、一歩も他出せざりし旨を陳べて、其無實をば訴へつ。折から一箇の巡査は裏の納屋の内にて見出せし泥塗の股引を携へ來りて、散々に詰問せり。然れども渠は知らずとのみ答へて、切に病苦を装ふを、竟に曳立て、出行

26/38

川 吹 笛 (八八一)

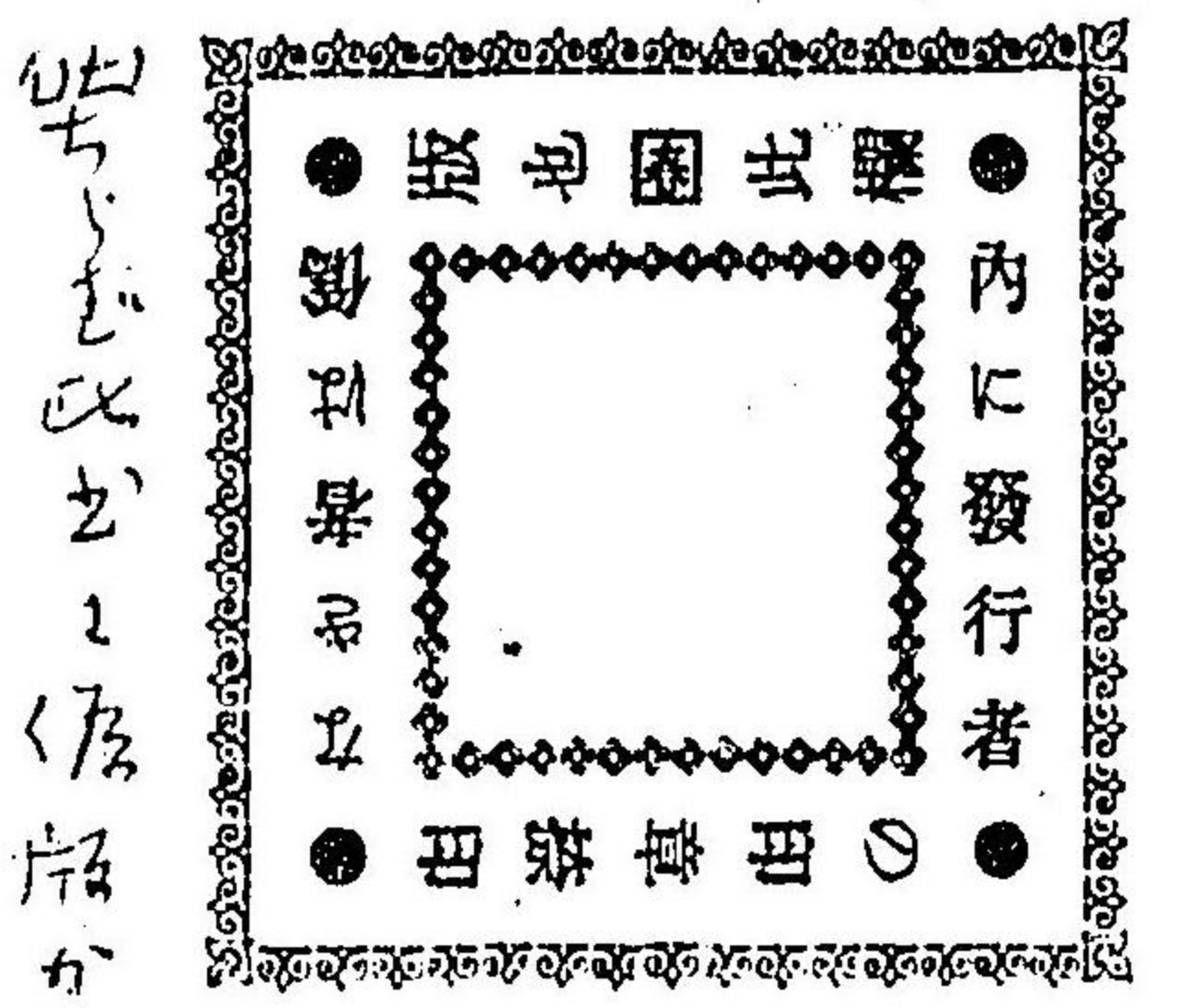
笛 吹 川 終

如何にかしけむ環は拘留中神經錯亂の躰なりしが、一夜暴に死してけり。
 * * * * *
 岩崎村の一隅笛吹川に臨める丘の上に此頃立てる新築の二階造あり。構造位置
 望俱に詩趣に富めるを見る人の羨まざるはあらざれど更に羨まるゝは此家に住
 める夫婦の身の上なり。信之とお禮は勝沼分署長の媒妁にて目出度結婚したるな
 りけり。

明治二十八年十二月十四日印刷
 同 年十二月十七日發行

笛吹川 興付
 實價金 參拾錢

版 權 所 有



此の書は、
 此の書は、
 此の書は、
 此の書は、
 此の書は、

著 者 尾 崎 紅 葉

發行者 和 田 篤 太 郎
東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者 久 米 川 治 三 郎
東京市芝區南佐久間町二丁目十七番地

發行所 春 陽 堂
東京市日本橋區通四丁目角

印刷所 國 文 社
東京市京橋區宗十郎町十五番地

電話五拾壹番

本書は不二の舎高橋氏の編纂する所にして先づ新玉の御祝儀より四季節句の遊び物より火事地震出産死亡婚嫁等に到るまで荷しくも人生の禮儀として贈答の進物は一として餘

義理
祝儀
進物案内

實價廿五錢
郵税四錢

す所なし時下歳暮新年に際し本書を一讀すれば以て妙絶なる進物の趣考を得て初春の餘興たる福袋等には別して欠く可らざるの一大奇書なり

45
295